

實業綜說皇國史

低學年用

松本彦次郎藤懸靜也
著

修正版

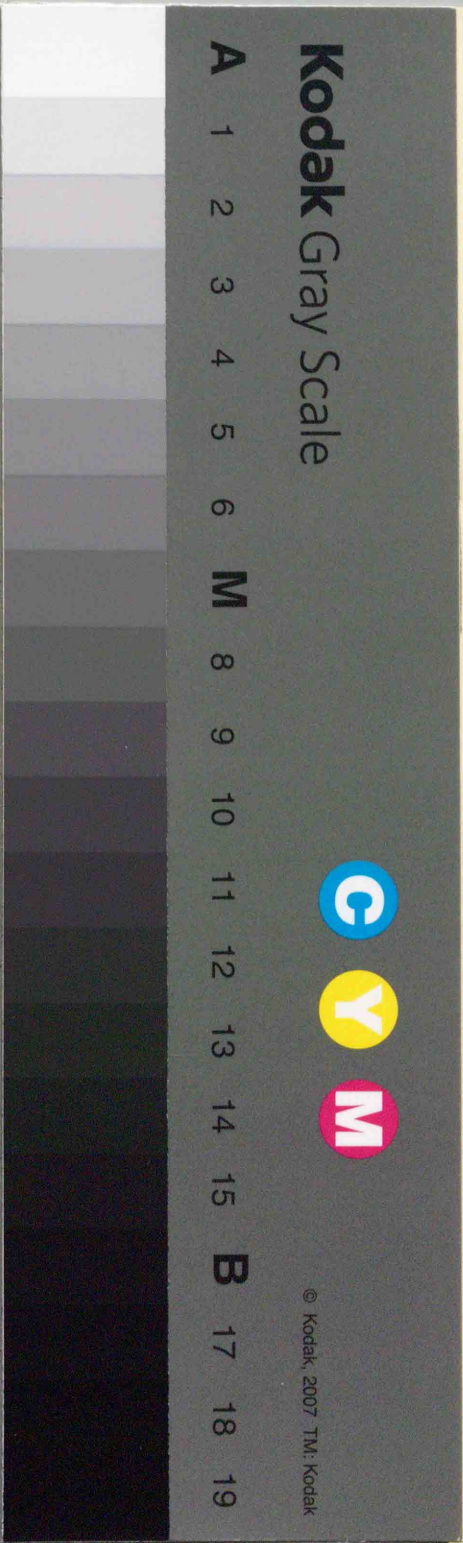
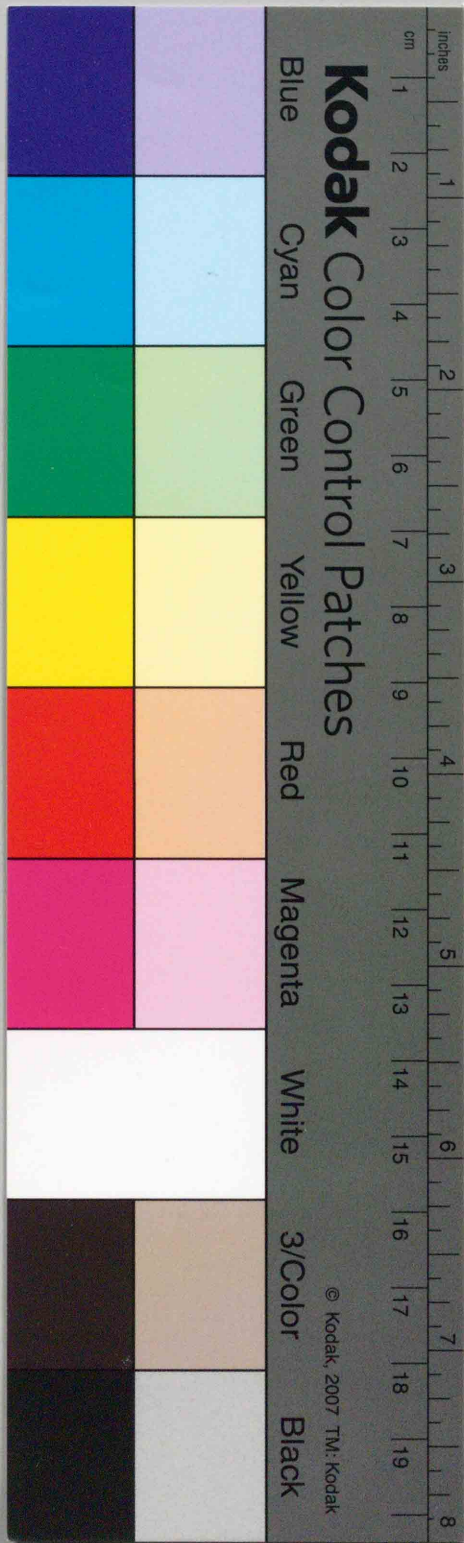
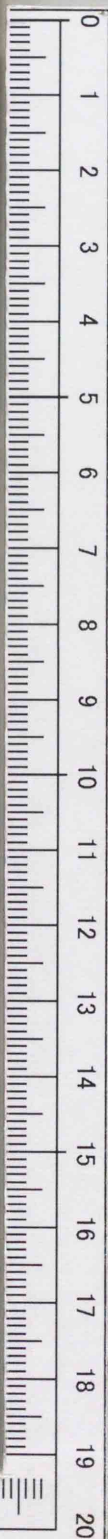
新教授要目據



東京開成館

教科書文庫
4
210
44-1939
2000074176

44
210
44



43041

教科書文庫

4
210
44-1939
20000 74176



資料室

文部省檢定濟

昭和四十年十一月十七日 實業學校歷史科用

教科書文庫

4

210

44-1939

2000074176

實業綜說皇國史

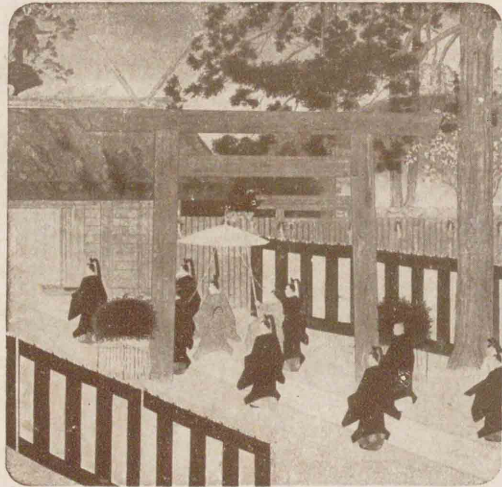
低學年用

松本彦次郎 東京文理科
大學教授

藤懸靜也 東京帝國大學
教授文學博士

著

〔實業學校用〕



明治天皇の大神宮御親謁

(本書ノ大イサハ國定規格A5判)

広島大学図書

2000074176



東京開成館

4c
210
BB14



緒言

本書は昭和十二年三月文部省所定の教授要目に準據し、實業學校用國史教科書として編纂したものである。

國體明徴、國民精神闡明のことは、國史教育に於て喫緊の急務であり、殊に時局益、重大なる秋に於て一層の慎重を要することは言ふまでもない。従つて本書は現下必須の教科書たることを期したものであり、微細な點に至るまで深い考慮を拂つたつもりであるが、特に留意した諸點は左の各項である。

一、國體を明徴にし、國民精神を涵養する趣旨に基づき、御歴代の天皇の御聖徳並に皇族の御事蹟は、周到な用意を以てこれを顯彰し奉ると共に、大義名分を嚴にし、殊に帝國憲法については、國體明徴と共に、臣民奉公の道を明らかにすることを念とした。

一、我が國民性及び國民の奉公盡忠の實踐的史實を選択記述して、特に精神史を重視する意圖を鮮明ならしめた。

一、史學の趨勢に應じ、舊來の政治戦争を中心とした體裁を改めて文化史的の叙述を多くし、特に産業發展の成跡を示して、將來産業に貢獻するの覺悟を堅持せしめることとした。

一、挿圖は國民生活を端的に理解せしめるものを選び、本文と連絡して、文化的方面に寄與することに注意し、且美的情操を喚起せしめることに努めた。

昭和十二年十二月

著者識す

實業綜説皇國史

低學年用

目次

第一篇	上古史	
第一章	神代 肇國の宏遠	一
第二章	神武天皇の御創業 皇威の發展	四
第三章	皇大神宮 敬神尊祖の美風	七
第四章	文物の傳來	二一
第二篇	中古史	
第一章	政治上の革新	二八
第二章	律令の制定	三三
第三章	奈良奠都	三六
第四章	奈良時代の文化	三八

第五章 平安時代初期の發展……………三二

第六章 藤原氏の專權……………三五

第七章 平安時代の文化……………三九

第八章 地方の情況と武士の勃興……………四一

第九章 院政……………四三

第十章 源平二氏の盛衰……………四五

第三篇 近古史

第一章 鎌倉幕府の創立……………五三

第二章 北條氏の行動……………五五

第三章 元寇……………五九

第四章 鎌倉時代の文化……………六一

第五章 建武の中興……………六八

第六章 吉野の朝廷……………七二

第七章 室町幕府の内治……………七八

第八章 室町幕府の外交……………八三

第九章 室町時代の文化……………八五

第十章 戰國亂離の社會……………八九

第四篇 近世史

第一章 織田・豊臣二氏の統一……………九七

第二章 安土・桃山時代の外交と文化……………一〇三

第三章 江戸幕府の創立……………一〇八

第四章 海外諸國との交通 鎖國……………一一五

第五章 元祿の世相 學問の復興……………一二〇

第六章 江戸幕府の中興……………一二五

第七章 江戸幕府の衰運……………一二八

第八章 尊王思想の勃興……………一三一

第九章 幕末の外交 洋學の發達……………一三五

第十章 大政奉還……………一四四

第五篇 現代史

第一章 明治維新……………一五三

第二章 立憲政治の確立 教育に關する勅語……………一五七

第三章 條約改正……………一六〇

第四章 東洋の平和とわが國……………一六二

第五章 文化經濟の發達……………一六八

第六章 わが國の世界的地位 國民の覺悟……………一七三

附錄 皇室御略系

諸氏略系

年表

實業綜說皇國史 低學年用

第一篇 上古史

第一章 神代 肇國の宏遠

●わが國體 太古に、皇祖天照大神アマテラスオホミカミがわが大日本帝國を肇められてより、萬世一系の天皇は連綿として上にましまし、御代々國民を慈しみ給ひ、國民もまた祖先以來、天皇を仰ぎ奉り、心を一にして常に赤誠を致して仕へ奉り、君民一體の美しき國體として發展し來つたのである。世界は廣く國は多しといへども、かゝる麗しき國體はわが國をおいて外に存しない。

國史を學ぶものは、古今變遷のうち、よくこの國體の尊嚴と精華

○圖 上古文化の郷土
出雲平野の全望
で、前面の川は
簸川である。遙
か島根山脈中の
○印のところ
に
出雲大社がある

大八洲國

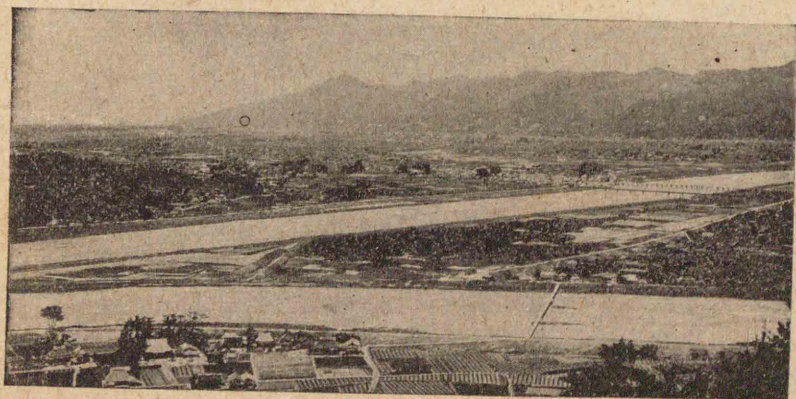
天照大神の神徳

素戔嗚尊の出雲
經營

大國主命の國土
献上

出雲大社

とを知り、肇國の精神を體し、國運の發展と
文化の興隆とに貢獻しなければならぬ。
◎天照大神 太古伊弉諾尊伊弉冉尊と申
す二柱の神が出でまして、大八洲國(わが國)を
お生みになり、天照大神、素戔嗚尊など諸々
の神々をも生ませられた。天照大神は高
天原を治めて御徳極めて高く、萬民に農業
や機織の道などの御手本を御示し遊ばさ
れ、御恵みをあまねく垂れ給うた。素戔嗚
尊は出雲に下り、その地方を治められたが、
その御子大國主命は悉くその國土を大神
に献上し、御自身は杵築宮に退かれた。今
の出雲大社はこの宮のあとである。



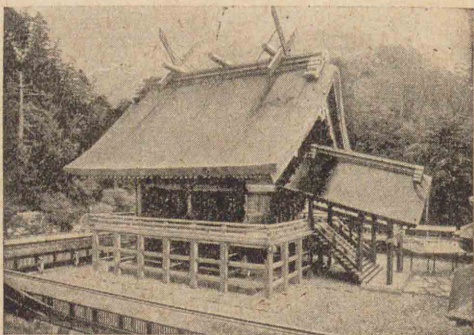
出雲平野

神勅

○圖 島根縣大社町に
あり、大國主命
を祀る

三種の神器

國體の基



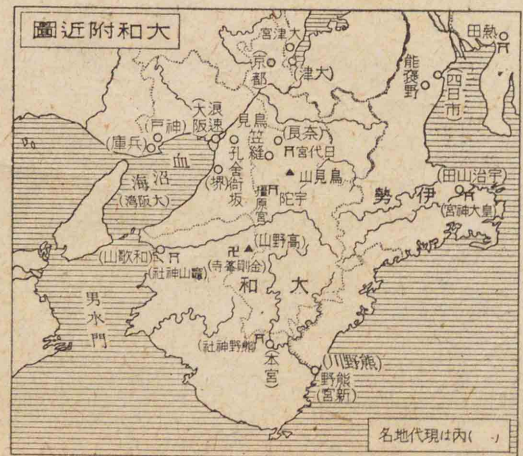
出雲大社

◎天孫降臨 そこで天照大神は、御孫瓊瓊杵
尊を御降しになることとなり、尊をお召しに
なつて、
豊葦原の千五百秋の瑞穂の國はこれ吾が
子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫
就いて治らせ。ささく。寶祚の隆えまさ
んことまさに天壤と窮りなかるべし。
と仰せられ、親しく八坂瓊曲玉、八咫鏡、天叢雲
劍の三種の神器をお授けになつた。天壤無窮の皇運はここに始ま
り、世界に類ひなきわが國體の基は定まつた。
尊は神勅を奉じ、三種の神器を捧げ、天兒屋根命、太玉命等の多くの
神を随へ、天忍日命等を前驅として、日向にお降りになつた。これよ
り御子彥火、火出見尊、御孫鸕鷀草葺不合尊まで御三代の間、この地に

神代

あつてわが國を治め、廣く恩徳をほどこされた。これまでを神代と申し上げる。

第二章 神武天皇の御創業 皇威の發展



大和附近圖

攝原神宮

御東遷の思召

①御東征 神武天皇は初め日向にましました。が、國の中央に遷つてあまねく萬民を安んじ、皇祖神勅の御精神を全うせんと思召し、御親ら軍を率ゐて日向を發し、多くの年月の間幾多の御困難と闘はせられ、大和に遷り給うた。

②御即位 天皇は都を畝傍山の東南攝原に奠めて宮をお造りになり、神器を宮中に奉安して、始めて即位の禮を挙げさせられ、事代主命

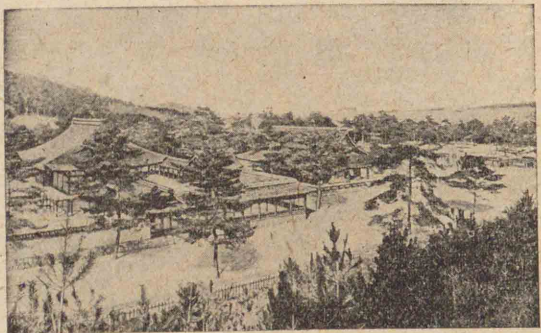
紀元節

明治六年に神武天皇の御即位の日を太陽曆に換算して二月十一日に當て、これを紀元節と名づけて祝日とされた。

祭政一致

政治の組織

奈良縣畝傍町にあり、神武天皇五十鈴媛命を祀る。



攝原神宮

(大國主命の御子)の御女五十鈴媛命を皇后に立て給うた。この年が皇紀元年で、西洋紀元に先だつこと六百六十年である。

③御政治 天皇は御即位後、祭場を鳥見の山に立て、嚴に皇祖をお祭りして、御親ら大孝をお示しになり、御政治にも神を祭り給ふことを最も重んぜられた。そして天種子命と天富命に専ら祭祀を掌らせ、道臣命と可美眞手命とに兵を率ゐて朝廷を守らしめ、なほ地方

國造・縣主 神武天皇祭 明治六年に天皇崩御の日を太陽曆の四月三日に當て、これを神武天皇祭日と定められた。

には國造・縣主などを置いて民を治めさせられた。ここに於て國內の統一は全く成つた。

④崇神天皇 崇神天皇の御代

天兒屋根命	天種子命	中臣氏	祭祀・政治
大玉命	天富命	齋部氏	
天忍日命	道臣命	大伴氏	宮殿の警護
饒速日命	可美眞手命	物部氏	

四道將軍

大彥命北陸

武甕川別命

(東海)

吉備津彥命

(西道)

丹波道主命

(丹波)

弓弭調・手末調

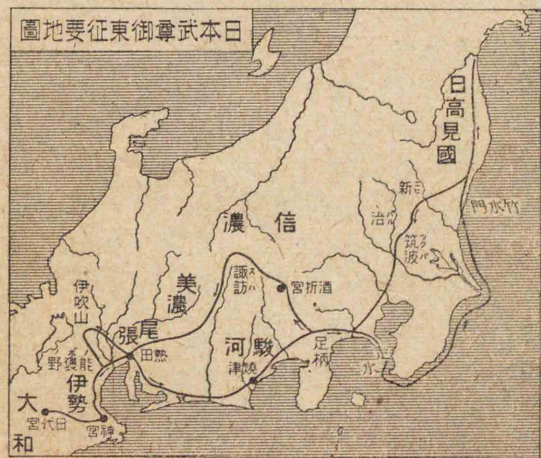
産業の御奨勵

熊襲と蝦夷

景行天皇の熊襲御親征

遠くの地方はなほ皇化が及ばなかつたので、天皇は特に四人の皇族の方々を各地に遣はして、廣く國民を教化せしめられた。これを四道將軍といふ。天皇はまた人口を調べ租税を定めて、男には弓弭調女には手末調を課せられた。なほ天皇は、農は國の大本と仰せられ、池溝を掘つて農業を勧め、船舶を造つて運送の便を圖り給うた。

垂仁天皇 次の垂仁天皇はまたますます水利の便を圖り、民業を勵まされた。これより産業は大いに興り、人民の生活も豊かになり、皆太平を楽しみあつた。
景行天皇 然るに九州南部の熊襲と、東國の蝦夷とは、化外の民であつた。そこで景行天皇は、御親ら九州にお下りに



日本武尊の熊襲御平定
日本武尊の東國御平定

なつて熊襲を平らげ給ひ、更に皇子日本武尊を遣はしてこれを平定せしめられた。天皇はまた日本武尊をして東國の蝦夷をも討たしめられた。

内治の整頓 かくて皇威が南北に擴がつたので、成務天皇は中央には武内宿禰を始めて大臣に任じて大政を輔けさせ、地方は山河の形勢によつて國縣の境を定め、内治を整へ、國家の統一を進められた。

第三章 皇大神宮 敬神尊祖の美風

皇大神宮の御創立 さきに天照大神が、八咫鏡を瓊瓊杵尊にお授けになる時、この鏡を見ることわれを見るが如くせよと仰せられたので、御代々これを宮中に奉安して祭り奉り、常に同じ御殿で政を聞召された。

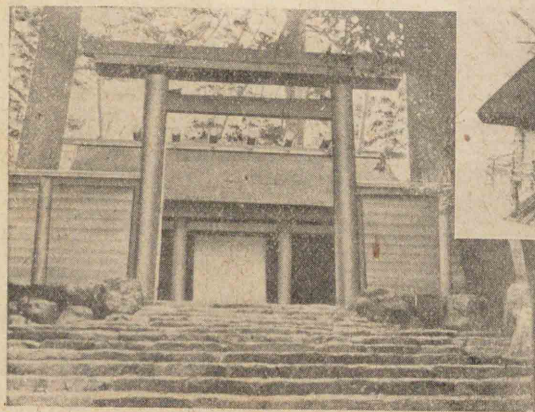
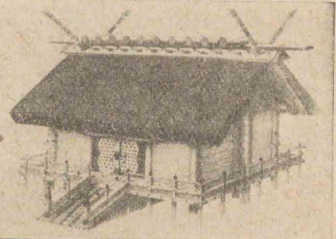
崇神天皇は敬神の御心深く、三種の神器と御殿を共にすることを

笠縫邑
宮中の御鏡・御
劔

宇治山田市にあ
る。右は皇大
神宮正殿

倭姫命

皇大神宮の起



畏れ多く思召され、御鏡を天照大神の御神體として、これに天叢雲劔をそへ、大和の笠縫の別宮に祭らしめ給ひ、宮中には、新に御鏡・御劔のうつしを造つて八坂瓊曲玉と共に安置し給うた。御歴代皇位のみしるしとして永く傳へ給ふ三種の神器は皇即ちこれである。

大 ついで垂仁天皇は、更に御鏡と御劔と神を伊勢の五十鈴川の清い流のほとりに遷し奉り、こゝに宮を建て、皇女倭姫命を齋宮として仕へ奉らしめられた。これが皇大神宮の起である。

その後、雄略天皇の御代、農業養蠶の神にまします豊受大神を丹波から伊勢に

豊受大神宮

皇大神宮は、二十年毎に社殿を造り替へ、これに遷し奉る。このことは古くより定められ、今なほ行はれてゐる

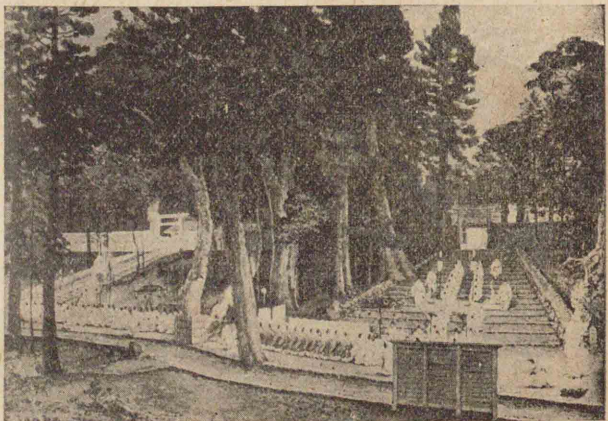
草薙劔

氏神

迎へて、皇大神宮の近くにお祭りになつた。後世、皇大神宮を内宮、この宮を外宮とも申し上げる。

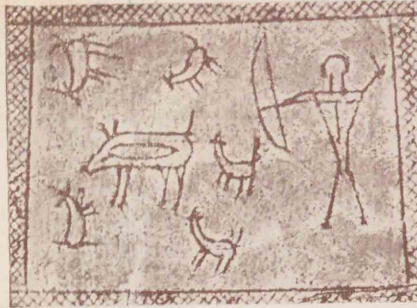
熱田神宮 日本武尊が蝦夷を御征伐せられる折、まづ皇大神宮に詣で、御叔母倭姫命から天叢雲劔を戴いて東國に下り、その御威徳によつて賊難を拂ひ給うたが、歸途、これを尾張にお置きになつた。その御劔を草薙劔と申し上げ、熱田神宮にお祀り申してゐる。

敬神尊祖の美風 御歴代天皇の敬神尊祖の御心を奉體して、國民もまた神を敬ひ、祖先を尊ぶ美風があつた。國家の祖神として皇大神宮を尊崇することを敬神の第一義とし、更におのゝ氏神を祭つ

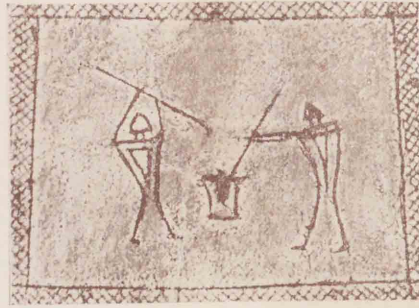


皇大神宮式年遷宮祭

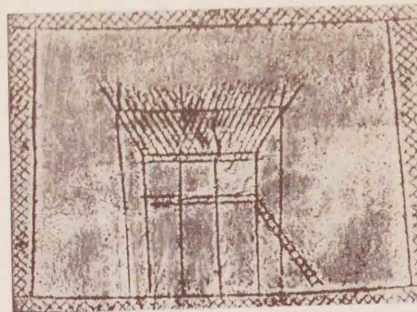
俗風の古上



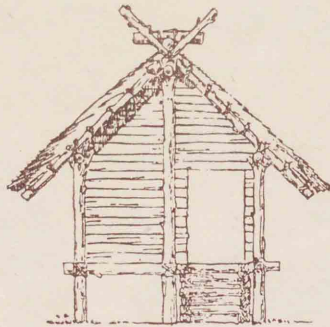
獵 狩



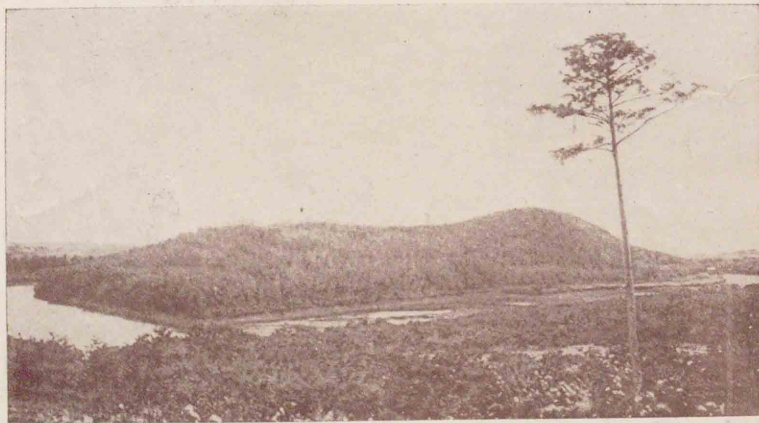
業 農



屋 家



屋 家



(村見馬郡城葛北縣良奈) 墳 古

職 建 食 裝 裝 衣
業 築 事 飾 飾 服

忠孝一致

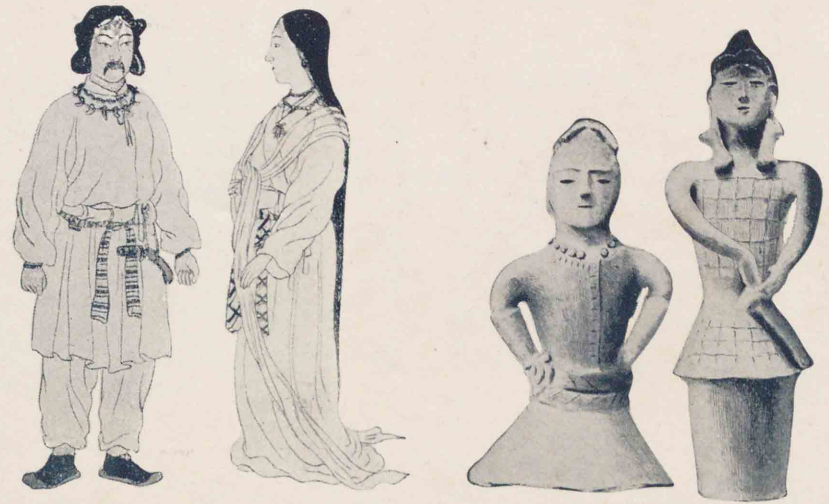
第一篇 上古史

て厚くこれに奉仕し、祭祀の禮を怠らなかつた。かくして祖先に孝なることは、即ち君國に忠なる所以となり、忠孝一致の道は全きを得たのである。

古墳 敬神尊祖の美風をもつわが國民は、君親の葬儀を怒に行ひ、陵墓も概ね廣大に、しかも鄭重に造られた。これらの古墳から時々發見される埴輪や種々の遺物は、上古の國民生活や風俗を知る大切な資料である。

④ 上古の國民生活 上古のわが國民は簡素な生活をしてゐた。衣服は概ね麻や楮の絲で織つた筒袖の上衣を着、男は禪をはき、女は裳をつけ、曲玉や管玉などを連ねて頸や腕の飾とし、髪は男は美豆良に結び、女は下髪または鬢に結つた。食事は大抵朝夕の二食で、食器は素焼の土器を用ひ、家は地面を掘つて、茅で屋根をふき、藤や葛などで梁柱を結んだ。職業としては、漁獵も營まれてゐたが、農業は田を耕すまで進んでゐた。

俗風の古上



装束の古上

偶土輪埴



玉小



玉曲



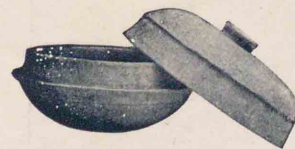
玉子切



鏡



兜



器土



器土



器土

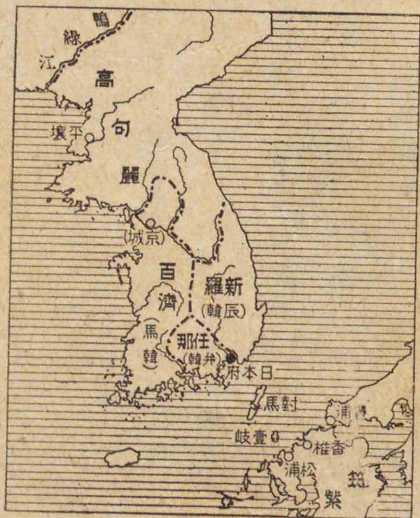
第四章 文物の傳來

朝鮮半島の形勢

鹽乘津彦

任那日本府

●朝鮮半島の服屬 わが國と朝鮮半島との交通は、早くから開けてゐたが、皇化の廣まるに従つて、その關係はますます深くなつた。朝鮮半島には北に高句麗、南に新羅、百濟、任那などの諸國が並び立つてゐた。任那は新羅に侵され、保護をわが國に求めたから、崇神天皇は鹽乘津彦を遣はしてこれを鎮めしめられた(六二)。これが任那日本府の起である。ついで、紀元八百六十年に、神功皇后が、新羅を征定せられると、百濟、高句麗の諸國も相ついで服屬したので、これよりわが國は任那に日本府を置いた。かくて皇威



圖立分國三・韓三

は海外にも振ひ、早くから朝鮮半島に傳つてゐた支那の學問や工藝が盛にわが國に受容せられ、わが文化の發達を助けることとなつた。

①學問の傳來 應神天皇の御代、百濟から阿直岐が來朝し、ついで博士王仁も來て朝廷に論語と千字文とを獻じた(五九四)。皇子菟道稚郎子はこれらについて學問を御研究になつた。

これがわが國に漢學の興つた初めである。その後、支那人阿知使主も多くの人を率ゐて朝鮮からわが國に歸化し、その子孫は王仁の子孫と共に文氏といひ、代々朝廷に仕へ記録を司つた。

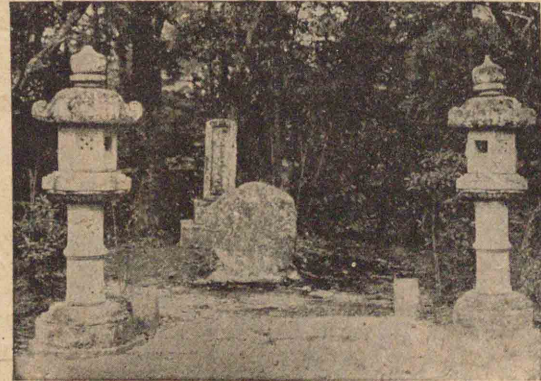
阿知使主

文氏

王仁の子孫は河内(み)にゐたので、西文氏といひ、阿知使主の子孫は大和(み)にゐたので、東文氏といつた。

秦氏

②工藝の傳來 同じ御代に、支那の人弓月君は多くのの人々を連れて百濟から歸化し、進んだ織物の業を傳へた。その子孫を秦



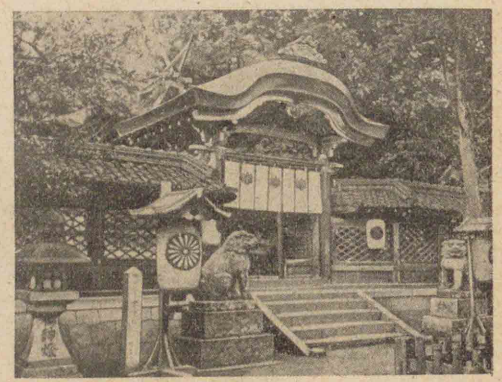
(村原菅郡内河北府阪大) 墓の仁王士博

大阪府豊能郡池田町にあり、應神天皇の御代支那より來朝した機織の祖吳織、漢織を祀る。

仁德天皇の産業御奨勵

雄略天皇の産業御奨勵

わが工藝の進歩



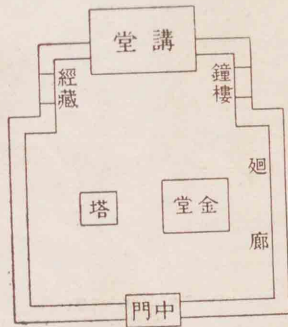
社神太居伊

給ひ、秦氏を諸國に配つて産業の發達を圖り給うた。

雄略天皇も産業に御心を用ひさせられ、皇后も御親ら蠶を飼つて下々に模範を示し給うた。天皇はまた百濟から陶工、畫工、錦織の職工などをお召しになり、更に南支那から機織、裁縫の工女を招かれた。かくて大陸の技藝が輸入されて、わが國の工藝の發達を助けた。



法隆寺全景



法隆寺平面圖



法隆寺壁畫の一部



法隆寺金堂釋迦三尊佛

佛教を御研究になり御親ら經典を講ぜられまた三經義疏を著はされてわが國情に鑑みて註釋させられた。これらの御著書の初めには決して外國の本を模倣したものでないとお書きになつてゐられる。



聖德太子

聖德太子の佛教御研究 聖德太子は深く推古天皇の御代に、皇太子聖德太子が攝政となり給ひ、篤く佛教を信ぜられ、これを弘むることに力を盡されたから、佛教は次第に盛になつた。

佛教の傳來

大臣と大連

聖德太子の御奨勵

この御畫像は帝室御物で、中央が聖德太子、左右はその二王子であるといはれる

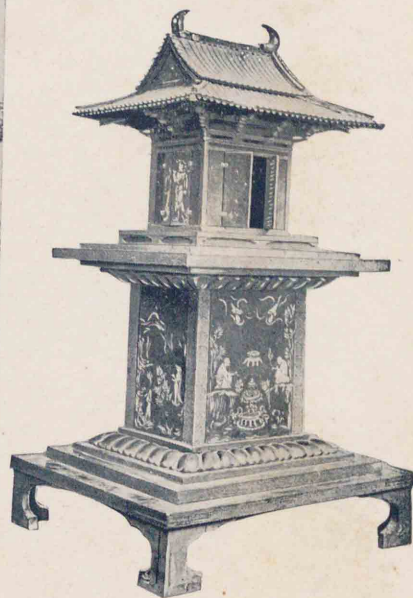
四 佛教の傳來

佛教は印度の釋迦牟尼の始めた宗教で、支那を経て朝鮮に傳はり、欽明天皇の御代に(一三)百濟の聖明王が佛像・經論を獻じ、その功德を奏聞した。天皇は拜佛の可否を群臣にはかり給うたところ、大臣の蘇我稻目と大連の物部尾輿とは、互に崇佛・排佛の論を

闘はし、兩者の争は續いた。やがて



法隆寺五重塔



玉蟲厨子(法隆寺蔵)



天壽國曼陀羅(中宮寺蔵)

推古時代

⑤ 美術・工芸の發達 佛教が盛になり、四天王寺・法隆寺等の大寺院が建立せられるにつれて寺工・佛工・畫工・瓦工・漆工・金工などの技術家も渡來して、わが國の建築・繪畫・彫刻・刺繡などの美術・工芸の發達を助けた。佛工には鳥佛師(鞍作、止利)、畫工には高句麗から來朝した僧曇徴(トシテウ)などが殊に有名であつた。この時代を美術史上では推古時代(飛鳥時代ともいふ)といひ、力強いことを特色としてゐる。

法隆寺 法隆寺は推古天皇が聖德太子と共に、用明天皇の御遺命によつて建立せられたもので金堂・五重塔・中門は今もなほ昔のまゝであるといはれ、世界最古の木造建築である。また金堂内に安置せられてある金銅釋迦三尊佛は鳥佛師の作にかゝり、壁畫はやゝおくれで描かれた。その他玉蟲厨子の密陀繪・中宮寺の天壽國曼陀羅など、いづれも世界に誇るべき藝術である。

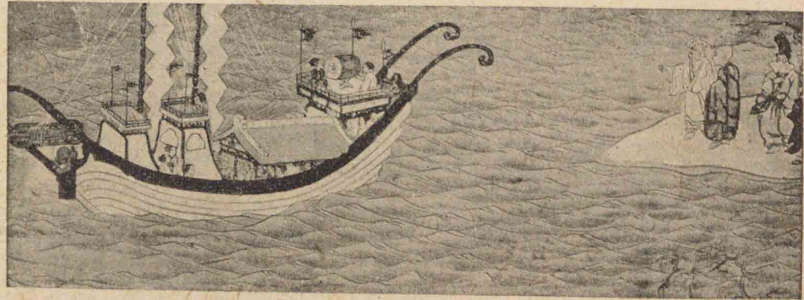
⑥ 支那との交通 支那の文物は、これまで多くは朝鮮半島を経てわが國に傳はつたが、推古天皇の御代に至り、聖德太子は支那とも隣國

遣隋使

國書

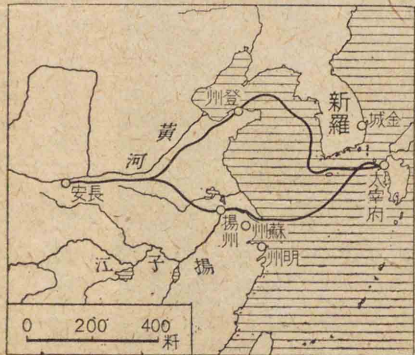
東征傳緣起繪卷
の一部

留學生



遣唐使の渡海

の好を修め、直接にその文物を取入れようとせられて、小野妹子を隋に遣はし、始めて支那との國交をお開きになつた(六二)。そしてその頃國威を誇つてゐた隋に對し、國書には、日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきか。とお書きになつた。翌年妹子の歸朝の時、隋は答禮使をおくつた。その歸る時、太子は再び妹子を隋に遣はし、南淵請安、高向玄理、僧旻等の留學生八人を伴はせて、彼の地の制度、文物を研究せしめられた。



遣唐使航路圖

遣唐使

隋は間もなく亡び、唐となつたが、舒明天皇は大上御田鍬を遣はして、唐とも國交をお開きになつた。これが遣唐使の始めである。その後久しい間たび、遣唐使をおくり、支那の制度、學問、藝術を受容し、わが國情に合はせて醇化せられたから、わが政治、風俗等は、その影響を受けて大いに改まつた。

第二篇 中古史

第一章 政治上の革新

職業の世襲
豪族の専横

冠位十二階
憲法十七條

國史の御編纂

徳仁神信義

● 社會組織の弊害 元來わが國では、氏を以て血筋を區別し、氏毎におのゝ一定の職があつてこれを世襲する習慣であつた。されば人才があつてもその家柄でなければ用ひられず、地位が高くて勢力のある家は、いづしか多くの土地・人民を私有し、權を恣にする傾を生じた。中でも蘇我・物部兩氏の如きは勢が最も強かつた。

● 聖德太子の新政 聖德太子はこの有様を御覽になり、萬世一系の天皇御親政のわが國體に基づいて、政治を一新しようとせられた。即ち冠位十二階を定めて人材登用の道を開かれ、憲法十七條を作つて官民の心得を教へ、國體を明らかにし、また天皇記・國記などの歴史を御編纂になつた。かく太子は種々の新政を行はれた。

冠位十二階とは大德冠・小德冠・大仁冠・小仁冠・大禮冠・小禮冠・大信冠・小信冠・大義冠・小義冠・大智冠・小智冠のことで冠の色によつて上下の別を明らかにしたものである。また憲法十七條中の主なる簡條は、(一)和を以て貴しと爲し、忤ふことなきを宗と爲す。(二)篤く三寶を敬へ。(三)詔を承けては必ず謹め。(三)國に二君なく、臣に兩の主なし。率土の兆民は王(天皇)を以て主と爲す等である。

十七階冠法
一 以和為貴、不爾、君之有違、于法、上相、
任、新、於、論、中、則、事、理、自、有、何、事、不、失、
二 曰、篤敬三寶、佛、法、僧、也、此、三、法、
也、於、國、之、後、宗、何、世、何、人、非、貴、是、在、人、也、
三 曰、詔、出、於、天、下、歸、三、寶、何、以、且、極、

憲法十七條の一節

● 蘇我氏の滅亡



蘇我氏は物部氏が倒れ、殊に聖德太子のお薨れになつた後は、次第に權勢を振ひ、馬子の子蝦夷、その子入鹿は惡逆を極め、僭上の行ひさへあつた。中大兄皇子は蘇我氏の専横を憤り、中臣鎌足と力を協せ、大極殿に入鹿を誅し給うた。ついで蝦夷も自殺したので、

蝦夷・入鹿の惡逆
中大兄皇子の國體擁護の御志

こゝに蘇我氏は亡び、政治の上に革新の時が到来した。

④大化の改新 孝徳天皇は皇極天皇の御譲りを受けて即位し給ふと、聖徳太子の御精神をうけついで、國政の大改革を企てられた。天皇は始めて公に年號を立てて大化とし(〇五三)中大兄皇子を皇太子となし給うた。皇太子は隋唐の制度・文物にくわしい高向玄理・僧旻を國博士として改革の議に與らせ、大化二年正月に改新の大詔を發せられた。

官制を改めて、中央には内臣(鎌足を)左大臣・右大臣等を置き、地方には國司・郡司を置き、これまで官職は世襲してゐたのをやめて、これらの官吏には才能ある人材を登用して任じた。また豪族の私有してゐた土地・人民を朝廷に收めて公地・公民に改め、戸籍を作つて班田收授の法を立て、税法を定めて租・庸・調の法を設けた。かくて天皇親政の實を擧げ給ひ、社會の面目を一新せられた。世にこれを大化の改新

改新の大詔

年號の初

官制

中央：内臣・左
右大臣等
地方：國司・郡
司

公地・公民
班田收授の法
租・庸・調

一新の御政治

といひ、明治維新と相並ぶ肇國以來の一大革新である。

班田收授の法とは全國の土地を男女六歳に達すると男には二段女にはその三分の二を班ち與へて耕作させ、六年毎に收授する制度で、その授ける土地を口分田といつた。また租とは田地の收穫の中からその一部を納めること、庸とは人夫を出させ、またはその代りに米布などを納めること、調とは織物その他土地の産物を納めることをいふ。天下の土地人民を朝廷に收め給ひし時皇太子中大兄皇子は、天に二つの日なく、國には二人の君はない。それ故天下をたもち萬民をお使ひになるのは、たとへば天皇ばかりである。と申し上げて、率先して御自分の土地人民を天皇にお還しして模範をお示しになつた。

⑤革新の發展

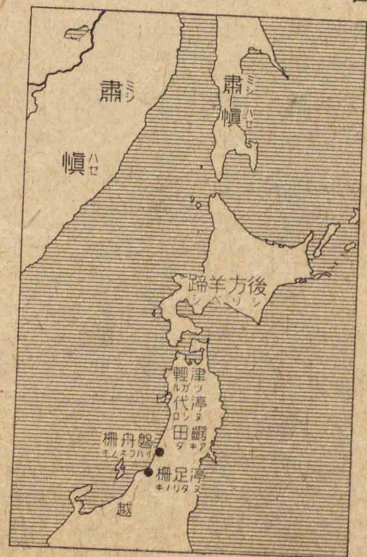
孝徳天皇崩御の後、皇極天皇は再び即位せられた。齊明天皇と申し上げる。中大兄皇子はなほ皇太子として政をお輔けになり、外に向つても新政の方針をお立てになつた。(一)蝦夷の服屬 阿倍比羅夫をして日本海方面の蝦夷を従へ、進んで遠く肅慎の賊をも征して皇威を伸張せしめられた。(二)半島の經營中止 新羅

齊明天皇

蝦夷の服屬

朝鮮半島の經營
中止

とこれを援ける唐との壓迫に苦しんでゐた百濟を救はうとせられ、齊明天皇は皇太子と共に筑紫にお進みになつた。後、天皇は朝倉の行宮に崩ぜられ、百濟もまた亡んだ。天智天皇(中大兄)は深く内外の情勢を察し給ひ、朝鮮半島から軍を引あげ、専ら内治に力をお用ひになることゝなつた。こゝに於て久しい間わが支配をうけてゐた朝鮮半島は、しばらくわが國から離れるに至つた。



河倍比羅夫の北征要地圖

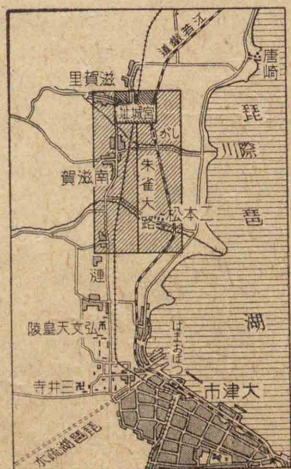
内治を専らにせらる

第二章 律令の制定

●律令の制定 天智天皇は近江の大津に都をお遷しになり、藤原鎌足等に命じて種々の法令を定められた。世に近江令といふ。また

近江令

戸籍を改め、學校をおこし、御親らお作りになつた漏刻(計水時)を置いて時間を勵行せしめられるなど、大いに改新の實を擧げられた。



大津京

近江令はその後たび／＼改修せし

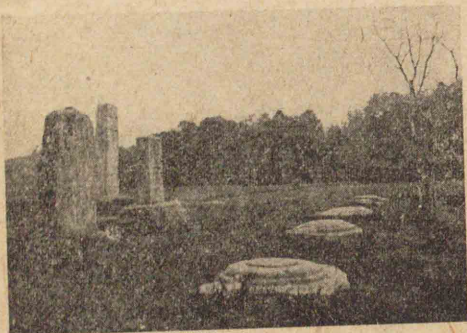
められ、大寶元年(六三)に完成した。世にこれを大寶律令といふ。

この律令は唐の制度を参考したが、その根本に於ては、わが國の習慣を重んじて定められたものである。

●大寶律令の大要 官制は中央に神祇・太政の二官を設け、太政官には太政大臣・左大臣・右大臣・大納言などの官を置き、その下に中務式

官制

*神祇官は神を祭ることを掌る官で、諸官省の外に獨立してゐた。これはわが國固有の敬神の心の現はれたものである



太宰府都府樓の址

兵制

學制

部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮内の八省があつて、政務を分掌した。地方には國司・郡司があり、九州には特に太宰府を置いた。すべてこれらの官廳には長官・次官・判官・主典の四部官があつた。また徴兵の制をしき、京都に衛府、諸國に軍團、邊要の地に防人を配つて警備に任せしめ、教育には帝都に大學、諸國に國學を設け、儒教・歴史・法律・算術などを授けて官吏を養成させた。刑罰は笞・杖・徒・流・死の五等に分れ、君父に對する罪を最も重くした。

第三章 奈良奠都

平城京
遷都の理由

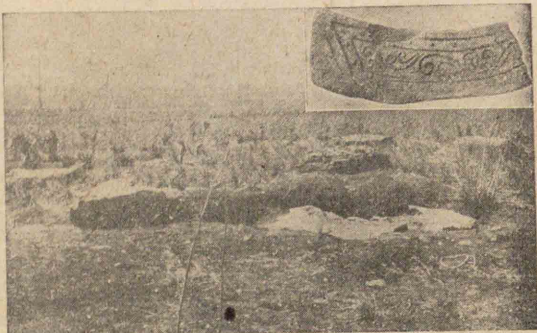
●奈良奠都 元明天皇は、和銅三年(七〇三)都を奈良にお奠めになつた。これを平城京といふ。これより以前はすべて簡素で、御代の改まるごとに皇居をお遷しする風があつたが、大化の改新より後、國運が進んで政治の規模も大きくなり、支那との交通もますます盛になつた。

奈良時代

●(下) 平城京は東西約四、四軒、南北約四、九軒あつた。宮城は北部の中央にあり、朱雀大路で左京右京に分れ、兩京おのおの東西は四坊、南北は九條に分れてゐた。

●(上) 東京府北多摩郡國分寺村にある。散在する石は柱の礎石で、瓦はその附近から掘り出したものである。

國分寺

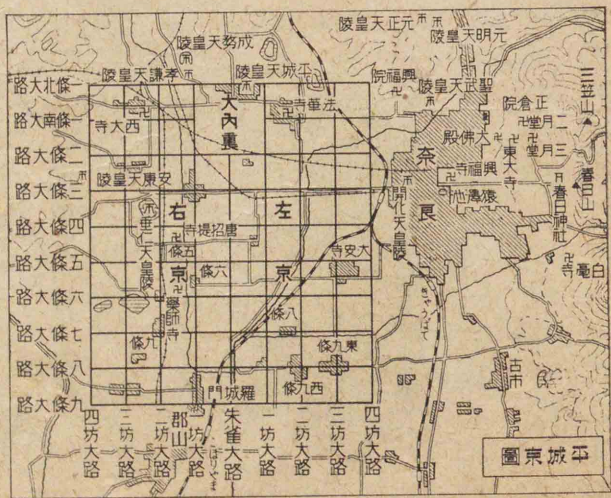


瓦の時當と跡遺寺分國藏武

から、こゝに宏大な都を営まれるに至つたのである。これより御七代七十餘年の間概ねこゝが帝都であつたから、この間を奈良時代といふ。

●聖武天皇と 光明皇后 奈

良時代に於て文化の最も開けたのは聖武天皇の御代である。天皇は皇后と共に國土の安穩を祈り、かねて萬民を教化せんとの思召から、國毎に僧と尼との兩國分寺を建てさせ、大和の國分



施藥院・悲田院
信貴山縁起の繪
巻物による

寺としては東大寺を建て、金銅の大佛を安置された。かくて佛教はいよ／＼盛になり、慈善事業も大いに起り、施藥院・悲田院などが設けられた。

行基は和泉の人で、社會教化につくしたから時の人は彼を菩薩と崇めた。像は今奈良の唐招提寺に安置してある

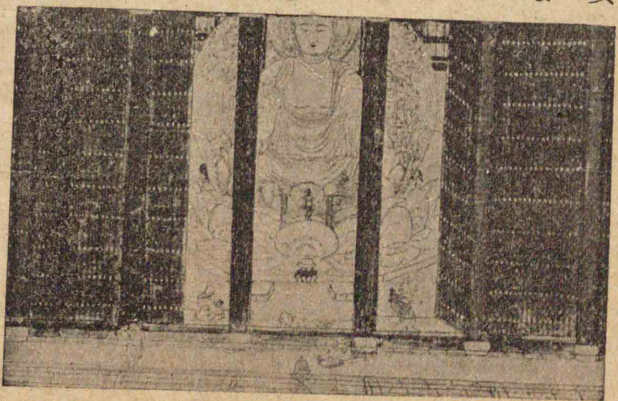
行基
鑑眞



行基

も傳はり、都には多くの寺院も建てられた。學徳のすぐれた名僧も多く現はれ、殊に行基は廣く諸國を廻つて教を弘め、公益を圖り、また支那から來朝した鑑眞は、佛教の道徳をすゝめて上下の

佛敎の利弊 佛敎は國家の保護によつて隆盛に赴くと共に、種々の宗派



東大寺大佛殿

佛教興隆の一面
道鏡

和氣清麻呂の忠烈

光仁天皇
東京帝室博物館
藏

尊信を受けた。

かやうに佛教の興隆は文化の發達をも助けたが、一方には僧侶にして政治に喩を容れ、たゞ世を騒がすものもあつた。中にも道鏡は稱徳天皇の御代に威權をほしいままにし、遂に無道の望を懷いたが、和氣清麻呂の忠烈によつて忽ち挫かれてしまつた。

宇佐八幡の神教「我が國は開闢よりこのかた君臣定りぬ。臣を以て君とすること未だこれあらざるなり。天つ日嗣は必ず皇緒を立てよ。無道の人は宜しく早く掃除すべし。」(續日本紀)



和氣清麻呂

四 弊政の改革 光仁天皇がお立ちになると、道鏡を流し、清麻呂等を擧げ用ひられ、また大いに財政を整へ、種々前代の弊政をお改めになつた。

第四章 奈良時代の文化

● 學問の興隆 奈良時代に至り、わが國の學問は大いに發達した。吉備眞備、阿倍仲麻呂は共に唐に留學し、その才學は唐人にも褒められたほどであつた。

● 國史地誌の編纂 わが國民は、祖先以來の歴史を古くから語り傳へる風習があつたが、學問が進み、國家の發展するにつれて、國史の編纂が行はれるやうになつた。天武天皇は古い言ひ傳への忘れられることを惜しまれ、稗田阿禮にこれを誦ましめられた。奈良時代に入ると、元明天皇は太安萬侶に詔して阿禮の誦むところ



吉備大臣入唐繪圖

吉備眞備・阿倍仲麻呂

祖先を重んずるわが國民

吉備大臣入唐繪卷による

古事記
日本書紀

風土記
常陸播磨出雲肥前・豐後の五國の風土記は今も残つてゐる

萬葉集

紀貫之筆と傳へられるもの

萬葉假名

によつて、國語のままに記さしめて古事記(神代より推古天皇までの歴史)をつくらせ、元正天皇は舍人親王、太安萬侶等をして更に漢文で記した日本書紀(神代より持統天皇までの歴史)を撰ばしめられた。元明天皇はまた諸國に命じて、古傳物產地勢などを記した風土記を奉らしめられた。これがわが國最初の地理書である。

● 和歌の發達 和歌は日本人の心情をあらはすものとして、早くから國民の間に行はれてゐた。萬葉集は主に奈良時代の和歌を集めたもので、今に残つてゐる最古の歌集であり、上古の國民の生活がありのまゝに歌はれてゐる。

天皇賜海上女王御歌一首
赤約之越馬柵乃織結師情者我も念思
右今兼此歌詠古之依也但し時當使
賜前手歌
海上王奉和歌一首
辨ら川夜音之速音亦也天之神幸
手開之好毛

萬葉集は漢字の音と訓とを以て國語を記した。これを萬葉假名といふ。



殿佛大寺大東



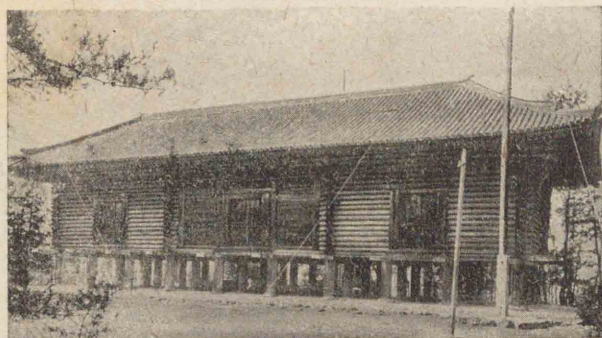
(藏寺提招唐)佛那舍盧



(藏堂華法寺大東)像神剛金鏡

天平時代

正倉院は奈良東大寺の境内にある校倉造の寶庫で三千餘點の寶物が帝室御物として納められてゐる



院倉正

海行者美都久屍山行者草牟須屍大皇乃敝爾許會死米可弊里見波勢自 大伴家持

④ 美術工藝 佛教の隆盛に伴ひ、美術・工藝は頗る發達し、聖武天皇の頃は美術史上天平時代といはれる。殊に彫刻には豊麗優美なものが多い。これらの美術・工藝品は、今もなほ奈良の正倉院や、奈良附近の寺院に於て見られる。なほこの頃既に印刷術が行はれ、稱徳天皇の御代に作られた百萬塔に納めた經文は、世界最古の印刷物である。

⑤ 風俗の變遷 美術・工藝の進歩するにつれて、都の風俗は次第に華やかになつた。衣服も左衽を改めて右衽とし、袖が廣く裾の長い優美なものとなり、家屋も瓦で葺き、柱を赤い繪具で塗つた。しかし地方はまだ開けず、人

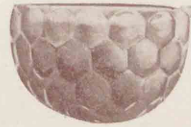
正倉院御物



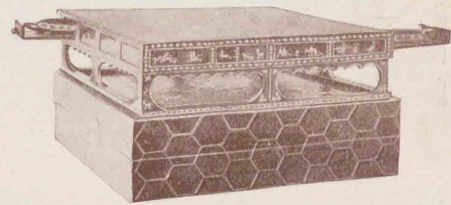
白銅圓鏡



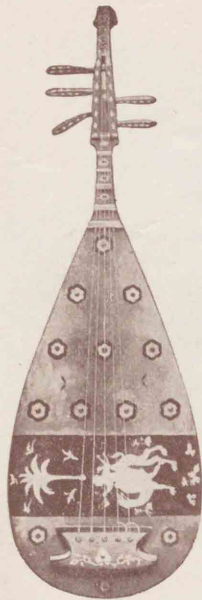
蓮華盤



玻璃碗



棊局



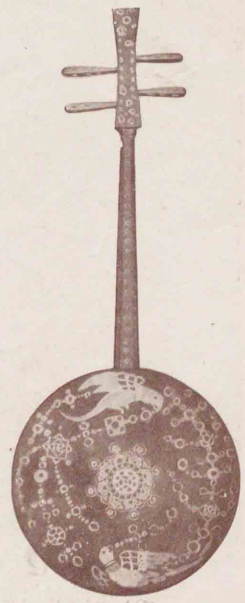
琵琶



瀨火鹿對下樹



瀨象樹下



阮威

圖(上)
同は銅の略、珎は寶の略であらうといはれてゐる



和同開珎

民は一體に素朴であつた。
貨幣制度の發達 古くは物々交換のため米布等を以て貨幣の代用としたが、元明天皇の御代の初めに、和同開珎といふ錢を鑄させ、次第に民間に通用せしめられた。かくて商業は發達し、平城京には東西の市さへ設けられた。以上二期考査

第五章

平安時代初期の發展

第二期考査

一 平安奠都

桓武天皇は政治の更新を圖り給ひ、交通の便のよい今の京都の地に都を奠め、延暦十三年(五四)にお遷りになつた。これが平安京で、平城京より規模が更に大きく、いよゝ皇



奈良時代貴族の風俗

圖(下)
正倉院御物の尺八に彫刻されてあるものによる

平安京

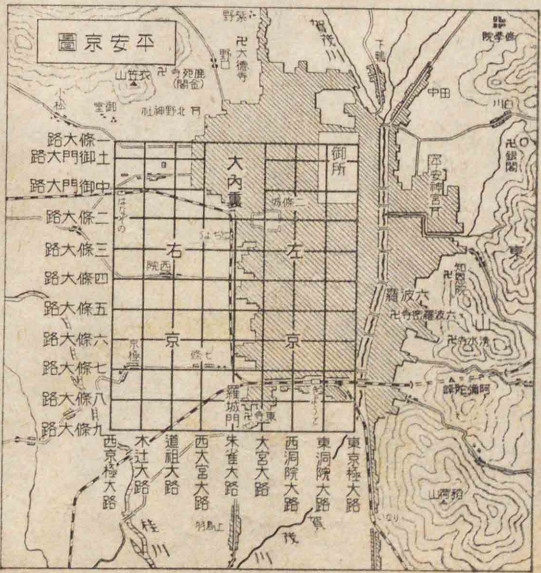
平安時代

坂上田村麻呂の蝦夷征伐

渤海の入貢

威の隆盛を示した。これから凡そ四百年の間、京都は常に政治の中心であつたから、この間を平安時代といふ。

③ 蝦夷と渤海 天皇はまた坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じ、これまでしばしば叛いた蝦夷地の經營に當らしめられた。この後、田村麻呂の築いた膽澤城を鎮守府として蝦夷を治めたので、東北地方は全く定まり、土地の開拓もいよゝ進んだ。また滿洲の一部から起つた渤海といふ國が、聖武天皇の御代からたびゝ來朝してゐたが、天皇はその入貢の期をお定めに、醍醐天皇の御代、その國の滅亡するまで、交通はつゞいた。



藏人所
檢非違使

令外の官

最澄(傳教大師)

空海(弘法大師)

④ 内政の刷新 嵯峨天皇は新に

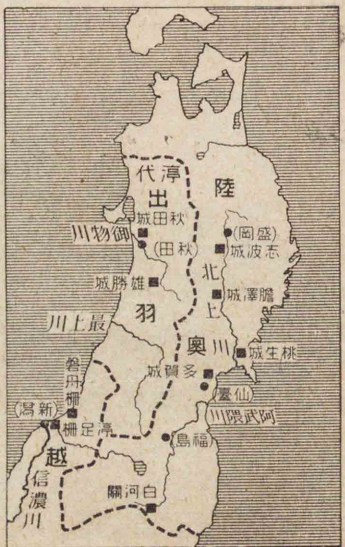
藏人所を設けて重要な政治上の文書を取扱はしめられ、また檢非違使を置いて、京都の警察、處刑を掌らせられた。これらはすべて大寶令の定むる職制以外のものであるから、令外の官と稱した。

④ 新佛教の興隆 佛教もこの頃から大いに改まつた。奈良時代の



最澄

末には、僧侶で迷信を説くものがあり、弊害も多く現はれた。桓武天皇の御時、最澄は比叡山に延暦寺を開き、後、唐に入り、わが國に天台宗を傳へた。空海も最澄と共に入唐し、眞言宗を傳へ、高野山に金剛峯寺を開いた。この



蝦夷征伐要地圖

國家鎮護の佛教

二宗派は共に山林清淨の地に修學し、國家の鎮護を旨とした。



空海

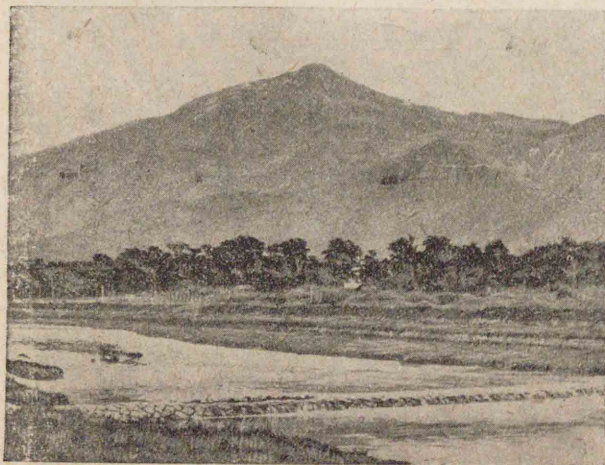
これから比叡山と高野山とは教界に多くの人材を出し、殊に比叡山は佛教の學府の觀

空海の社會事業

京都方面より佛教の學府比叡山を望む

があつた。空海はまた讃岐に萬農池を掘つて公益を圖り、綜藝種智院といふ私學校を建てて、庶民に學問を普及しようとした。

漢文學 平安時代の初め御歴代の天皇は皆學問を御獎勵になられたので、漢文學も頗る盛になつた。殊に嵯峨天皇は深く漢文學に通じ、また書道にもすぐれさせられ、僧空海、橘逸勢と



比叡山

（右）嵯峨天皇御筆
（中）空海筆
（左）橘逸勢筆

私立の學校 藤原氏の勸學院、和氣氏の弘文院、在原氏の奨學院、橘氏の學館院はその主なるものである

仙山隨筆氣氣峨之上筆氣氣
飛へ道帶筆上才天聖古陸
丹青色新花錦備文の開材

此院此心望、存、
不、
筆

善惡而感於文武大業
能得法極多不美作地

三筆

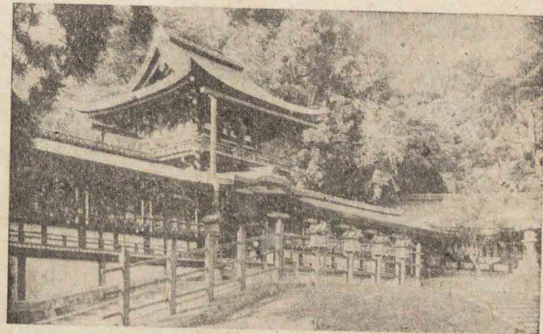
共に三筆と稱せられ給うた。また當時の貴族は一門の子弟を教育するため官立の大學の外に私立の學校を起し、おもに漢文學を教へたので、小野篁、都良香等の名高い學者が輩出した。かやうに平安時代の初め數代の間は、世の文化も進み、皇威も四方に輝き、人々は太平を喜んだ。

第六章 藤原氏の專權

藤原氏の隆盛 藤原氏は鎌足、不比等以來皇室の恩寵を蒙り、その家はますく榮えたが、殊に不比等の玄孫冬嗣は嵯峨天皇の御代に

奈良市にある。藤原氏の祖天兒屋根命その他を祀り、藤原氏の盛になるにつれて朝野の尊敬が甚だ厚かつた人臣攝政の初

關白の初



春日神社

藏人頭となり、その子良房ヨシフサは文徳天皇の御代に太政大臣に任ぜられ、ついで清和天皇が御幼少で御位に即かせられると、良房はまた外祖父を以て攝政となつた。人臣にして太政大臣となり攝政となつたのは、良房が初めてある。ついで宇多天皇は特に詔して、政治は大小となく良房の養子基經キネに關り白シラさしめることとせられた。これが關白の初めて、これより藤原氏は天皇御幼少の間は攝政となり、御成長の後には關白となつて、政をとることとなつた。

菅原道眞の左遷 宇多天皇は、藤原氏が朝廷の政治をほしいまゝにすることを憂へさせられ、基經の薨じた後は關白を置き給はず、菅原道眞を重く用ひて、藤原氏を抑へようとなされた。同じ御趣意か

道眞の登用

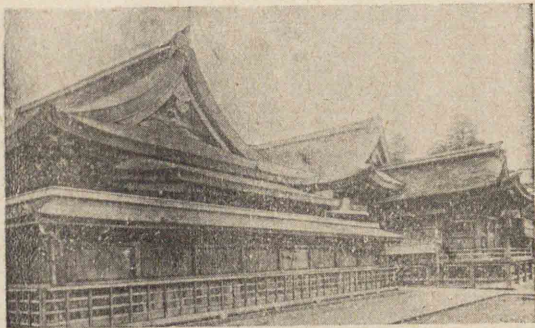
道眞の左遷

京都市上京區馬喰町にあり、菅原道眞を祀る

道長の專權

莊園シヤウエン 朝廷から私有を許された土地で、國司の支配を受けず、租税をも免ぜられた

藤原氏の極盛

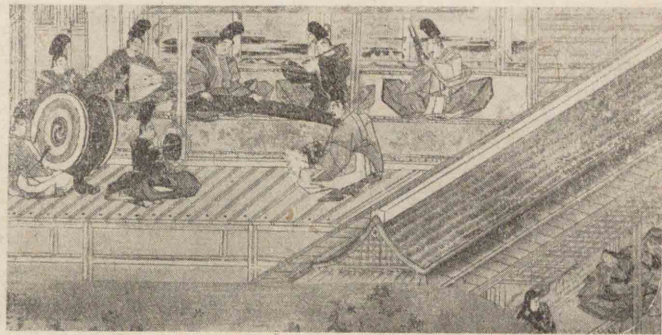


北野神社

一條三條後一條の三天皇に仕へ、政治に與ること三十餘年の久しきに及び、その女は三人まで皇后に立ち、長く外戚として權勢を振つた。當時藤原氏一門の莊園シヤウエンは天下に遍く、その富は遙かに他の公卿を凌ぎ、あらん限りの榮華を極め、何事も思ひのまゝにならぬことはな

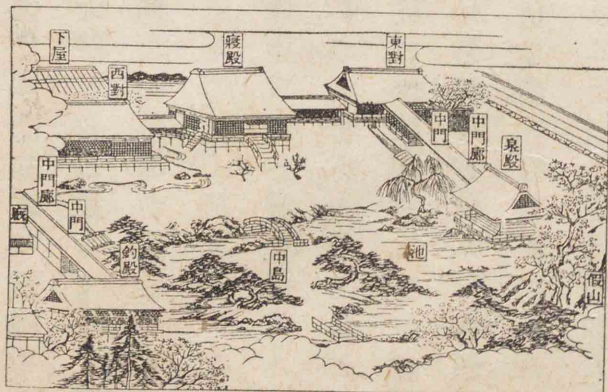
寝殿造
遊樂

寝殿は正殿で主人のゐるところ、その後方の北對は主婦、左右の東對・西對は家族のゐるところである。泉殿・釣殿は納涼、觀月その他の遊びに用ひた。これらの建物は皆廊下を以て連ねられてゐる



藤原氏の宴樂

ふ優美な邸宅に住み、華やかな衣服をつけて、或は車に駕して朝の花をたづね、或は船



殿造

つた。

道長の子頼通もまた後一條後朱雀後冷泉の御三代、五十餘年の間攝政・關白となり、父に

劣らぬ驕奢を極め

たが、藤原氏の勢威

はこの時が頂點で

これからは次第に

衰へた。

④朝臣の生活 藤原氏を始め當時の朝臣は寝殿造とい

を浮べて夕の月を楽しみ、詩歌管絃歌舞音曲繪合歌合蹴鞠圍碁等風の遊を事とした。これがため貴族は文弱に流れ、道徳も頽廢し、地方の政治を殆ど顧みなかつた。

第七章 平安時代の文化

①國風文化 平安時代の初期は支那や印度の文化を受容し、これを攝取醇化したのであつたが、宇多天皇の御代、菅原道眞の奏請によつて遣唐使が廢せられてから(五二五)、わが國民性を現はした文化が發達した。そして長い間の平和と、藤原氏の榮華生活とから優美・繊細な風が諸方面に現はれた。

②佛教 天台・眞言の二宗が上下の尊信を受けて次第に弘まると共に、神佛の調和を圖る考も起り、佛が迹を垂れて日本に神として現はれたのであるといふ本地垂迹説をなすに至つた。また空也・源信等

遣唐使の停止
國風文化の發達

本地垂迹説



平等院鳳凰堂



飾垂蓋天上同



佛陀彌阿尊本上同

淨土信仰

第二篇 中古史

四〇

の力により阿彌陀佛を信ずる淨土信仰も盛になつて來た。

◎國文學 平安時代の初期に片假名平假名が行はれるやうになつてから、一層自由に國語を寫すことが出來たので、國文學は著しく發達した。紀貫之は假名文で土佐日記を著はし、また醍醐天皇の勅をうけ、古今和歌集を撰んだ。勅撰和歌集の初めである。その他紫式部の源氏物語、清少納言の枕草子は當時の新文學として著はれた。

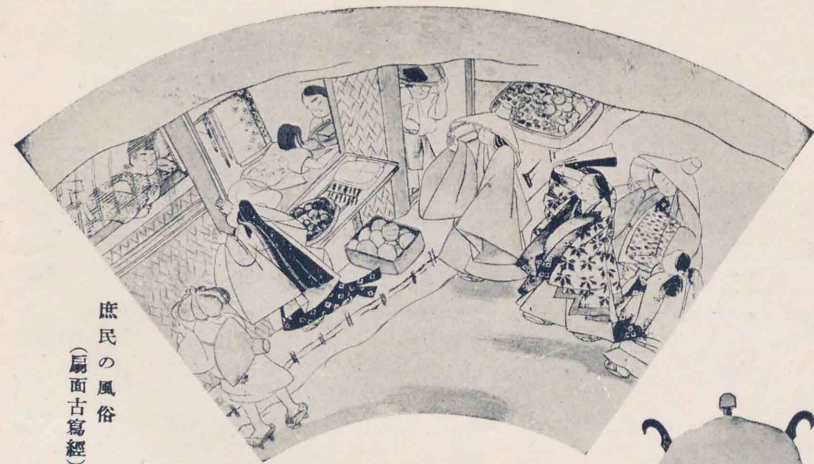
④美術工藝 當代の美術工藝は純日本風で唐の影響を受けなかつた。書には小野道風藤原行成藤原佐理が殊に名高く、三蹟と稱せられた。繪畫の名人には巨勢金岡百濟河成等がある。建築彫刻も佛寺邸宅の建築につれて進歩した。當代の代表的建築たる平等院の鳳凰堂は今なほ存して藤原氏榮華のあとを偲ばしめ、且つ優美なる日本固有の特色を示してゐる。その堂内にある本尊は名工定朝の作といはれ、壁に畫ける繪は宅磨爲成の筆と傳へられる。その他織

書道 繪畫 建築 彫刻

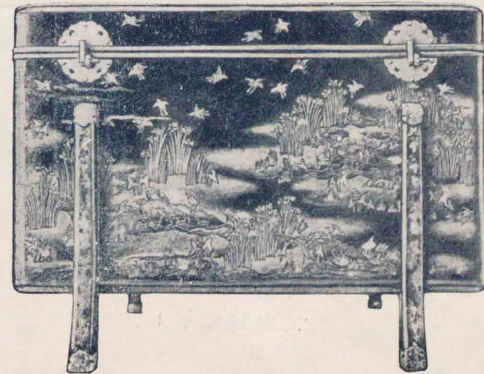
藝工・俗風の代時安平



(人三上) 俗風の族貴



庶民の風俗
(扇面古寫經)



螺鈿蒔繪唐櫃 (金剛峯寺藏)

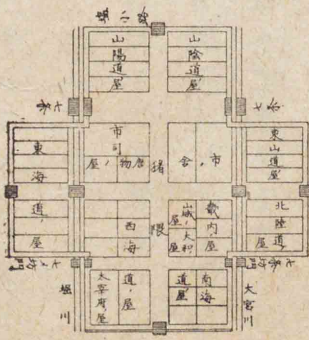


鏡立と鏡

物・蒔繪なども發達し、皆優美な趣を具へてゐる。

⑤ 平安時代の産業 土地公有の原則が廢れて、私墾田の開発が認められるにつれて農業は次第に發達し、また都の繁榮に伴つて、商業及び各種の工業が發達した。

平安京の市 平安京には平城京と同じく東西の市があり、毎月の前半は東市、後半には西市が開かれた。



平安京の市場

第八章 地方の情況と武士の勃興

① 地方の情況 藤原氏が京都にあつて政權を専らにし、朝臣が遊樂に耽つてゐる間に、地方は次第に亂れて來た。大化の改新に定められた班田收授の法はいつしか廢れ、藤原氏その他の權勢ある人々は私有地である莊園をほしいまゝに作つてその年貢を私した。また

莊園の増加

盜賊の横行

國司
平安時代に國司
が出張旅行をす
る有様である

地方の豪族

武士の起

源平二氏



國司の旅行

國司の政治もよくなかつたので、盜賊が各地に横行するやうになつた。しかし官兵は武を練ること不十分で、これを鎮めることが出来なかつた。

① 武士の起 その頃京都では藤原氏の一門が重要な官職を獨占してゐたので、才氣あるものでも、その志を達することが出来なかつたから、國司となつて地方に下るものが多かつた。これらの人々はその地に永住し、漸次勢力を養つて豪族となり、その私領を守るために常に騎射を習ひ、また家子イ、コ郎等ヲ、ドウをたくはへて事ある時に備へた。これが即ち武士の起りである。

② 源平二氏 各地に起つた武士の中で、最も著はれたのは源平の二

承平・天慶の亂

鎮守府將軍

氏である。平氏は桓武天皇より出で、源氏は清和天皇から出た。平高望タカモト（桓武天皇の曾孫）が上總カヅの國司となつて、その一族が多くこの地方に土着したので、平氏の勢は東國にはびこつた。その一族には平將門マサカドの如き、藤原純友ムネトモと時を同じくして、承平シヨウヘイ・天慶テンケイに互り、東西に據つて兵を擧げ、地方を騒がしたのもあつたが、これを鎮定した平貞盛サダノリ・藤原秀郷ヒコサト・源經基ノリノ（清和天皇の孫）等は何れも戦功によつておのゝ鎮守府將軍に任ぜられ、これよりその子孫は大いに重んぜられた。

第九章 院政

政治の形勢一變

① 後三條天皇の御政治 久しい間政治の實權は、外戚藤原氏の手にあつたが、英明剛毅にまします後三條天皇が即位し給ふに及んで、御親ら政をみそなはせられ、いたく藤原氏の權を抑へられたため、政治上の形勢は一變するに至つた。その頃莊園がますます増加し、弊害

莊園整理
國司の監督

が甚だしかつたから、天皇は新に記録所キヨクシヨを設けて、その不正なるものは取り上げられ、また國司の重任や賣官の悪風を除いて、地方政治の革正に力めさせられ、御親ら儉約を守つて世の奢侈を戒められるなど、頻りに弊政を改め、綱紀を肅正し給うた。天皇は在位五年にして御子白河天皇に御讓位になり、更に改革を進めようと思召されたが、程なく崩ぜられた。

院政の初

白河天皇も御父の御志をつがせられ、應徳三年(四六)御位を堀河天皇に讓られて後も、なほ院中にあつて政を行はせられた。ここに院政が始まり、萬づの政は院に於て決せられたので、藤原氏はいよ勢を失つた。

一 遍上人繪傳の一部で、僧兵が川岸で戦をしてゐる圖である



僧 兵

藤原氏の衰勢

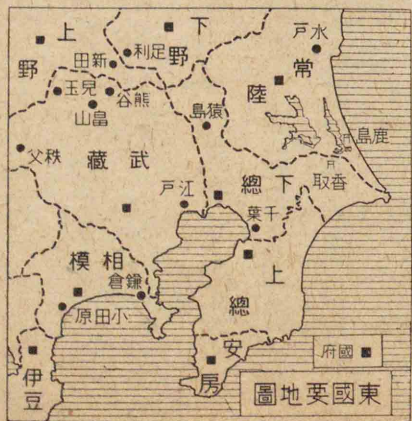
諸大寺の跋扈

武士の中央進出

僧兵 佛教は久しい間、皇室や貴族の保護を受け、中にも延暦寺・園城寺(三井)・興福寺・東大寺等の諸大寺は多くの莊園を有してその跋扈甚だしく、武士の勃興につれて多くの僧兵を蓄へ、時には大舉して朝廷に強訴した。かゝる時に當り、朝臣は懦弱で兵を動かすことも出来ず、常に源平の二氏をしてこれを防がしめたから、これより武士が次第に勢を京都に移し、後には政權にも近づくやうになつた。

第十章 源平二氏の盛衰

源氏の興隆 源氏は、經基の子滿仲、滿仲の二子頼光、頼信などは深く藤原氏に信賴せられ、その家のために功を立て、またしばしば盜賊を平らげて勇名を轟かした。頼信が後一條天皇の御代、上總・下總に據つて

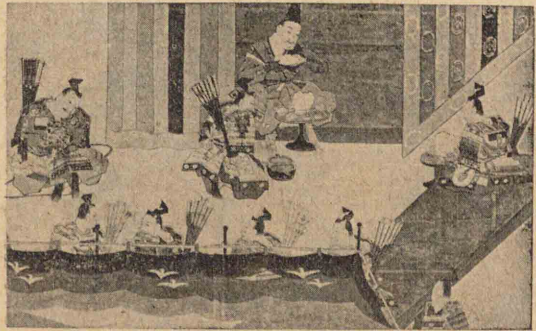


平忠常の亂

前九年の役

後三年の役

圖は後三年合戦 繪卷の一部で源 義家が出陣に當 り、弟義光と戰 勝を祈りつゝ酒 宴を催してゐる 有様である



後三年の役

叛いた平忠常を平らげて(九六)か らは、源氏は東國に勢を得、これに 反して平氏は漸く衰へた。それ より二十年を経て前九年の役に、

頼信の子

頼義はその子義家と共に陸奥の安倍氏を滅 ぼし、(三三)後三年の役に義家は藤原秀郷の子 孫なる清衡キヨトウと共に、出羽の清原氏を鎮めた(七 四)。かく源氏は父子三代に互り、東國に武功 を立てたのみでなく、頼義、義家の父子は慈悲 の心深く、常に部下を愛したので、東國の武士 はいよいよ源氏の恩威に服し、京都でも源氏 の勢は頗る盛であつた。

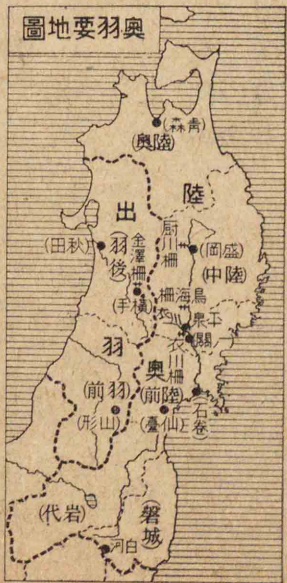


圖 金色堂は一に光 堂とも呼ばれ、 圖はその内陣で ある。中央の阿 彌陀觀音像を始 め、柱・天井等に 至るまで精巧華 麗の裝飾を施し てる

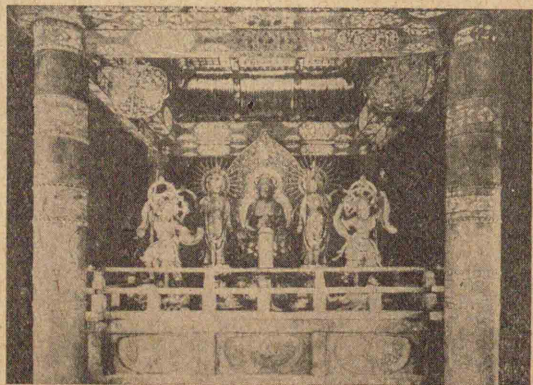
伊勢平氏

平忠盛

平氏西國に勢を 得

奥州藤原氏の勢力 後三年の役に義家を授けた藤 原清衡は戦功によつて清原氏のもの地を領し勢 強大となり基衡秀衡がその後を承け、代々平泉にあ つて勢を振ふこと九十餘年に及んだ。清衡の建て た中尊寺の金色堂コニジキドウは今も存して當時の富強を物語 っている。

平氏の興隆 平氏は、さきに貞盛が將門 を滅ぼして武名を揚げ、その子孫は伊勢に はびこつて、世に伊勢平氏と稱せられたが、 その後衰へて、源氏にくらべては、その勢やゝ劣るところがあつた。然るに貞盛五世の孫忠盛に至り、白河鳥羽 の兩上皇に仕へ奉つて御信任を蒙り、また勅命をうけて瀬戸内海 の海賊を伐つて武名を揚げ、次第に西國に勢を得るやうになり、源氏と 相ならんで勢を競ふに至つた。



金色堂

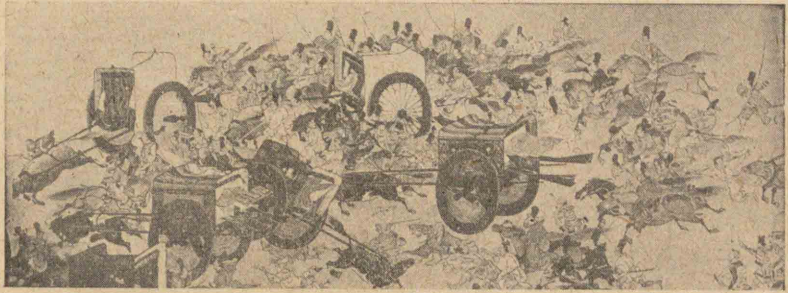
源平二氏の對立

保元の亂

平治物語繪卷の一部

平治の亂

源氏の没落



平治の亂

源平の抗争 かくて源平二氏の勢威は次第に高まり、藤原氏の如きもその地位を保つたために源平の武士と相結託するやうになつた。たま／＼起つた保元の亂に、源平二氏が召さるゝに及び、義家の孫爲義はその子爲朝と共に敗れて源氏の勢力はいたく殺がれたのに反し、忠盛の子清盛等はこの亂を鎮定した功によつて、平氏繁榮の端緒を得、中央政界に近づく機会が與へられた。されば爲義の長子義朝は、藤原信頼と結んで平氏を除かんとして、平治の亂を起したが、清盛は子重盛等と共にこれを鎮定して大功を立て、義朝は遂に殺され、その子頼朝は伊豆に流されて、源氏の一門は悲惨なる運

武士の太政大臣の初

平氏の榮華
平時忠の如きは「方今の世平氏にあらざるものは人にあらざ」とさへ揚言したといふ

清盛の專横

鹿谷の會合



平清盛

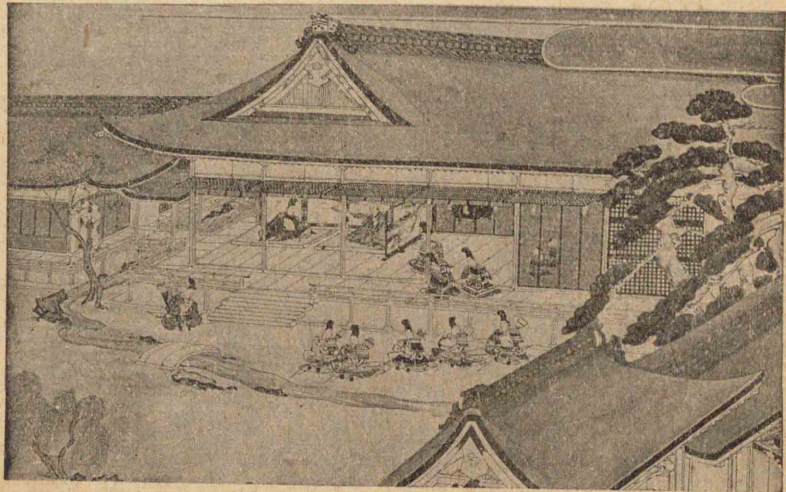
命を辿り、平氏の勢はますますあがり、遂に政治の實權は公家の手から離れて、實力ある武士の手に移るに至つた。
平清盛は平治の戦功によつて、六條天皇の御代には、武士として始めて従一位太政大臣となつた。またその子重盛をはじめ、一族は皆高位高官に任ぜられ、その莊園は全國の半ばを占むる勢であつた。なほ清盛はその女徳子(建禮門院)が入内して高倉天皇の中宮となり、次の安徳天皇を生み奉つたので、皇室の外戚として權を恣にし、その威勢は藤原氏の全盛期にもまさるものがあつた。これがため平氏の子弟は武士の本分を忘れ、奢侈文弱に流れた。しかし、清盛は勢にまかせて專横となり、治承元年(一一七二)には後白河法皇の近臣藤原成親が僧俊寛等と鹿谷に會して平氏の滅亡

鹿谷は京都市上京区にある

源頼政の擧兵

東京帝室博物館蔵

源頼朝の擧兵



重盛の諫言の圖

を企てたことから、法皇をも幽し奉らうとしたが、重盛の諫言によつて思ひ止まつた。然るに重盛薨去の後はいよいよ驕暴の振舞が募り、いたく世人の反感をそゝつた。

⑤諸國源氏の擧兵 清盛の專横が甚だしいため、源頼政は治承四年(一一八四)後白河法皇の御子以仁王を奉じて兵を擧げようとしたが、謀がはやくもまれて宇治に敗死し、王も薨せられた。また源頼朝は伊豆にあつて、以仁王の令旨を受けて起ち、累代源氏の恩顧を受けてゐた武士を集

源義仲の擧兵

平氏の都落

高階隆兼筆春日權現験記の一部

め、忽ち關東地方を從へ、鎌倉に據つて勢威日に盛となつた。頼朝の從弟源義仲も兵を木曾に起し、進んで平氏の大軍を倶利伽羅谷に破り、旭日昇天の勢を以て京都に迫つた。
⑥平氏の滅亡 これよりさき、清盛は薨じ、重盛の弟宗盛は義仲の軍を恐れて、壽永二年(一一八三)安徳天皇を奉じ、一族を率ゐて都を落ち、西國に走つた。義仲は代つて入京したが、勢にまかせて亂暴な行が多かつたので、頼朝は後白河法皇の院宣により、弟範頼、義経を上洛せしめた。二人は義仲の軍を宇治、勢多に破り、義仲は近江の栗津で戦死した(一一八四)。
この間に平氏は勢を盛りかへし、京都を恢



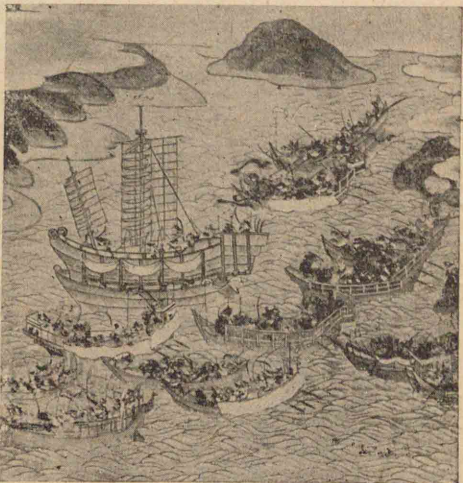
平氏の都落

一谷の戦

屋島の戦

壇浦の戦

下關市赤間宮所
藏の屏風繪によ
る。赤間宮には
安徳天皇を祀る



壇浦の戦

は清盛の妻二位尼に抱かれて海に沈ませ給うた。時に壽永四年(一
五四)の春三月花の散る頃で、清盛が太政大臣となつてから僅かに十九
年目であつた。

清盛の貿易奨励 清盛は支那宋との貿易を發達させようとして兵庫の港を修めそこ
に經島を築いて碇泊の便を圖つた。

復しようとして攝津の福原に還り、
一谷に據つたが、範頼義經に攻め落
され、讃岐の屋島に退き、更に西に走
つた。義經は數多の兵船を率ゐて
これを壇浦に追撃したので、平氏は
遂に全く敗れ、一門悉く討死し、さし
もに榮華を極めた平氏もここに亡
びた。この時かしくも安徳天皇

第三篇 近古史

第一章 鎌倉幕府の創立

幕府の成立 初め頼朝が鎌倉に居を定めるや、まづ侍所を置き、和

田義盛を長官(別)として軍事及
び警察のことを掌らせ、大江廣
元・三善康信等を京都から招き、
公文所(後)を開いて廣元を長
官(別)として庶政を統べしめ、ま
た問注所を設け、康信をその長
官(執)として訴を聴かしめた。
ここに鎌倉幕府の基が定めら
れ、武家政治の端緒が開かれた。



鎌倉の圖

鎌倉は三方山で
圍まれ、一方海
に臨んでゐる天
然の要害である
上に、かつて頼
義が八幡宮を建
てたことなどが
あつて、早くか
ら源氏と縁故の
深い地である

守護・地頭

この頃、頼朝と不和になつた義経が、逃れて跡をくらましたから、頼朝は義経を捕へ、且つ謀叛人の起るのを防ぐためと稱し、守護地頭を置くことを朝廷に奏請し、遂に勅許を得た。これらの守護地頭には、總て家人を以て任じたので、政治の實権の大部分は自ら頼朝に歸した。

守護	諸國に置く	軍事・警察を掌る
地頭	公領・莊園に置く	租税・兵糧米をとりたつ

奥羽平定

「夏草やつはものどもが夢のあと」といふのは松尾芭蕉が平泉の住時を偲んでよんだ句で名高い



義経筆蹟 頼朝筆蹟

① 國內一統 かくて頼朝の勢力は概ね全國に及んだが、たゞ奥羽には藤原秀衡(清衡の子孫)が平泉にあつて勢を振つてゐた。さきに義経は、ひそかに奥州に下つて秀衡に頼つてゐたが、秀衡の死後、その子泰衡は頼朝にせまられ、遂に衣川の館を襲つて義経を殺したが、頼朝は泰衡が命を奉ずることの遅かつた罪を責め、自ら大軍を率ゐて泰衡を攻め、これを滅ぼした(四九)

秋風に草木の露をはらはせて君が越ゆれば關守もなし

梶原景季

征夷大將軍

鎌倉幕府は、室町幕府・江戸幕府と異なり、幕府の政權は制限されたものであつた

頼朝の政治

藤原隆信筆で、京都市高雄神護寺藏
鎌倉武士



源頼朝

つた。

② 武家政治の確立 かくて頼朝は全國統一の業を成就し、後鳥羽天皇の建久三年(五二八)に、征夷大將軍に補せられた。これより武家の棟梁として政權を握るものは、この職に任ぜられる例をつくり、わが國の政治上にも大變革を來たした。

頼朝は平氏滅亡の跡に鑑みて、皇室を尊び、神佛を崇め、簡易實用を旨とし、よく心を用ひて嚴肅な政治を行つた。殊に武士道の養成に力めたため、武士は神佛を崇め、常に儉約を守つて、武藝を勵み、また恩義を重んじ、名譽を尊ぶ美風をつくつた。

第二章 北條氏の行動

北條氏の勢力

圖(下)

神奈川縣鎌倉町にあり、始め源頼義が石清水の八幡を由比濱宇鶴岡に勸請したが、建久二年頼朝が今の地に遷した。武家の守護神として將士の崇敬をうけた

源氏の滅亡

後鳥羽上皇王政復古の思召

大阪府三島郡にあり、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇を祀る

北條氏の不遜

北條氏の大逆



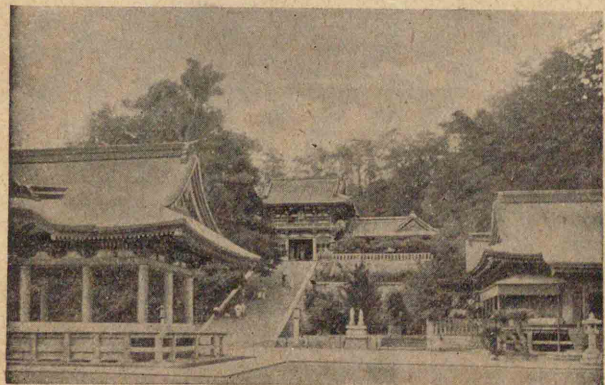
源實朝

源氏の後、頼朝の威權を恣にし、頼家を廢したが、外戚北條時政は威權を恣にし、頼家を廢してその弟實朝を立てた。やがて時政の子義時が執權職を繼ぐや、政所別當の外に侍所別當をも兼ね、幕府の實權を握つた。やがて實朝が頼家の子公曉のため、源氏は僅か三代二十八年で亡びた(七九)。

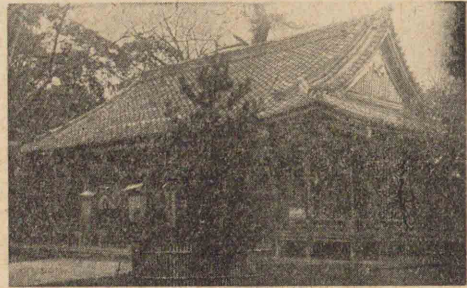
山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心われあらめやも

源實朝

承久の變 後鳥羽上皇は天資英武にま

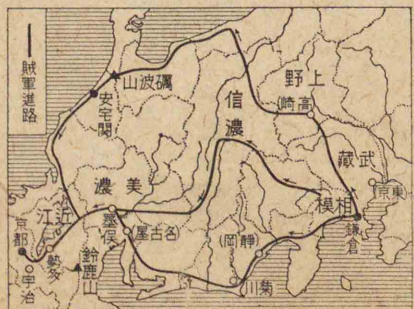


鶴岡八幡宮



しまし、和歌文學にも達し給ひ、かねてから王政復古の御志があらせられた。將軍實朝が薨じて源氏の正統が絶えたが、北條義時はなほ幕政を恣にし、しばしば不遜の行があつたので、承久三年(八二)上皇は遂に近國の將士を召して、義時追討の院宣を下し給うた。義時は畏れ多くもその子泰時弟時房等をして京都に攻め上らしめ、討幕の御企に與つた人々を罰し、後鳥羽上皇を隱岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に遷し奉るなど、その大逆無道は甚だしかつた。これを承久の變といふ。

後鳥羽天皇御製



承久の變要地圖

奥山のおどろの下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせん
われこそは新島守よ隠岐の海のあらし波風こゝろして吹け

六波羅探題

承久の變後、義時は官軍についた公卿武士の領地三千餘箇所を收めて、勳功のあつた將士に分ち與へ、一族のものを六波羅探題に任じて畿内・西國を鎮め、またひそかに朝廷に備へ奉らしめた。かくて執權としての北條氏の地位はいよゝゝ鞏固となつた

*時頼は幼くして父を失ひ、母は松下禪尼といひ自ら障子を切張して儉約を教へたほどの賢夫人で、時頼はよくその戒を守つたのである



北條時頼

北條氏の政治 義時について執權となつた泰時は、政所に評定衆を置き、貞永式目(御成敗式目ともいふ)五十一箇條を定めて武家政治の規準を示し、また心を政治に用ひた。泰時の孫時頼も政治を勵み、節儉を以て世を治めた。彼は皇大神宮に願文を奉つて敬神の誠をあらはしたこともあつた。

兩統迭立

北條氏の不遜

北條氏の越權 承久の變の後、後堀河天皇について四條天皇が立たせられたが、天皇崩御の後、北條氏は土御門上皇の御子後嵯峨天皇をその次に立て奉つた。その御子には後深草天皇・龜山天皇がましました。北條氏は兩天皇の御子孫が迭立し給ふやうに定め奉つた。後深草天皇の御子孫を持明院統と申し、龜山天皇の御子孫を大覺寺統と申し上げる。かやうに北條氏は皇位の御事にまで容喙するなど不遜な態度があつた。

第三章 元 寇

歐亞に跨る大國
蒙古の國書

蒙古の興起 鎌倉時代の初、蒙古の地に成吉思汗が出て四方を征服し、ヨーロッパにも攻め入つて歐亞に跨る大國を建てた。その孫忽必烈は更に南下して宋を侵し、東は高麗をも従へた。忽必烈は勢に乗じてわが國をも従へようとした。たびゝ無禮な國書を贈つて朝貢

朝廷の御態度
時宗の英斷

來寇

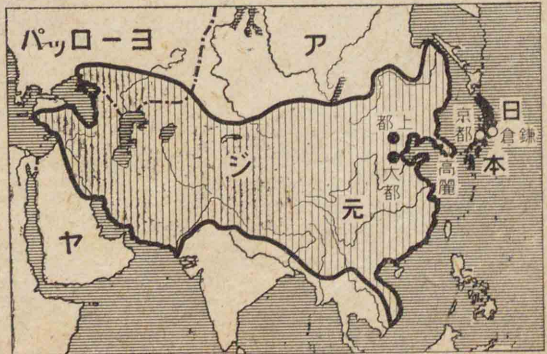
防備

を促した。朝廷はその無禮をせめて返書を
與へ給はなかつた。執權北條時宗も剛毅果
斷、斷乎たる決心を以てこれを斥け、一方西國
の將士に命じて國防を嚴にし、來寇に備へた。
②文永の役 蒙古はさきに國號を元と稱し
たが、後宇多天皇の文永十一年(三一九)高麗の兵
を合せ(約四萬、九、百餘艘)大舉して攻めて來た。わが軍
は往々苦戰に陥つたが、よく奮戰してこれを
退けた。こ



北條時宗

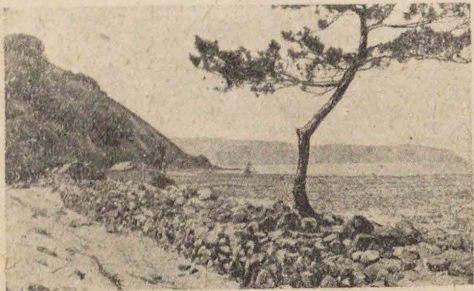
れを文永の役といふ。
③弘安の役 その後、元はなほ使を
送つたが、時宗はこれを斬つてわが
決心を示し、一族の北條實政を九州



元の最大版圖

敵國征伐の企

福岡縣糸島郡今津村にある



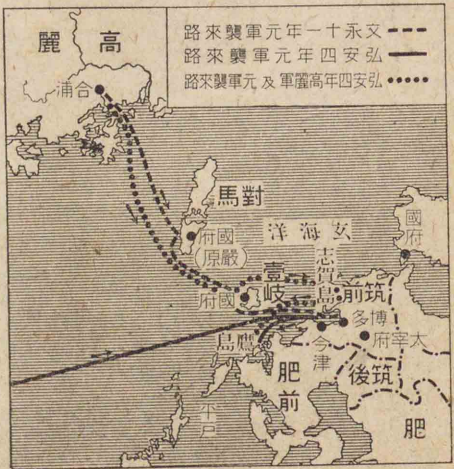
今津の防壘

に遣はして將士を統べさせ、博多灣の
沿岸に石壘を築いて防備を嚴しくし
た。また將士のうちには更に進んで
敵國征伐をさへ企てたものもあつた。

國民の敵愾心

敵國征伐の企を聞くと、老も若

きも護國の精神に燃えて奮起した。中にも肥後の御家人井芹彌二郎秀重は、秀重自身も出征したいのであるが八十五歳で
行歩すること能はず、残念ながら出征出來ぬ。よつて子の永
秀六十五歳と孫の經秀三十八歳と親類の秀南十九歳と高秀
四十歳の四人を従軍させます。と申し出で、眞阿といふ地頭尼
は、自分は婦人の身なので出征し難いから、一人の子息と鴛の
二人を夜を以て日につき、急ぎ參上させます。と報告してゐる。



元寇要地圖

再度の來寇

敵艦覆滅

蒙古襲來繪詞の一部

上下一致

皇室の御稜威

福岡縣糟屋郡箱崎町宮崎宮所藏

やがて元は宋を滅ぼして支那を全く一統し、弘安四年(四一九)五月、大舉して再び來襲した。わが將

河野通有、竹崎季長、菊池武房等はよく防ぎ、一步も

上陸せしめなかつた。ついで七月、元は全軍合して

我に迫らうとした。時に神風再び起り、敵艦は

殆ど覆り、大部分の敵兵は海底の藻屑と消えた。

これを弘安の役といふ。

四國威の發揚 元寇は實に未曾有の國難であつ

たが、上下よく一致してこれに當つたので、さし

の大敵を撃攘して國威を發揚することが出來た

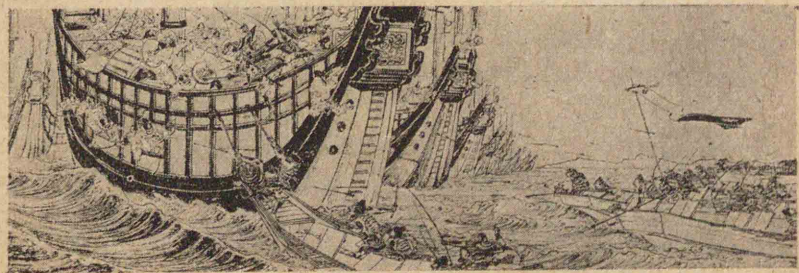
のである。殊に龜山上

皇は、畏くも御身を以て

國難に代らんと皇大神



龜上山皇宸筆



蒙古襲來

時宗の善處

將士の奮戰

遊技

家屋

服裝

宮に祈らせられ、時宗は沈勇果斷この難局に善處し、また將士は頼朝以來育成し來つた武士道の精神を遺憾なく發揮した。かくてこの大勝は國民の自覺を促し、國體の尊嚴を知らしめることにもなつた。

末の世の末の末まで我が國はよろづの國にすぐれたる國 (宏覺禪師祈願文)

西の海よせくる波も心せよ神の守れる大和島根ぞ

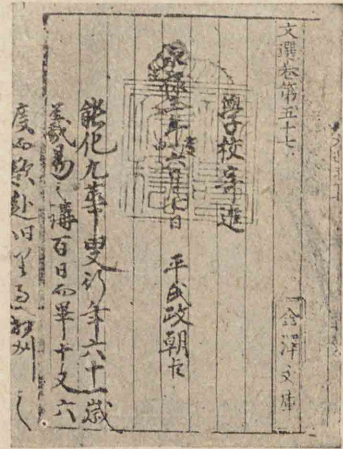
(中 臣 祐 春)

第四章 鎌倉時代の文化

一 鎌倉武士の生活

鎌倉幕府は、代々頼朝の武士道奨励にならつて士風の振興に力めた。そのため平生の遊技にも犬追物、笠懸、流鏑馬、相撲など勇壯なものを好み、またしばしば卷狩などを催して剛健の風を養ひ、武を練る一助とした。日常生活も華麗なることを避け、すべてが質素簡易を旨とした。家屋は武家造と稱する實用に適したものと成り、服裝は直垂または水干などが用ひられ、烏帽子を冠るの

【圖説】もと金澤文庫にあつた本を後に北條氏政が足利學校に寄附したものである



本庫文澤金舊

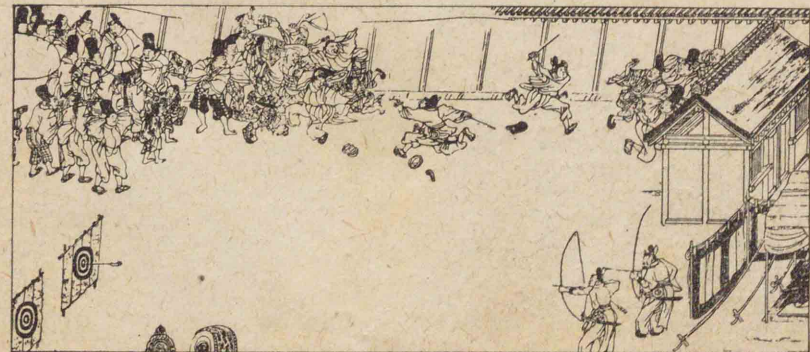
を常とした。食物もまた極めて粗末なものであつた。

● 學問文學

鎌倉時代に京

都の學問は稍衰へたが、關東北條氏の一族中には學問を嗜むもの少からず、中にも北條實時・顯時は武州金澤に文庫をたて、古今東西の書を集めた。

和歌では後鳥羽上皇の仰せにより新古今集が撰まれたが、撰者には藤原俊成・定家などがこれに當つた。作者としてはこの人々の

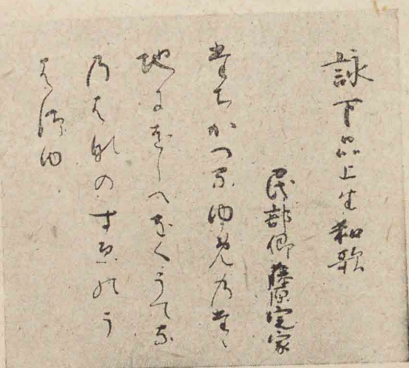


藝射の代時倉鎌

金澤文庫

和歌

【圖説】詠下品上生和歌民部卿藤原定家たちかへるゆめのたうちをいへをくうてなのはなのすゑのうはつゆ



紙懷の家定

外に、西行法師、また萬葉調を興した實朝が最も著はれ、その他俊成・定家の歌學に關する著書は今なほもてはやされてゐる。また戰爭時代をあらはすものとして、保元物語・平治物語・源平盛衰記などの軍記物が現はれた。

● 佛教 保元・平治・源平等の戰亂が連續的

に起つたので、多くの人は世の中を深く考へるやうになつた。そしてこの時代になつて、極めて平易な日本化された新宗派が勃興した。法然上人は淨土宗を開いて阿彌陀佛の慈悲の廣大なることを説いた。その弟子親鸞上人は信仰の力を強く説いて淨土眞宗を



然法

法然 親鸞

日蓮

榮西
道元



日蓮

開き、一遍上人も浄土宗から出て時宗を開き、諸國を巡り歩いて布教した。日蓮上人は法華宗を唱へ、立正安國論を著はし、佛敎によつて國家を救濟しようと絶叫した。

榮西は入宋して臨濟派の禪宗をわが國に傳へ、その弟子道元は嚴肅なる曹洞宗を弘めた。この時代の宗敎は一般に世俗生活にありながら、信仰に入るを説き、また精神の修養をして悟りを開くことを唱へた。従つて、武士・庶民の間にこれらの宗派が弘まつた。

四 神道 頼朝は皇大神宮を最も厚く敬ひ、また貞永式目にも第一に神を祀ることを書いた。神道に關する著書も現はれ、後には反本地垂迹即ち日本の神が本地であると稱するやうになり、國史を尊び、國體に對する國民一般の考へが非常に明瞭になつてきた。

反本地垂迹説



傳繪人上遍一筆伊國佐土)俗風の間民代時會鑑

俗風の代時倉録



(詞繪來襲古蒙) 活生の士武



(詞繪來襲古蒙) 陣出の士武



(傳繪人上然法) 戲遊童兒

一 遍上人繪傳は、一遍上人の一生の行狀と諸人
 濟度の功德を示した繪卷物で、鎌倉時代末期の繪
 畫の標本として、また當時の社會風俗を研究する
 資料として、最も貴重な資料の一つである。
 この圖は上人が攝津四天王寺の門内で、參詣の
 男女に説教してゐる所を畫いたものである。



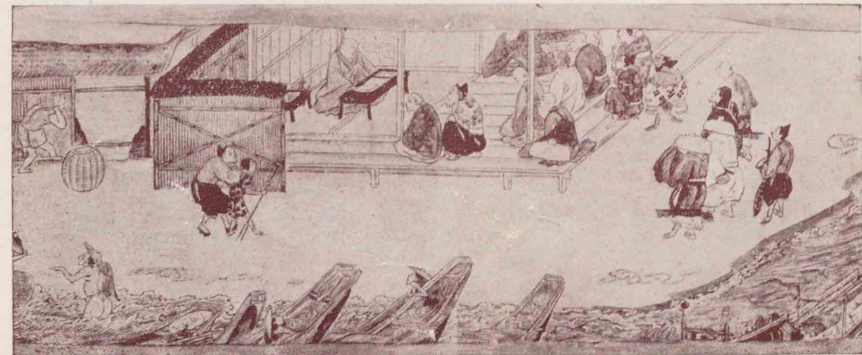
殿利舍寺覺圓



像士力剛金門大南寺大東
(作慶快・慶運)



東大寺三月堂



圖教説人上然法

建築

彫刻

大和繪

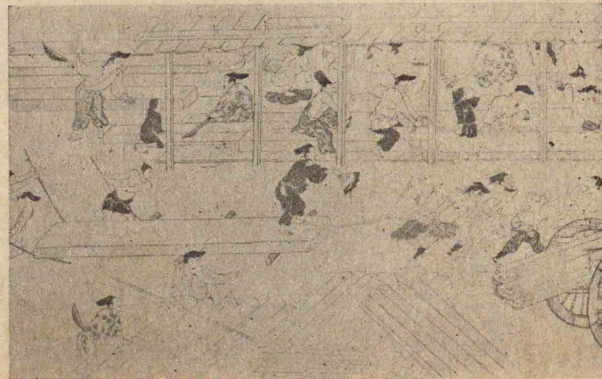
刀劍・甲冑

【圖(下)】
石山寺縁起繪卷
の一部で、寺院
建築の有様を示
す

⑤美術工藝 建築は和様を本位とし、唐様の外に天竺様と稱する新しい様式のもの
が生れ、また禪宗風の建築も輸入された。
彫刻は寫實的の力強い日本風のものとな
り、殊に木彫が發達した。運慶・湛慶などそ
の最も優れたものである。

大和繪はこの時代に入つて大いに發達
し、社寺の縁起や高僧の一生、軍物語などを
描いた繪巻物も當時の人々に喜ばれた。

また刀劍も時代の要求によつて發達し、粟
田口吉光・岡崎正宗等の名工が出で、甲冑も精巧なものが作られた。
⑥鎌倉時代の産業 鎌倉時代には土地の利用が大いに進み、農業は
著しく發達した。商業は京都と鎌倉が最も盛であつた。貨幣は鑄



業作築建の代時倉録

銭が行はれなくなつてから多く宋銭を輸入して用ひた。

第五章 建武の中興

北條氏の失政

●後醍醐天皇の御即位 元寇の後幕府の財政は頗る窮乏し、また將士に與へる領地もなく、従つて行賞も十分に行はれなかつたので、北條氏の勢望は次第に衰へた。その上北條高時は暗愚にして時勢を察せず、田樂や闘犬の如き遊樂に耽り、弊政が多かつたから、民心はやうやく北條氏を離れるやうになつた。

この時、後醍醐天皇は英邁の天資を以て親しく政を行はせられ、近侍の臣に多く賢良の人を集め給ひ、またわが國の古典や新しい朱子

後醍醐天皇の御親政
北島親房
萬里小路宣房

正中の變

正元二年二月九日天子尊号改

後醍醐天皇尊号

●討幕の御企 天皇學などをも御研究遊ばされた。

元弘の變

は後鳥羽上皇の御志をついで、政權を古の如く朝廷に復さうと思召され、正中元年(八四)日野資朝、日野俊基等とひそかに討幕を企てられたが、謀が洩れて遂に行はれなかつた。これを正中の變といふ。

その後、天皇はますく北條氏の專横を憤らせられ、まづ皇子護良親王等をして僧徒に結ばしめ、再び討幕の御計畫をめぐらしめられた。高時はこれを知り、大兵を京都に向はせたので、元弘元年天皇は神器を奉じて難を笠置山に避け、勤王の兵を召された。楠木正成はまづ召に應じて赤坂城に義兵を擧げた。然るにまもなく笠

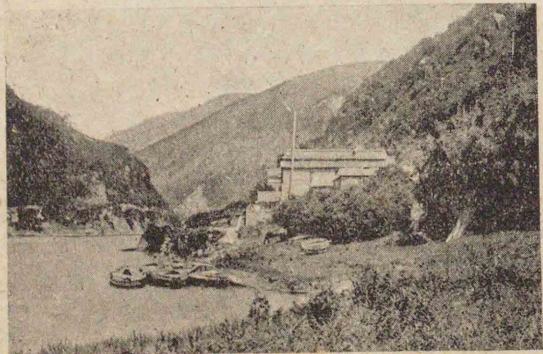
笠置行幸

隠岐遷幸

護良親王御筆蹟

置は陥り、天皇は翌

年隠岐に遷され給うた。これを元弘

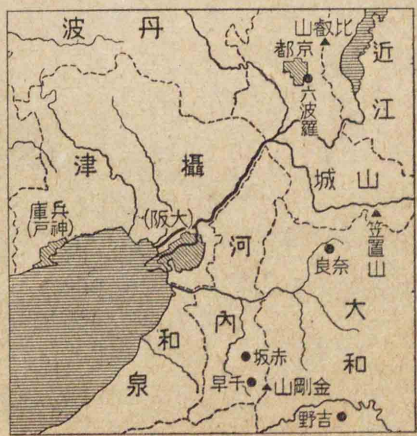


笠置山

の變(九一)といふ。

北條氏の滅亡 赤坂城に據つた楠木正成は北條氏に破られたが、後、金剛山の千早城に籠り、謀を以て賊の大軍を悩まし、護良親王も吉野に據り、令旨を諸國に下して勤王の武士を募られたので、播磨の赤松則村、伊豫の土居通増、能通、綱肥、後の菊池武時等が相ついで舉兵し、勢大いに振つた。

天皇は勤王軍の奮起を聞召し、六條忠顯を從へてひそかに隱岐を遁れ、伯耆の名和長年に奉ぜられ、船上山に據り給うた。ついで天皇は六



近畿要地圖

勅使藤原藤房が楠木正成の館に到り、天皇の御意を告ぐる圖である



藤原藤房正成に對面の圖

勤王軍諸方に起る

伯耆行幸

六波羅陥る

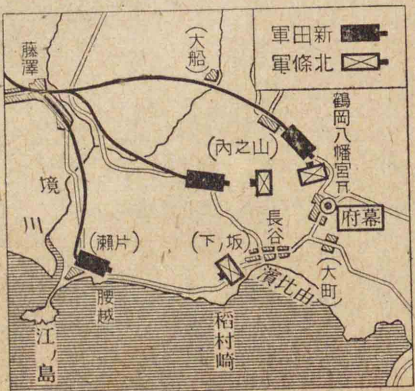
鎌倉陥落

北條氏滅ぶ

鎌倉幕府滅亡

新政

條忠顯赤松則村に命じて六波羅の探題を攻めしめられたが、この時足利高氏(後に尊氏)は俄かに官軍に降り、六波羅は陥つた。この頃關東では新田義貞が兵を上野に擧げ、海路より鎌倉に攻め入つたので、高時は一族と共に潔く自殺した。時に元弘三年(九一三)五月で、頼朝が征夷大將軍に任ぜられてから百四十二年にして、鎌倉幕府は滅んだ。



義貞の鎌倉攻略圖

建武の中興 天皇は元弘三年六月京都に還幸し給ひ、中興の御親政を行はせられた。かくて王政は古に復し、皇國本來の姿に立ちかへることとなつた。これ大化の改新、明治維新と相並ぶ大改新である。天皇は親しく記録所に臨んで政をみそなはし、新に雑訴決斷所を設けて領地の争を裁かしめ、武者所を置いて武士を監督せしめら

地方の鎮撫

建武中興

公武の軋轢

天皇の御理想を解し奉らず

れた。地方には國司と守護とを置いて治めしめられ、特に北畠顯家を陸奥守に任じ、皇子義良親王を奉じて奥羽を鎮めさせ、足利直義(氏尊)を相模守とし、皇子成良親王を奉じて鎌倉に居て東國を治めさせ給うた。また護良親王を征夷大將軍に任ぜられたのを始め、功勞のあつた公家・武家の功を賞して、それ〴〵官に任ぜられた。元弘四年(一九四)建武と改元せられたから、この新政を建武の中興といふ。

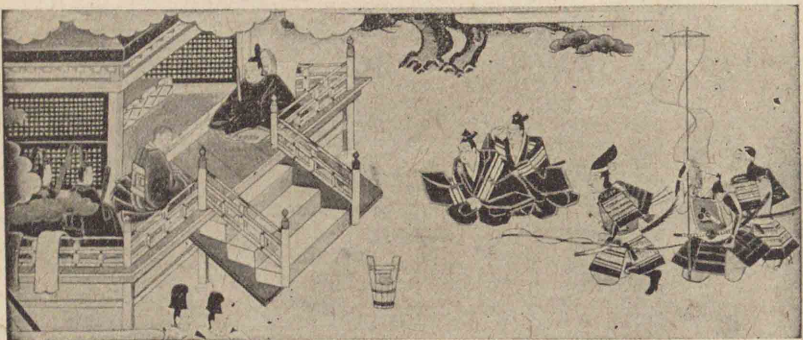
⑤ 新政の挫折 後醍醐天皇は王政復古の大業をなし遂げ給ひ、政治をお勵ましになつたが、公卿は實際の政治に長く遠ざかつたので、天皇を輔翼し奉るに缺點があり、武士との軋轢も甚だしかつた。また大義に暗き武人は天皇の高き御理想を解し奉るもの少く、却つて自己の利害より、もとの武家政治を慕ふに至り、新政の前途を暗くした。

第六章 吉野の朝廷

尊氏の叛

義貞の敗走

兵庫福嚴寺にて正成をお召しになつた時の圖である



後醍醐天皇楠木正成に謁を給ふ

● 尊氏の叛 かねて野心を抱ける足利尊氏は、ひそかに新政を喜ばぬ武士をなづけたが、建武二年高時の子時行がまづ兵を起した。尊氏はこれを討たんとし、恣(ホシイマ)に東國に下り、時行をうち破り、遂に鎌倉に據つて叛き、義貞を除くを名として兵を集めた(一九五)。

天皇は義貞と陸奥の顯家とに命じてこれを討たしめられたが、義貞は足柄箱根の戦に敗れ、尊氏兄弟はこれを追うて京都に攻め上つた。天皇は難を比叡山に避けられたが、まもなく顯家も上京し、義貞・正成等と力を協せて尊氏をうち破つたので、尊氏は九州に敗走した。かくて天皇は京都に還幸せられたが、

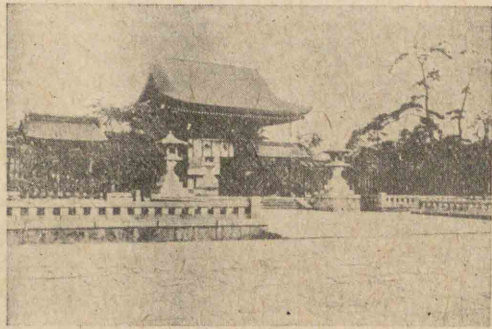
湊川の戦

神戸市にあり、楠木正成を祀る。碑は徳川光圀の建てたものである。

官軍諸將の戦死



湊川神社と楠木正成碑文



中興の政はここに著しく動搖した。

尊氏の再舉 尊氏は西走の後、菊池武敏を多々良濱に破つて九州を従へ、直義と共に大軍を率ゐて海陸より東上した。義貞と正成はこれを兵庫にむかへうつて奮戦したが、正成は湊川で戦死し、義貞は敗れて退いた。

正成、正季兄弟の最期の誓「七生までも唯同じ人間界、同所に託生して、遂に朝敵を我が手にかけて滅ぼさばや」と誓ひ湊川で忠死した。(太平記)

名和長年等も京都を回復せんとしたが、相ついで戦死した。尊氏兄弟は京都を占領した。この後六條忠顯、吉野の朝廷 尊氏は賊名を避けるために、後深草天皇の御曾孫な

京都還幸

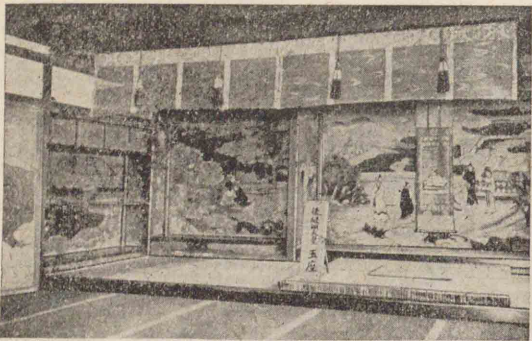
吉野行幸

奈良縣吉野郡吉水神社内にある

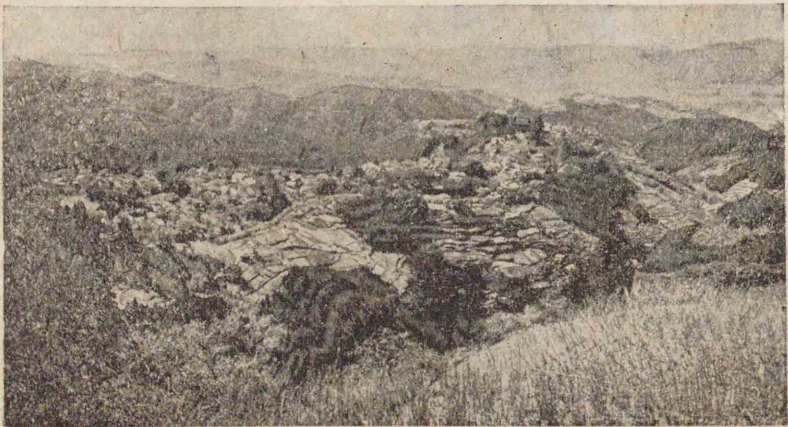
る豊仁親王を奉じて天皇と稱した。ついで尊氏は後醍醐天皇を京都へ迎へ奉つたが、天皇は尊氏の異心を察し給ひ、延元元年十二月ひそかに神器を奉じて、吉野に行幸して、皇居を定められた。世にこれを吉野の朝廷といふ。

官軍の形勢

吉野を吉野の朝廷といふ。新田義貞は、奥



第六章 吉野の朝廷



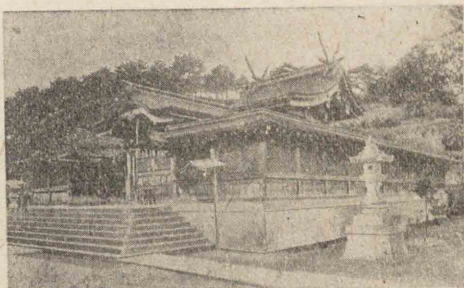
吉野山全景

金崎城陥落

顯家の戦死

義貞の戦死

福井市にあり。
新田義貞を祀る



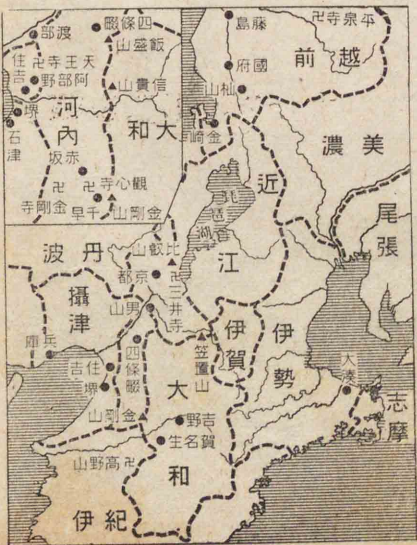
藤島神社

州の北畠顯家と力を協せて京都の回復に努めたが、越前金崎の城も陥り、尊良親王は不幸にも薨じ給うた。ついで顯家も和泉の石津に於て戦死し、義貞も藤島に戦死した(九八)。こゝに於て深謀に富める北畠親房は、義良親王、宗良親王を奉じて海路東國に赴かんとしたが、暴風にあ

親房の東國經營

神皇正統記

良親王は遠江に入り給ひ、親房は常陸に着き、小田城に據つて東國の經營に従つた。この陣中に於て親房は具さに辛苦を嘗めながら、神皇正統記を著はし、皇統の由



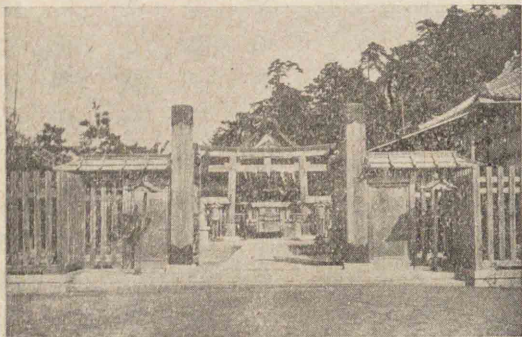
近畿北陸要地圖

後醍醐天皇の崩御

四條畷の戦
賀名生遷幸

大阪府北河内郡
四條畷村にあ
り、楠木正行を
祀る

官軍の不振



四條畷神社

來を述べて大義名分を明らかにし、勤王の志を鼓舞した。然るに天皇は延元四年(九九)八月、恨を吞んで吉野に崩御あらせられた。

後醍醐天皇御製

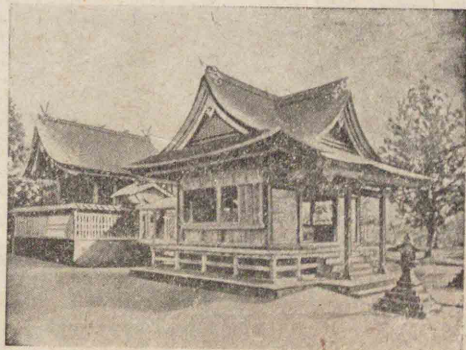
世治まり民安かれと祈ることそ我が身につきぬ思ひなりけり

その後、親房は吉野に歸り、後村上天皇を奉じ、王政の復興に盡した。たまく、足利氏に内訌を生じ、官軍の勢が振つたが、正成の子正行が四條畷に戦死した後、天皇は難を避けて賀名生に遷り給ひ(一〇〇)、ついで朝廷の柱石となつた。なほ九州では、菊池武光(武時の子)が征西將軍懐良親王を奉じて、賊を筑後川に破つたが、その後また振はなくなつた。

熊本縣菊池郡隈
府町にあり、菊
池氏一族を祀る

兵亂治まる

⑤ 後龜山天皇の還幸 後村上天皇の後、長慶天皇後龜山天皇が相ついで即位せられ、なほよく錦の御旗を吉野に翻された。後龜山天皇の御代、尊氏の孫義満は天皇の還幸を請ひ奉つた。天皇は萬民の困苦を慮つてこれを許し給ひ、元中九年(五三〇)京都に還幸し、神器を後小松天皇に授けられた。かくて後醍醐天皇が吉野に行幸せられてから五十七年に亘つた大亂がはじめて治まつた。



社神池菊

第七章 室町幕府の内治

① 室町幕府 尊氏は恣に武家政治を再興せんとしたが、部將にわがまの振舞多く、その上一族の内訌が絶えず、威令は殆ど行はれなかつた。

義満征夷大將軍となる

管領

關東管領
探題
守護・地頭



滿義利足

つた。然るに義満に至つて賢臣細川頼之がよくこれを輔け、足利氏の威權を重からしめた。義満は、後龜山天皇京都還幸の後、征夷大將軍に任ぜられ、華麗な花の御所を京都の室町に營み、ここに幕府を開き、次第にその基礎を固めた。

② 幕府の組織 室町幕府の組織は概ね鎌倉幕府に倣つた。執權に當るものを管領

といひ、足利氏の一族細川・畠山・斯波の三家よりこれに任ぜられた。これを三管領といふ。その下に政所・問注所・侍所があつたが、侍所の長官を所司といひ、山名・一色・赤松・京極の四氏の中から任ぜられたので、世に四職といつた。地方には鎌倉に關東管領を、九州と奥羽にはおの／＼探題を置き、諸國には守護・地頭があつたが、守護は次第に

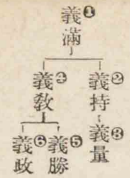
地頭を壓して勢を得、地方割據の基がつくられた。

義満の驕奢 義満はやがて將軍職を義持に譲り、ついで太政大臣にのぼつたが、まもなくこれを辭して出家し、別莊を北山に構へ、壯麗な金閣を造營して風流を盡し、遊樂を事とした。また多くの公卿を自分の臣下の如く取扱ひ、出入の儀式などにも僭越な振舞が多く、世に義満を公方と稱した。



金閣

京都市の西北部鹿苑院の園中にある三層の樓閣で、庭園と共に幽邃の趣を現はしてゐる。
公方とはもと朝廷を指し奉る言葉であつたが、この頃からこれは將軍の尊稱に用ひられるに至り、名分が大いに亂れた。
關東管領の横暴
永享の亂



權臣の跋扈 關東は足利氏の根據地であるから、鎌倉に關東管領を設け、尊氏の子基氏をこれに任じた。關東管領は威望の加はるにつれて、次第に幕府を輕んじ、遂には自ら公方と稱し、執事上杉氏を管領と呼ぶなど、却つて幕府の妨となつた。四代將軍義教は剛毅果斷にて、基氏の曾孫持氏の專横を抑へた。

嘉吉の亂

下剋上の風

徳政

原因



足利義教

然るに自らは赤松滿祐の怨をうけ、そのために弑せられた(三二)。これより義勝、義政と幼主相ついで立つたが、將軍の威權はやうやく衰へ、強臣が權を恣にし、下剋上の風はますます激しくなつた。

四 義政の失政 義政は長じて後も政治を怠り、日夜奢侈遊樂に耽り、その財政乏しくなるや、重税(倉役錢の如き)を課し、またしばしば徳政を行つたから、世の秩序は大いに亂れた。且つ天災地變が相ついで起つたのに、なほ自身は奢侈風流を事としてゐた。

五 應仁の亂 この時にあたり、たまに將軍家に家督争が起り、畠山斯波の兩管領家にも相續の争が起り、細川勝元、山名



足利義政

戦況

結果

なれや知る都は野邊の夕雲雀上るを見ても落つる涙は飯尾彦六左衛門

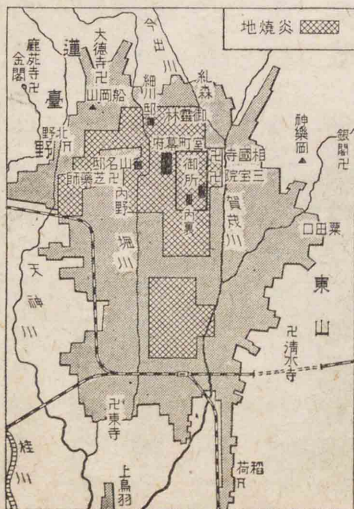


(部一の起縁堂如眞) 亂大の仁應

宗全はおのゝ一方に與して權力を争ひ天下の勢は自ら兩分し遂に應仁の大亂となった。

勝元の軍は京都の内外に戦つた。やがて宗全勝元は相ついで卒し義政も職を子義尙に譲つたが兩黨はなほ兵を解かず應仁元年より文明九年まで相戦ふこと十一年の久しきにわたつた。

この亂は社會の情勢を一變せしめたもので、京都は概ね兵火にかゝり、花の都とう

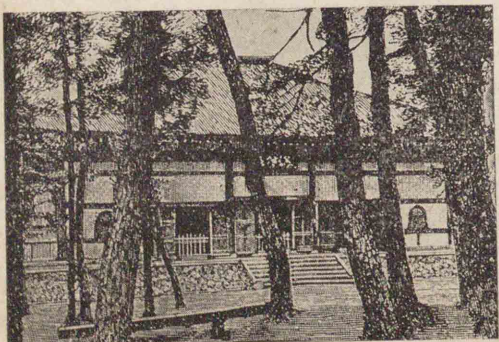


圖地要都京

たはれた地も今は荒野と化し、公卿や商人等は難を地方に避け、京都の文化は殆ど滅びた形となつた。これより幕府の威信は全く失墜して諸將を統べることが出来ず、諸大名は獨立の姿となり、群雄が各地に割據するに至つた。

第八章 室町幕府の外交

支那との交通 元寇の後も、支那との通商はなほ絶えず、足利尊氏の如きは、京都に天龍寺を造營するに當り、元に貿易船を出させたこともあつた。世にこれを天龍寺船といふ。その頃わが國民は盛に海外に發展したが、特にわが西國の民で、元や高麗に航して貿易を行ふものが多かつた。



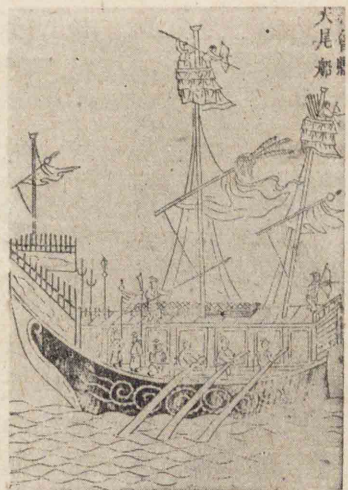
寺龍天

第八章 室町幕府の外交

元との關係 尊氏・直義兄弟は僧疎石國師のすゝめにより、後醍醐天皇の御靈を弔ひ奉るために京都に天龍寺を建てさせたのである。天龍寺船

明との関係

明の貿易船であるが、戦船をも兼ねたものである。明末の「武備志」による



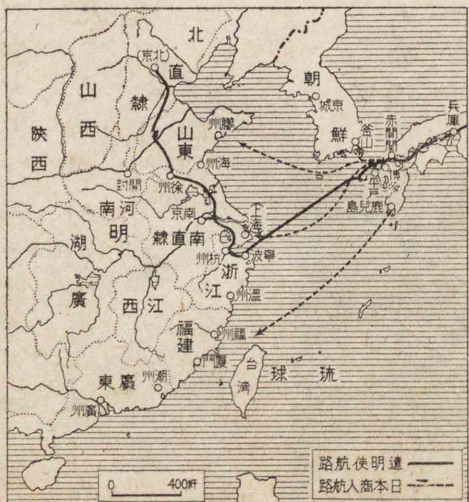
明の貿易船

外交上の失態

貿易を停む
貿易の復活

も國交を開き、その往復する國書には日本國王と記し、自ら臣と稱し、明の年號を用ひるなど、わが國の體面を傷つけ、甚だしき失態を重ねた。その子義持はこれを恥ぢて明との交を絶つたが、次の將軍義教に至つて再び舊に復し、諸大名諸大寺等ま

吉野時代の末、元が滅び、明が興つたが、明はその沿岸地方に出沒する不良の徒に苦しめられ、大いに國力が衰へた。義満は貿易の利を得んとして明



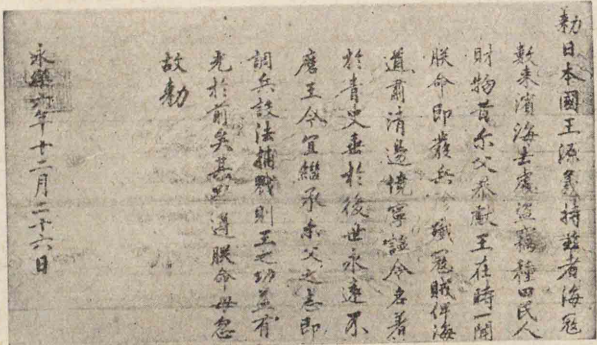
日明交通圖

この勅書は明の成祖がわが足利義持將軍に與へたものである

朝鮮の建國

朝鮮との通商

利己的傾向



明の組成の勅書(上)と永樂錢(下)



でも共に貿易船を出し、銅錢や美術品を輸入した。後、幕府が衰へてからは周防の大内氏が専ら貿易の實權を握り、大いに利益を得た。

朝鮮との関係 高麗では、わが吉野時代の末、今の李王家の祖李成桂が寇賊を撃退し、遂に高麗國を滅ぼし、朝鮮國を立てた。朝鮮とわが國は交を結んだが、後には對馬の宗氏が専らその外交のことを司り、通商條約を定めて貿易を行つた。

第九章 室町時代の文化

室町武士の士風

室町時代の武士は將軍を初めとして、利己的傾向

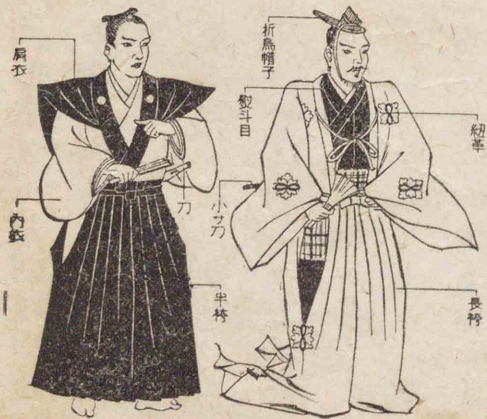
淡雅・氣品

風俗



能樂

ものが喜ばれた。公卿武士社會には能、狂言などが行はれ、茶の湯の流行と共に、插花・香合などの遊技が行はれた。武士の服装は素襖・長袴から、後には肩衣・半袴

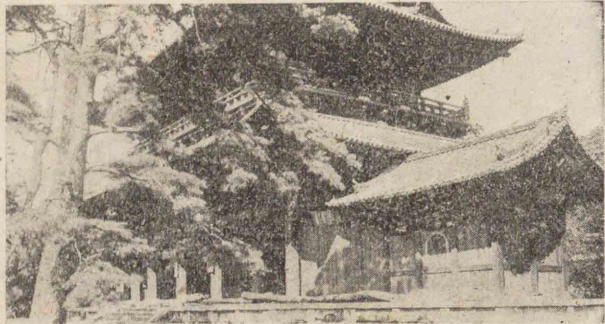


室町時代の武士の装束

等の簡素なものに移り行き、飲食物の調理も支那の影響を受け、禮式作法等もそれごとく定められた。家屋は寢殿造が廢れて、書院造と稱する新様式が發達し、庭園も瀟洒なものが造られた。

書院造
書院造といふのは禪僧の學問所であつた書院の造り方が俗人の住宅にとり入れられたもので、入口に玄關を設け、室内には疊を敷きつめ、座敷に床の間を作つて畫幅をかけ、香爐・挿花などを飾つて風流の趣をそへたものである

京都五山
南禪寺(上位)
天龍寺・相國寺
建仁寺・東福寺
萬壽寺
鎌倉五山
建長寺・圓覺寺
壽福寺・淨智寺
淨妙寺

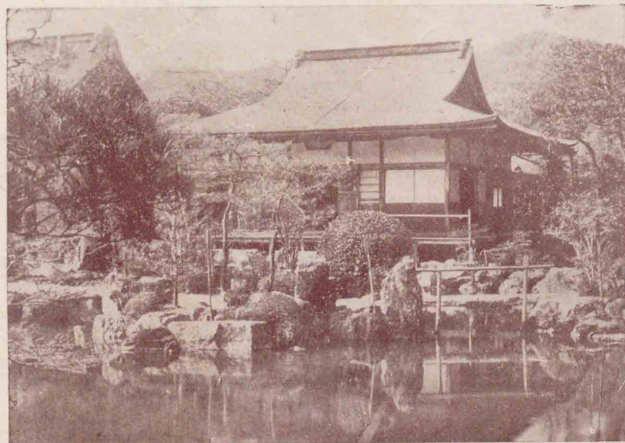


南禪寺

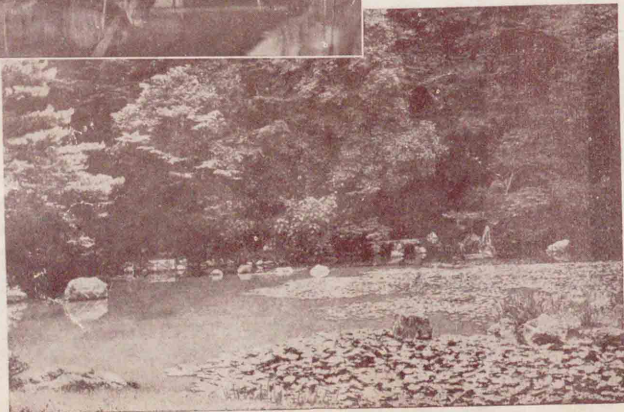
● 佛教 佛教は禪宗が盛に上流社會に行はれ、殊に足利氏は深くこれを信じ、京都鎌倉の五山もこの頃定められた。また民間では一向宗(淨土法華宗)が廣く行はれた。中にも一向宗は應仁の頃蓮如が出てより、本願寺の勢は大名をも凌ぐに至つた。
● 學問文學 學問はおしなべて衰へたが、中には一條兼良その子多良の如き博學で名高いものや、上杉憲實の如き足利學校・金澤文庫を再興したものもあり、五山の僧侶の中には



庶民の風俗 (融通念佛縁起繪詞)



東求堂
京都慈照寺内にある足利義政の持佛堂で、純粹な書院風をなしてゐる。



庭園(天龍寺)

繪畫

*徒然草は吉野時代頃の作

もと栃木縣足利市の東方にあつたが、後今の足利市内に移した

五山文學
連歌・謡曲

儒學にも通じ詩文にも巧なものが少くなかつた。世にこれを五山文學といふ。當時流行した連歌は、宗祇法師が最もこの道に達し、またこの時代から大いに興つた謡曲も佛教思想を取り入れた

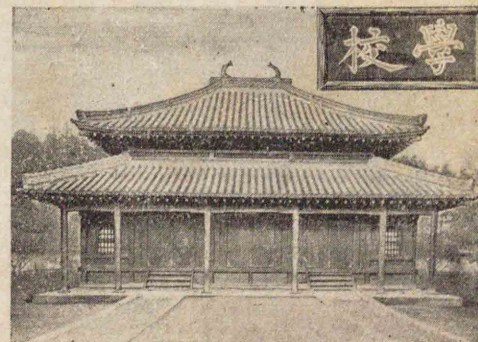


宗祇法師

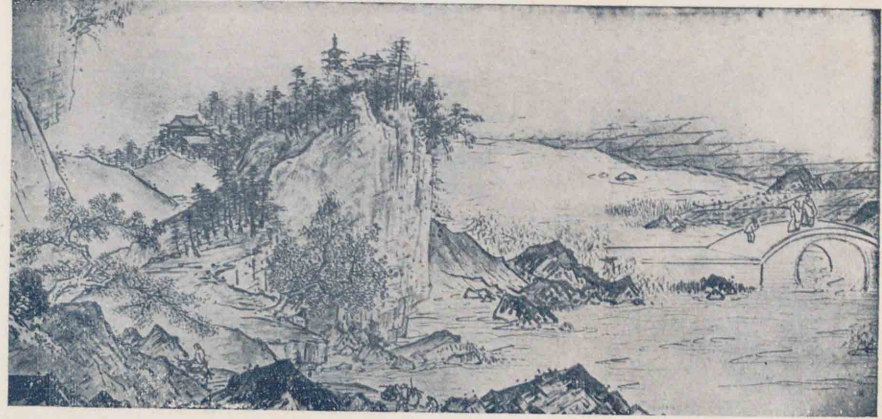
ものが多し。隨筆には兼好法師の徒然草、軍記物には太平記、義經記など勇ましいものが書かれた。

美術工藝 室町時代は美術工藝の發達

著しく、殊に東山時代は、義政が風流の遊に耽つた時で、趣味的な技藝が大いに發達した。繪畫は禪僧が夙く宋・元の畫風を研究し、僧明兆はよく佛畫を描き、如拙、周文、雪舟は山水の墨畫に妙を得、淡白なる趣



足利學校



雪山山水



野鶴 狩野元信筆



祥瑞五郎大夫作

壺



茶碗



後藤祐乘作小柄

蒔繪
陶磁器
金屬彫刻



室町時代初期の商店

を創め、狩野元信は和漢の長所をとって狩野派を興した。繪畫に伴つて漆塗の術も發達し、精巧な蒔繪が作られ、茶道の流行につれ陶磁器の製法も進み、祥瑞五郎大夫が唐津焼の名産を出すに至つた。刀劍の装具の彫刻なども實に精巧を極め、後藤祐乘の如き名人が出で、金工の祖といはれた。

⑤ 産業 引續く兵亂のため、田畑は荒廢し、天

災相ついで起り、穀物は實らず、農民は飢餓に苦しみ、遂に一揆を起して徳政を強要したので、商業の發達は阻害された。しかし明との貿易が盛となるに従つて、兵庫堺等の諸港は大いに繁榮した。

第十章 戰國亂離の社會

●戦國時代 應仁の亂後、秩序の亂れたるに乘じ、群雄は所在に起つて互に攻合ひ、大は小を呑み、強は弱を併せ、戦亂のうちつゞくことが百餘年の久しきに及んだ。世にこれを戦國時代といふ。

●幕府の衰微 應仁の亂後、將軍義隆義尚は幕府の威權を回復せんと努めたが果さず、その後の將軍義隆義隆義隆義隆義隆は、いづれも權臣に左右されて、將軍はたゞ名のみであつた。その實權は管領細川氏より更に家臣三好氏に移り、またその家臣松永久氏へと追々に下に移り行き、義輝の如きは松永久秀等に害せられたほどであつた。

●皇室の式微 幕府は財政窮乏して皇室の御費用を奉ることが出来ず、また皇室の御料所は地方の豪族に奪はれ、御收入の途が絶えたため、畏くも皇居は荒れるにまかせ、即位の御大禮、御大葬の御儀はもとより、日日の供御すら思ふにまかせ給はぬ御有様となつた。

然るに御歴代の天皇はかゝる式微の間に於ても、よく萬民をあは

權臣の跋扈

御歴代の御仁慈

圖(上)
後奈良天皇は天文九年の大饑饉で下民の困窮するをあはれみ給ひ、親しく般若心經をお寫しになつた。圖はその御跋文である國民の尊王

圖(下)
太田道灌(持資)は扇谷上杉家の家臣で文武の才を兼ねた名將である。江戸城は長祿元年(二二七)に彼が古河公方に備へるために築いたものである。北條氏の勃興

今茲天下大疫、民多死、朕為
氏父母、德不能覆、甚自痛焉、竊思、
心經一卷、於金字、使義禿僧正、供養之、
庶幾、瘳為、疾病之、妙藥矣、
千時天文九年六月十七日

後奈良天皇宸筆

れみ給ひ、民の父母としてその艱苦を救はんと御心をくだかせられたのは誠に長き極である。國民の間にも、亂世に却つて尊王の心が盛になり、各地に割據せる英雄も

皇室を敬ひ、その勢力を得るに及んでは、いづれも皇室を奉戴して天下に號令せんとするに至つた。

●關東の分裂 關東では、さきに持氏が滅んで後、古河・堀越の兩公方、山内・扇谷の兩上杉家が互に相争つて共に衰へた時、伊勢長氏は堀越公方家の亂れたのに乘じてこれを滅ぼし(五二)伊豆をとつて北條早雲と稱し、ついで相



太田道灌

宇喜多氏
尼子氏
大内氏の隆盛

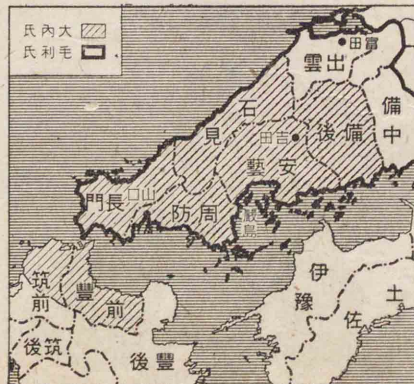


東國東海要地圖

毛利氏中國の覇
權を握る

等は兵亂を避けてこゝに寄寓するものが
多かつた。しかし義興の子義隆は富強に
まかせて文弱に流れたので、その臣陶晴賢
に弑せられた(二三)。そこで大内氏の部將
毛利元就は晴賢を嚴島に滅ぼして大内氏
の舊領を收め(二五)更に尼子氏をも攻め降

つたが俄かに病死した。
● 中國地方の形勢 備前には宇喜
多氏、出雲には尼子氏が居つた。大
内義興は周防・長門等の六箇國を領
し、明と貿易して國富み、山口の城下
は西都と呼ばれるほどにきはひ、京
都の公卿



大内氏・毛利氏の領地

長曾我部氏
龍造寺・大友・島
津三氏の鼎立



毛利元就

して、中國
の大半を
領有した。
● 四國及
び九州の
形勢 四
國では、細川氏の衰微に乗じて、土佐に起
つた長曾我部元親が遂にその大部分を
従へた。九州では、少貳氏の家臣龍造寺
氏が肥前に起り、豊後の大友氏もまた勢
が盛であつたが、後薩摩の島津義久が出
て、次第にこれらの諸族を抑へ、勢頗る盛
となつた。

年 紀	昭義	輝義	晴義	種義	澄義	植義	尚義	政義	(氏利足)軍將
二二〇									氏 條北
二二五									氏 内大
二三〇									氏 利毛
二三五									氏 田武
三四〇									氏 杉上
三四五									氏 川今
三五〇									氏 田織
三五五									氏 臣豊
三六〇									氏 川德

群雄興亡表

伊達・南部・秋田・最上の諸氏

⑧ 奥羽の形勢 奥羽の諸侯には、陸奥に伊達氏、南部氏、出羽に秋田氏、最上氏等があつたが、中にも伊達氏が最も勢力があつた。

社會刷新の機運

⑨ 社會革新の機運 かく群雄が各地に割據して互に争ふ間に、從來の名族が概ね衰亡し、實力あるものがこれに代り、ますます文武の道を起し、政治に勵み、世界の大大勢を知るに努め、こゝに社會刷新の機運が漲るに至つた。

また久しく亂れてゐた世の中も、年を経るに従つて地方にそれぞれ統一が行はれ、やがて全國一統の機運がつくられて行つた。この時にあたり、勇略果斷と地の利とを以てよくこの天下統一の基礎を成したのは織田信長である。

都市の發達 戰國時代には、地方的に統一されたので、大名の城下には士民が集まりその地方の政治・經濟の中心となつて、所謂城下町が發達した。小田原山口等の繁榮はその最も著しいものである。

第四篇 近世史

第一章 織田・豊臣二氏の統一

織田氏の勃興

① 信長の興起 織田氏はもと管領斯波氏の、尾張の守護代であつたが、信秀の時に自立した。その子信長は、桶狭間に今川義元を破り、自ら兵を美濃に進めて齋藤氏を滅ぼし、岐阜を居城とした。

② 信長の尊王

こゝに於て、正親町天皇は信長に綸旨を賜ひ、足利義

信長の入京

昭もまた身をよせたので、永祿十一年(三

信長の勤王

三) 信長は義昭を奉じて入京し、將軍職に

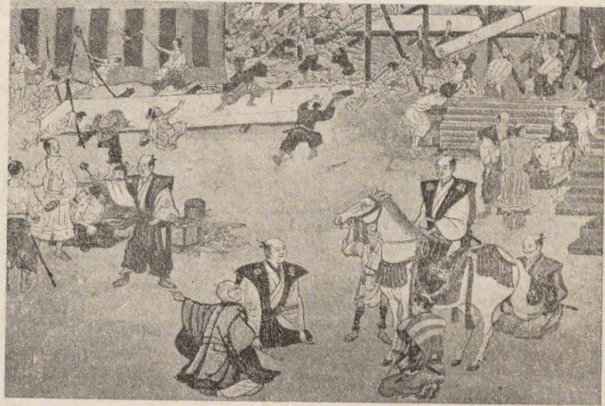


織田信長

就かしめた。織田氏は信秀の時から勤王の志が厚く、信長が京都に入るや、内裏を修繕し、御料を奉り、公卿の窮乏を救つたから、京都もやうやく舊に復した。

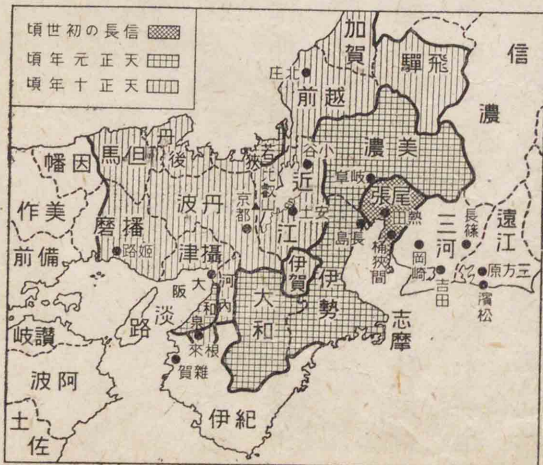
足利氏の滅亡

ここに滅び、信長がこれに代つた。時に天正元年(三三)であつた。信長はこの後、伊勢の長島一揆を平らげ、本願寺と



信長の皇居造営

信長の近畿平定 信長はついで伊勢の北畠氏を従へ、越前の朝倉義景、近江の浅井長政を滅ぼし、比叡山を焼拂ひ、勢威は頗る振つた。將軍義昭は信長の勢望を忌み、これを除かんとしたが、却つて逐はれ、足利氏はここに



織田信長の勢力伸張圖

安土築城

信長の頃を安土時代ともいふ

武田氏の滅亡

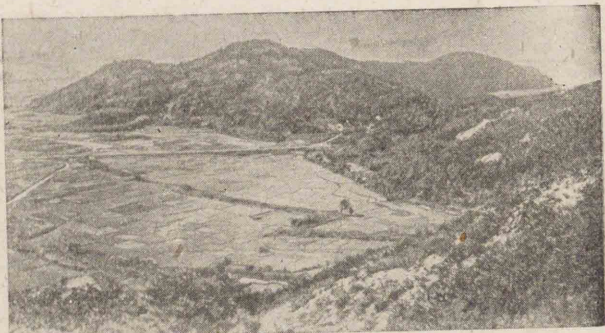
秀吉の中國征伐

琵琶湖に突出する中央の半島に城址がある

高松城の水攻

高松城は清水宗治の居城であるが、秀吉は河水を導いて城に灌ぎ水嵩を増して陥れようとした

本能寺の變

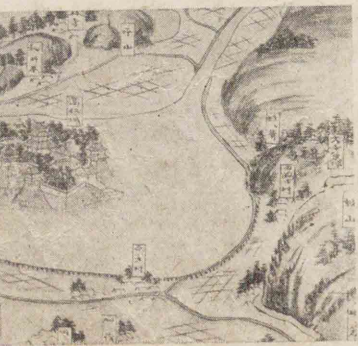


安土にして中國に毛利輝元を伐たせた。秀吉は天正十年備中の高松城(守將は清水宗治)を圍み、これを水攻めにしたが、輝元が大舉して來援したので、秀吉は急を信長に報じた。信長は西征の途中、京都の本能寺に於て、その臣明智光秀に弑せられ、こゝに信長の海内平定の大業

も和し、またこの間に近江の安土城を築いて(三三)ここに移つた。

四 信長一統の形勢 信長は天正十年(三三)に

武田信玄の子勝頼を滅ぼし、また羽柴秀吉を



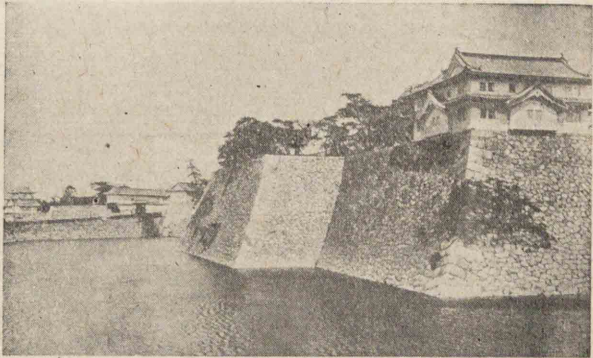
高松城水攻古圖

山崎の戦

秀吉は、戦國以後の新しい築城法に則つてこの城を營み、周圍に諸將の邸宅を建てしめ、多くの商人を城下に移らしめた

大阪築城

小牧・長久手の戦



大阪城址

も挫折した。

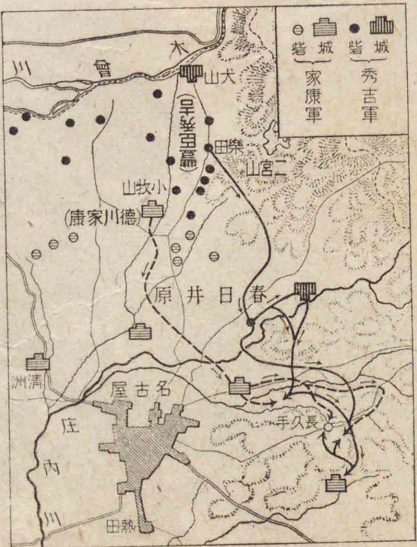
⑤ 秀吉の天下一統 秀吉はこの變報を聞
くや、毛利氏と和して軍を班し、光秀を山崎
に破り、その聲望は大いに揚つた。織田氏
の宿將柴田勝家等は、信長の子信孝と共に
これを嫉んで兵を擧げたが賤嶽の戦で大
敗し(四三)、勝家・信孝は間もなく相ついで滅
びた。かくて信長の遺業は全く秀吉に歸
し、秀吉は壯大なる城を大阪に築いてその
居城とした。その頃信孝の兄信雄も秀吉
を除かうとして家康に援を求めた。家康はこれに應じて兵を出し、
長久手に於て秀吉の軍を破つたので(四四)、機を見るに敏な秀吉は忽
ちこれと和睦した。

四國平定
北國平定
九州平定
關東平定

五奉行
淺野長政
石田三成
增田長盛
長束正家
前田玄以

秀吉はその後、長曾我部元親を
伐つて四國を平らげ(四五)、上杉景
勝と和して北國を定め、島津義久
を攻めて九州を平らげ、天正十八
年(五〇)には北條氏政、氏直父子を
小田原に圍んでこれを滅ぼした。

この時



小牧・長久手の戦

伊達政宗など奥羽の諸豪も皆來り降つた
ので、こゝに國內は全く統一された(五二)。
⑥ 秀吉の内治 秀吉の官位はこの間に累
りに進み、從一位關白となり、ついで太政大
臣にのぼり、豊臣の姓を賜はつた(四六)。秀吉
は深く内治に意を用ひ、五奉行を置いて諸



豊臣秀吉

【圖(上)】 秀吉の頃の檢地帳の一部で、わが國最古のものである



檢地帳

政を分
掌せし
め、更に
その上

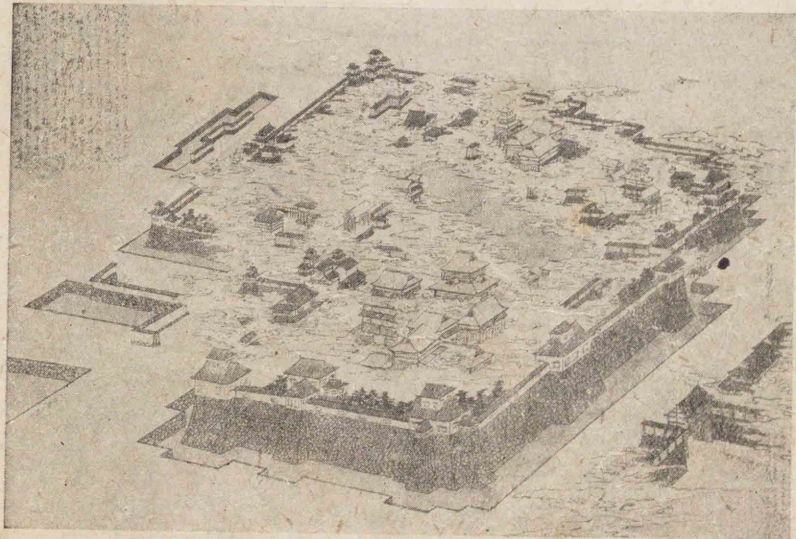
五大老
徳川家康
前田利家
毛利輝元
宇喜多秀家
小早川隆景

【圖(下)】

秀吉が片桐且元等に命じて、天正十二年起工し、十五年に落成したもので、城郭と貴族の邸宅を合せた宏大華麗の建物である

聚樂第行幸

に五大老を置いて大事を議せしめた(五二)。また諸國の田地を檢して石高の制を立て、税法を整へ、新たに貨幣制度を定めた。
⑤ 秀吉の尊王 秀吉もまた信長に倣つて尊王の心が篤く、京都に營んだ聚樂第(五三)に後陽成天皇の行幸を仰ぎ(五四)、善美を盡して御歡待(五五)申し上げると共に、諸大名を會



聚樂第

西洋人渡來の原因

西洋人の東洋來航の動機となつたのはマルコ・ポーロの著書である。マルコ・ポーロはイタリヤの人であるが支那に來て元の忽必烈に仕へ、歸國の後、東洋で見聞したことを書き記し、その中にわが國を黄金國として紹介したので、西洋人の好奇心をそゝり、皆か東洋へ東洋へと憧れるやうになつたのである。

キリスト教の傳來

して皇室に忠誠を盡すべきことを誓はしめ、且つ皇室の御料を増し、親王公卿の所領を定めなどして、頻りに王事に勤めた。されば皇威は、信長によつて高きを加へ、更に秀吉の尊王によつてますます尊嚴を増すこととなつた。

第二章 安土・桃山時代の外交と文化



ラフシンコスニコヴァエ

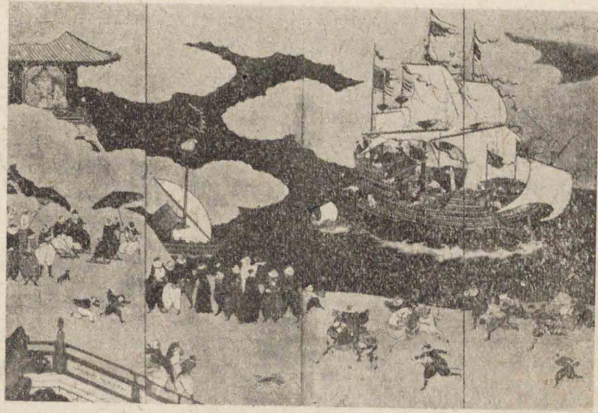
● 西洋人の來航 戰國時代に、西洋人は争うて東洋に來航し、天文十二年(一五八三)には、ポルトガル人が始めて大隅の種子島(タネゴシマ)に漂着して鐵砲を傳へた。その後フランスコルザヴィエルは、鹿兒島に來てキリスト教(天主教、切支丹宗といふ)を傳へ(一五九二)、ついでイスパニヤ人も來て通商を開いた。わが國ではこれらの

圖(上) 南蠻船渡來屏風の一部

信長のキリスト教保護

圖(下) 圖はイタリヤのバチカン圖書館の壁畫で、天正十三年三月二十三日ローマ法王宮に向ふ行列の盛況である

キリスト教の弘布 大友氏等使節をローマに派遣す



南蠻人來の圖

西洋人を南蠻人と稱した。

キリスト教は、信長が京都に南蠻寺を建てさせ、これを保護したので、九州・中國畿内から遂には奥羽地方にまで弘まり、中にも九州の大友・大村・有馬の三侯の如きは、遠く



大友氏等の使節マロ入城圖

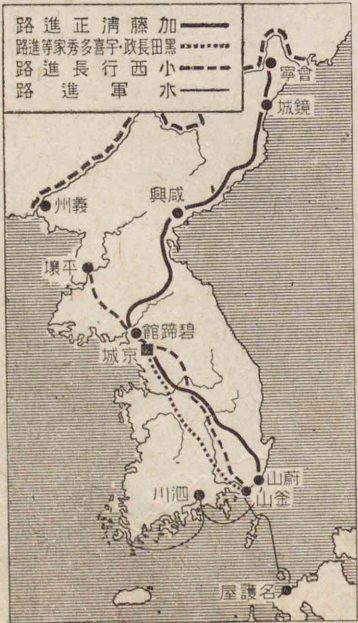
西洋學藝の傳來

秀吉のキリスト教嚴禁

使節を羅馬法王の下に遣はすほどに信仰が篤かつた。かくキリスト教が弘まり、西洋人の渡來するにつれ、西洋の學問や技藝もやうやく傳はりわが文化の發達に影響した。殊に鐵砲や大砲の傳來によつて、わが國の戰術や築城法に大變化を來たした。しかしキリスト教はわが國風と相容れぬところもあつたので、秀吉は後にその布教を嚴禁した(四七)。

●秀吉の海外發展 秀吉は天下一統の後、かねてより發達せる國民

の海事思想に乘じ、大いに海外に發展せんとし、先づ對馬の宗氏をして、朝鮮との好を修めしめ、更に朝鮮王(李)をしてわが意を明に通ぜしめんとした。しかし朝鮮王は



朝鮮地圖

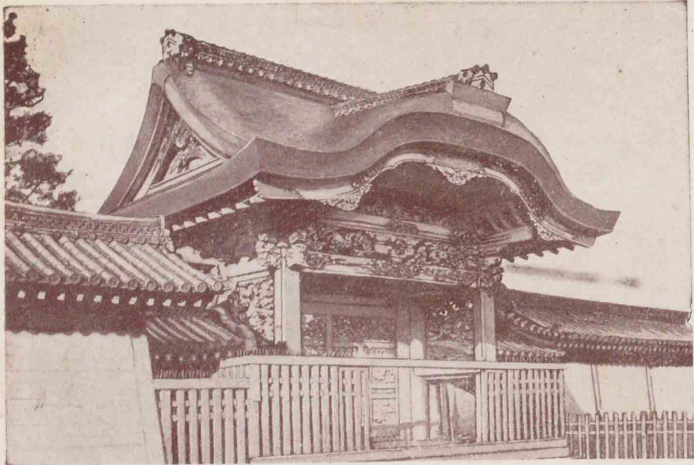
朝鮮に出兵

碑は高野山にあり、朝鮮陣に戦死した敵・味方共に供養するため、同役に出征した島津義弘父子の建立したものである

琉球・臺灣・呂宋・臥亞に來聘を促す

安土城

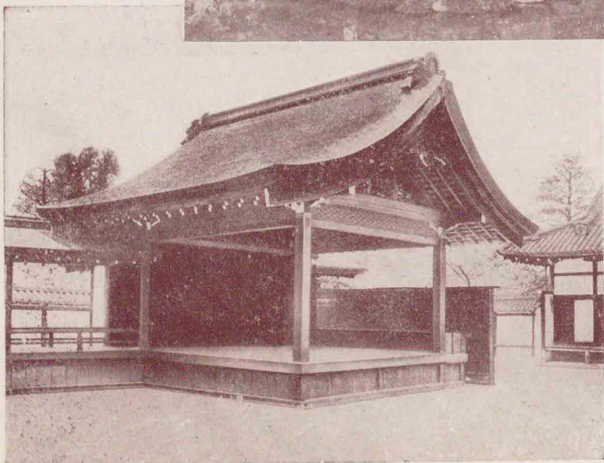
桃山時代の建築



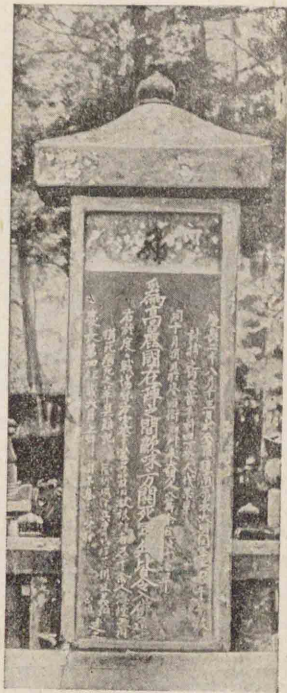
京都西本願寺唐門



同寺飛雲閣
(伏見城遺物)



同寺能舞臺



戦死者の供養碑

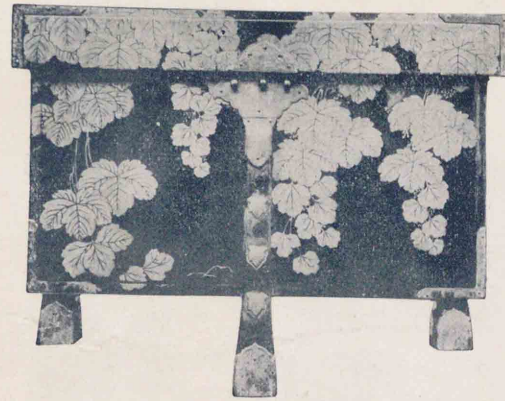
これを肯じなかつたので、秀吉は遂に兵を朝鮮に出し、自らは名護屋(肥前)にゐて遙かに全軍を督した(五二)。この役は前後

二回(文祿の役)七年に互つたが、慶長三年(五二)秀吉が伏見城に薨じ、その遺命により在外の軍を引上げしめたから、大陸出兵の目的は達し得なかつたけれども、國民の海外雄飛の氣風は大いに養はれた。なほ朝鮮より輸入された活版印刷製陶業は日本各地に擴まつた。秀吉はまた島津氏をして琉球に來聘を促さしめ、更に臺灣・呂宋・臥亞にもそれ／＼書を贈つて入貢を勧めたが、不成功に終つた。安土桃山時代の文化、信長の築いた安土城は、七重の天主閣と堅固な石垣を有し、規模結構に於て一時期を劃したものである。秀吉

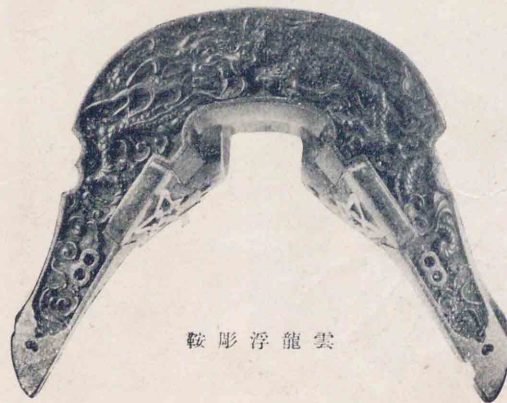
桃山時代の繪畫



見花の酬醜
(吉秀が下の傘)



(藏社神島殿) 櫃唐小繪蒔葛
ツヒラカ エキマツ



鞍彫浮龍雲

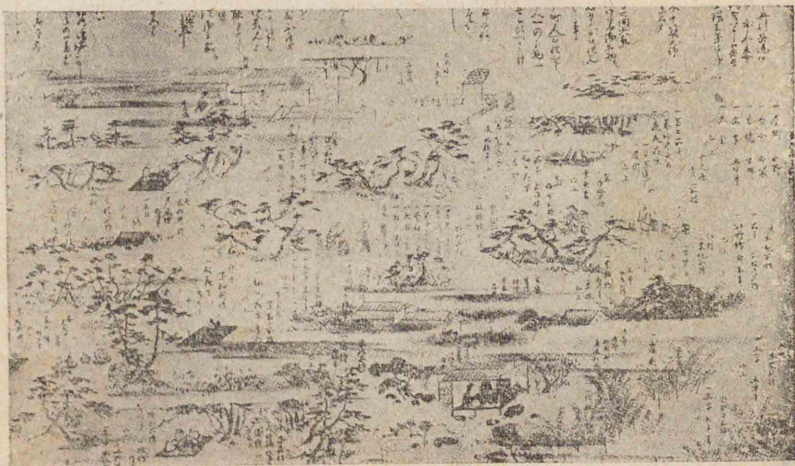
聚樂第
大阪城と桃山城
豪壯なる建築

繪畫

秀吉は天正十五年の秋、廣く海内の有志を集めて、こゝに大茶の湯の會を開いた。

も壯麗なる聚樂第を構へ、大阪城と桃山城(伏見)とをつくつた。この城郭は住宅を兼ねたもので、郭内の建築には豪壯な破風を存し、これに應ずる彫刻も雄大であつた。なほ大襖に狩野永徳、山樂並びにその一門のものが氣力に満ちた豪華な繪を描いてゐる。當時油繪もまた輸入されて、日本でもその法が用ひられた。桃山時代の美術には潑刺たる新時代の新様式が現はれてゐる。

北條早雲、織田信長、豊臣秀吉、その他の諸侯は、儒教の精神を以て政治を行



會茶大野北

風雅な嗜み

ひ、文武の道を奨励し、能樂茶會等の風雅な藝を好み、殊に秀吉は北野に大茶會を催して民衆と樂しみを俱にし、また醍醐の花見には公卿諸大名と共に歌などをよみ、豪華な遊びをした。

第三章 江戸幕府の創立

江戸城を築く

家康は僧天海を尊信し、その教へを受くることが多かつた。狩野探幽筆

家康の隆盛



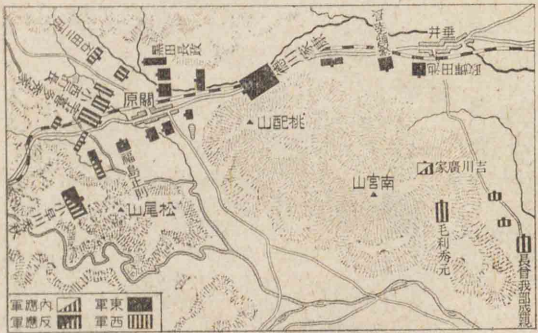
海天僧と康家川徳

家康の覇業 徳川家康は江戸に城を構へ、五大老の首席として既に隠然たる勢力を有してゐた。やがて秀吉の薨ずるや、その遺命により、幼嗣秀頼(六歳)を輔けて政務を執つたが前田利家の歿後、天下の輿望は自ら家康に歸した。かねてから家康の専權を惡ん

關原の戰

東海道繪卷江戸本丸圖の一部で、諸侯登營の狀を示す

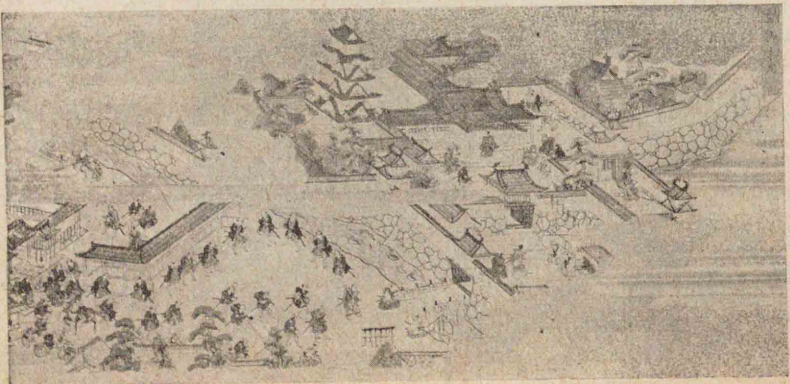
家康征夷大將軍となる



關原戰圖

東軍 西軍 征夷大將軍

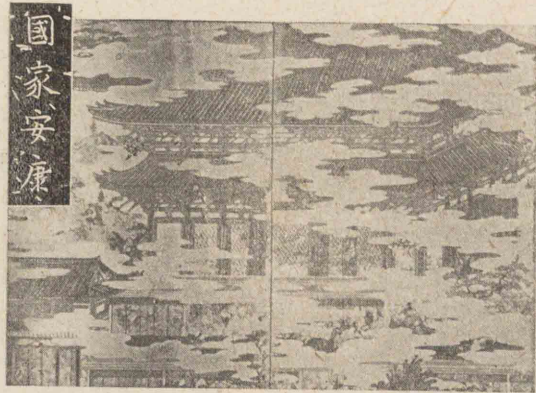
であつたので、天下分目の戰といはれた。戦後、家康は諸大名統一の業を全うし、政治上の實權を握つた。江戸幕府の創立 慶長八年(一六三三)家康は征夷大將軍に任



江戸城

【圖解(上)】
方廣寺の鐘は慶長十九年豊臣秀頼が大佛殿再興の時に鑄造したものである
豊臣氏の餘勢に對する考慮

【圖解(下)】
大阪夏の陣屏風繪の一部。圖は大阪城本丸に於ける元和元年五月七日の戦況である

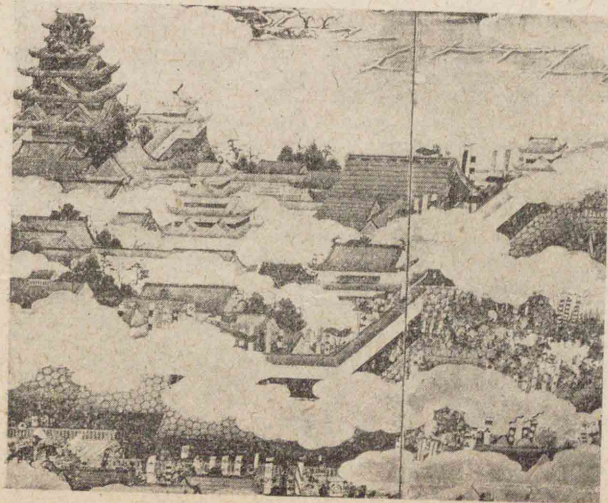


方廣寺の鐘の銘の一

ぜられたが、在職三年にしてこれを子秀忠に譲り、駿府に隠居した。しかし大事はなほ自ら決したので、世に大御所といつた。かくして江戸幕府の基は定められたが、豊臣氏の存在

鐘銘事件

はなほ大なる障害であつた。されば家康は大阪方の勢力を除きたいと考へ、遂に方廣寺の鐘銘事件を惹き起し、これを激して兵を擧げしめ、



大阪夏の陣

冬・夏の陣
豊臣氏の滅亡

冬夏兩度の陣を経て、元和元年(七三三)豊臣氏を滅ぼし、幕府の地盤をいよゝゝ堅固ならしめた。

幕府の組織 三代將軍家光は、諸大名を威服させたのみならず、また制度政策等も完成せしめ、幕府の威權は甚だ盛となつた。

幕府には、將軍の下に大老・老中・若年寄があつた。大老は常に置くのではなく、大抵は老中が政務を統べ、若年寄がこれを輔けた。その

三奉行
大目付・目付
所司代・城代
各要地の奉行
郡代・代官

下に寺社奉行・勘定奉行・町奉行の三奉行があつた。また別に大目付・目付があつて、大名旗本を監察した。京都には所司代を置き、大阪

駿府には城代を、要地(山田・長崎・佐渡)には奉行を、直轄地には郡代・代官を置いて支配せしめた。

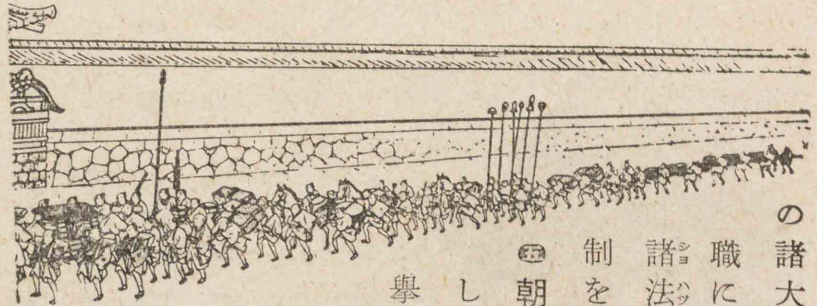
諸大名に對する政策 諸大名の配置は、幕府の最も意を用ひたところで、親藩・譜代・外様



徳川家光

*武家諸法度は元和元年貞永式目などにならつて作つたもので十三箇條あり、諸大名に對して文武を兼備へ儉約を主とすべきことや、また私に居城を修築し、私に婚姻を行ひ、徒黨を結ぶことを禁じたものである。この法度は頗る嚴格に實行し、これに觸れたものは遠慮なく處罰したので、元和以來このために斷絶した諸侯も少くない

後水尾天皇

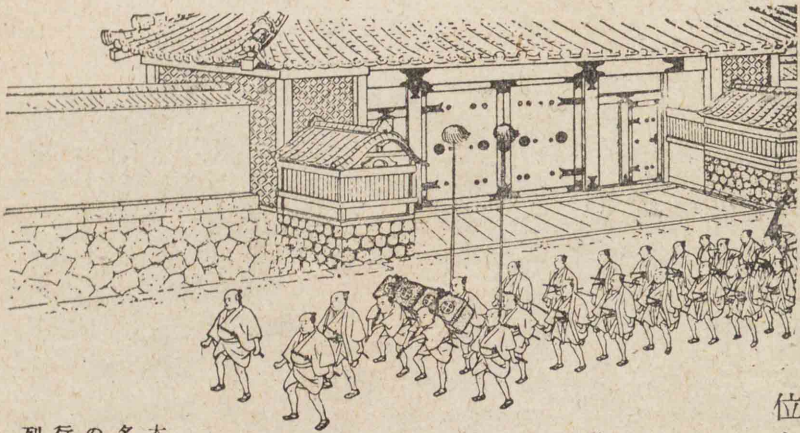


の諸大名を親疎大小巧に交へて互に牽制させ、幕府の要職には外様大名は一切與らしめなかつた。また武家諸法度を頒つて(七五)諸大名に嚴守せしめ、參勤交代の制を設けて幕府の威嚴を示し、諸侯統制の實を擧げた。
●朝廷に對する政策 家康は表面は頗る朝廷を尊崇したが、公家諸法度を定め、また京都所司代に人材を擧げて、朝廷に備へ、政治の實權を自ら握つてゐた。また秀忠はその女和子(東福門院)を後水尾天皇の中宮となし、皇室の外戚となつて、ますます威權を恣にせんとした。

後水尾天皇は英明にましまし、夙に幕府の專横を憤られて居られたが、御年僅か七歳の皇女明正天皇に御讓位あらせられた。ついで御即

後光明天皇

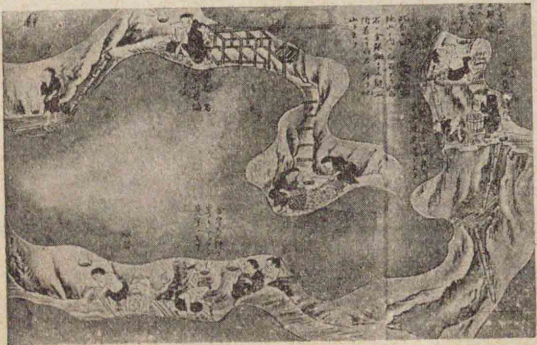
佐渡・石見等の
鑛山



大名の行列

●經濟の進歩
幕府は家康以來經濟に留意し、佐渡・石見をはじめ諸國の鑛山を採掘して、大判・小判及び銅錢を多く鑄造し、また銳意産業を獎勵して

位あらせられた御弟後光明天皇は、幕府を抑へて大いに皇威を張らうとせられたが、御志成らずして早く崩せられた。これより幕府は思ひのまゝに政を行つていつた。



佐渡の鑛山

道路の整備



角倉了以

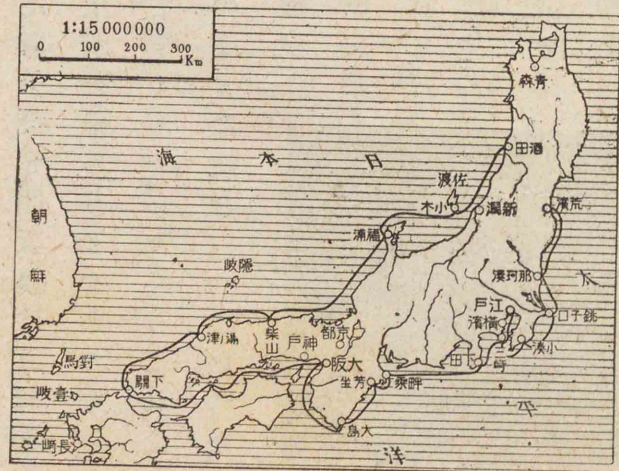
國富の増加を圖つたから、國內の平和と共に江戸・大阪をはじめ、諸侯の城下町も著しく繁昌した。

また參勤交代の制が定ま

り、諸侯の往來が繁くなるや、道路は整ひ、宿驛は備はり、交通は頗る便利となつた。東海道・中山道・日光街道・奥羽街道・甲州街道の五街道はその主なるものであつた。

水運の發達

また水運は、家康の時に角倉了以が富士川・保津川・天龍川に舟運の便を開き、家綱の頃河村瑞賢は幕命をうけて



東 西 漕 運 圖



歌川重筆 大井川輦臺渡

江戸幕府は、その政策上、東海道の大井川のやうな急流にも架橋と渡船とを許さなかつたから、參勤交代のため、江戸と封地との間を往復する大名は勿論、一般の通行人の不便は一通りでなかつた。この圖は大名の交代の途次、駿河の島田河岸から輦臺に乗つて遠州金谷に渡る行列を寫したもので、當時の旅行の様も窺ふことができる。

商業の發達

大阪に安治川を掘り、また幕府が大船を造ることを禁じたため、やゝ遅れてゐた海運についても、江戸・奥羽間に東西の二航路を開いて、東北地方の産物を江戸に回漕する便利を與へた。こゝに於て國內商業も著しく進歩した。

第四章 海外諸國との交通 鎖國

家康の貿易獎勵

●家康と外國貿易 家康は國富増進の一策として、大いに通商貿易を獎勵したので、江戸時代初期に於ける通商貿易は頗る活氣に富んだものとなつた。

朝鮮との修交

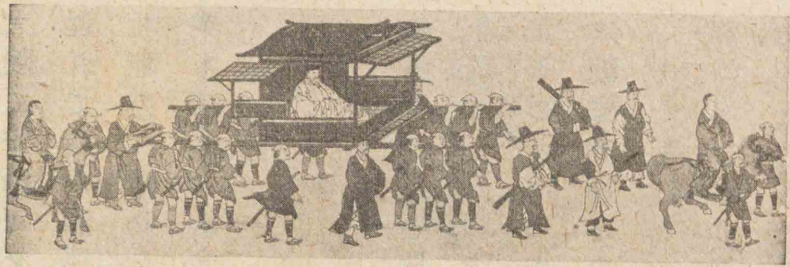
●朝鮮・支那との交通 家康はまづ對馬の宗氏に命じ、秀吉以來絶えてゐた朝鮮との國交を回復した。その後朝鮮は將軍の代る毎に慶賀の使を送り、幕府も厚くこれを待遇した。家康はまた琉球王をして明との國交復舊を圖らせたが、遂に成功しなかつた。しかし彼の

支那との關係

使節は正使・副使・通事・醫師・畫工・樂人等五百人の多數に上ることあり、これが接待にも多くの費用と日數を要した

オランダ船の漂着

オランダ・イギリスとの貿易

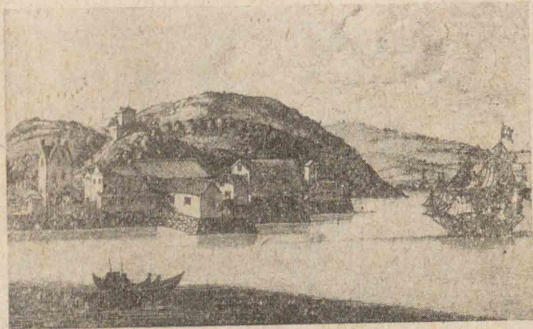


商人は毎年わが國に來て貿易を營み、後、明に代つて清が興つてからも、商船の往來は盛であつた。明の滅びた時、その遺臣鄭成功が臺灣に據り、明の回復を謀り、度々援けをわが國に求めて來たが、幕府はこれに應じなかつた。

朝鮮の使者の 西洋諸國との通商 ポルトガル、イスパニヤの商船は引き続き來航したが、慶長五年(一六〇〇)オランダの商船が始めて豊後に漂着し、その乗組員のイギリス人ウリヤム・アダムス(三浦按針)オランダ人ヤン・ヨーステン(耶揚)は江戸に召されて家康に仕へ、外交の顧問となつた。この頃オランダ人及びイギリス人は熱心に東洋貿易に従つてゐたが、相ついでわが國に來り、いづれも通商を許されて、商館を

メキシコ(濃昆數艘)との通商

左方に見える洋館が外國の商館である



平戸に開いた。後イギリスはオランダとの競争に敗れ、日本を退いた。家康は更にイスパニヤ領のメキシコとの通商を企て、京都の商人田中勝助を遣はしたが、成功しなかつた。

平戸の 伊達政宗も家康の内命をうけ、家臣支倉常長を遠くヨーロッパに遣はした。

邦人の海外發展 家康の貿易獎勵によつて、西國地方の諸大名をはじめ、京都、長崎

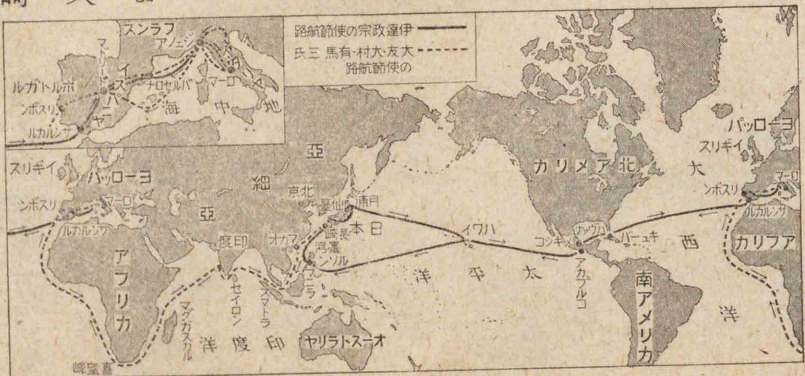


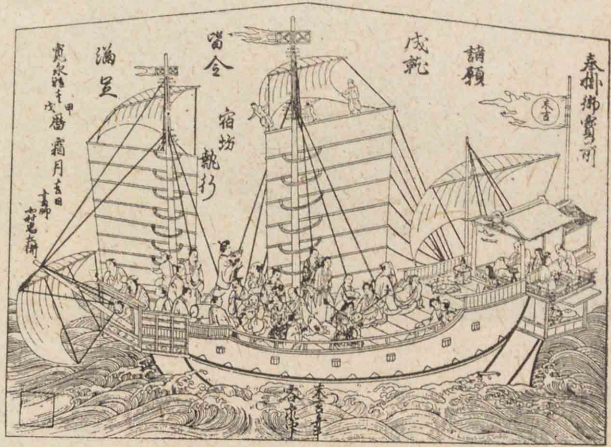
圖 通 交 の へ ば ー ー ー 日

御朱印船

宋吉船は御朱印船の一つである。この繪は大坂の商人末吉孫左衛門所有の御朱印船の乗組員が無事歸朝の御禮に京都の清水寺に奉納した末吉船の額の一である。

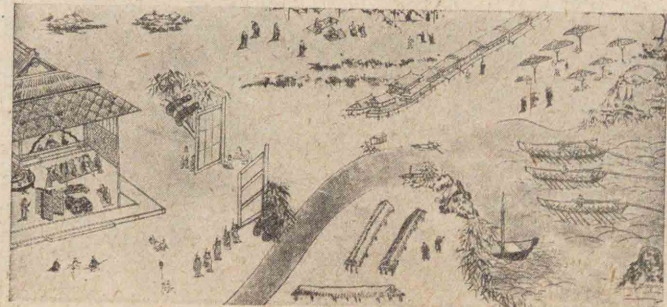
南洋の日本人町 濱田彌兵衛

安南の日本人町に茶屋四郎次郎の船の到着した時の光景である。山田長政



末吉船

長政は暹羅に行つて武功をたてるなど、わが國民の海外發展の意氣は實に旺であつた。
⑤キリスト教の禁 秀吉はキリスト教を禁じ



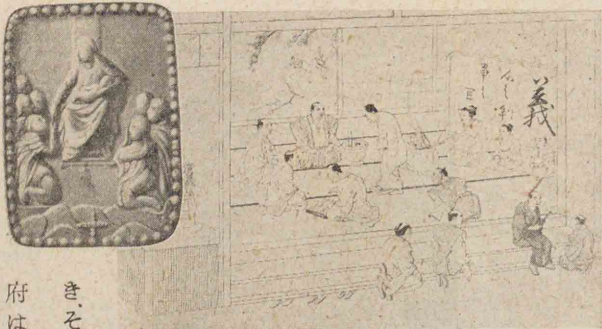
南洋の日本人町

等の貿易商人は、遠く南洋地方に朱印船を遣はした。従つて海外に移住するものも多く、呂宋、暹羅、安南などには日本人の町さへ建てられた。中にも濱田彌兵衛は臺灣に渡つてオランダの甲比丹を抑へ、山田

家康の禁教

家光の禁教

踏繪はキリスト教徒の疑のあるものに踏ませたもので、初め紙に畫いた繪であつたが、後には金屬で作ることとなつた。圖は長崎に於ける踏繪の執行 賊勢旺盛



踏繪と繪踏の施行

たが、家康もこの方針をとつた。しかし通商はなほ奨励したので、容易に禁教の目的を達することが出来なかつた。よつて家光はこれが徹底を期し、寛永十二年(九三)、國民の海外渡航を禁ずると共に、ますますきびしくキリスト教を取締つた。

島原の亂 この嚴重な取締に不平だつた島原、天草島の信徒等は、寛永十四年(九七)島原半島の原城址に據つて叛

き、その勢は甚だ盛であつた。幕府は板倉重昌、老中松平信綱を相

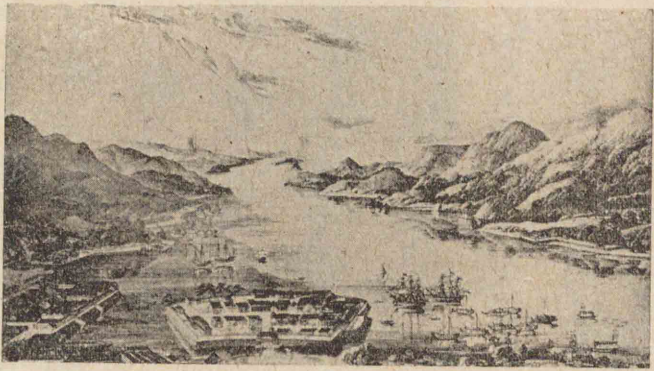
ついで遣はし、これを平らげた。

鎖國 幕府は寛永十六年(九三)清人、オランダ人以外の商船の渡來を禁じ、國內では



島原の亂の要地圖

前面は長崎港で、中央に扇形をして突出してゐるのが出島である。
シーボルト撰「日本」による



田島

宗門改を勵行し、踏繪を行ふなど、その徹底を圖つた。ついで寛永十八年(一七四一)には貿易を長崎の一港に限り、オランダ人の商館を出島に移し、嚴重に鎖國政策を行つた。
⑤鎖國の影響　こゝに於て邦人の海外への活動は全く止み、國民は世界の氣勢に暗く、僅かにオランダ人から西洋の事情を聞くに過ぎなかつた。かくてわが國は世界の進運におくれたが、しかし國內の秩序は定まり、太平が久しく續いて、國産及び國風の文化の發達を來したことは少くない。

第五章 元祿の世相 學問の復興

世界の進運における
國産及び國風文化の發達

綱吉の弊政

慶長大判・慶長一分金・天保一分銀・元祿丁銀・寛永通寶・天保通寶

生類憐の令

財政困難

貨幣改鑄

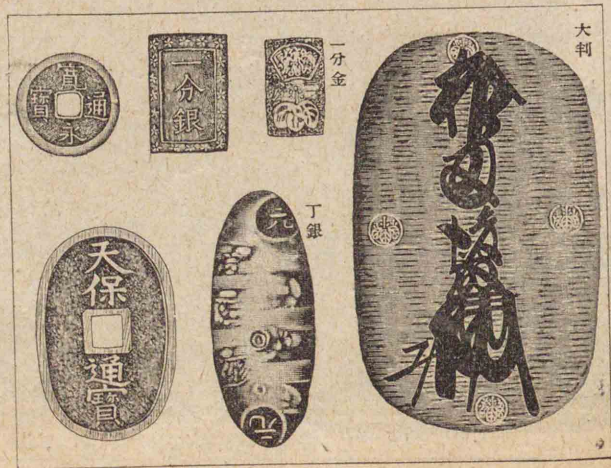
武士の氣風弛む

① 綱吉の政治 五代將軍綱吉は學問

を好み、一時善政に志したが、程なく政治に倦み、側用人柳澤吉保に政を委ねて自ら遊樂を事としたので、政は大いに紊れた。なほ綱吉は深く佛教を信じ、生類憐の令を出した。その上江戸の地震、火事、富士山の噴火など天災が頻發したから、財政が頗る困難となり、遂に勘定奉行萩原重秀をして盛に金銀貨を改鑄せしめその品質を粗悪にしたので、物價は著しく騰貴し、人民は大いに苦しんだ。

② 元祿時代 幕府に失政多く、その上、この頃は太平が續いたので、武

士の氣風も漸く弛み、また商業の發達につれて、商人の富むものも多



江戸時代の貨幣



居 芝 筆宣師川菱

奢侈の風

赤穂義士

家康の奨學

第四篇 近世史

くなり、ために奢侈に流れ、淨瑠璃^{ジュウリン}、歌舞伎^{カブキ}などの娛樂も流行し、衣服調度なども華美を極めた。この時代の風俗を世に元祿風といふ。

かゝる時代に於ても、なほ赤穂^{播磨}の浪士大石良雄等四十七名は、主君の仇を報じ^(六三)、後世永く武士道の華と謳^{ウタ}はれた。

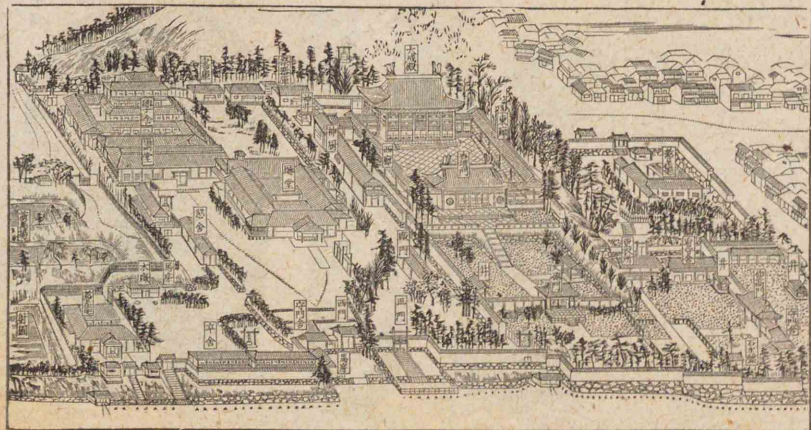


山 羅 林

藤原惺窩^{キョウカ}を招いて儒學を講義させ、その門人林羅山^{リン}を學事の顧問とし

學問の興隆

家康は心を文教に用ひ



校 平 昌

俳優が舞臺で踊つてゐる所と見物人とを畫いたもので、貞享・元祿頃の芝居の風が最もよく寫されてゐる。

筆者菱川師宣は江戸の浮世繪を大成した人で、寛文・元祿頃名聲を博した風俗畫の大家である。

綱吉の好學

昌平校

*水戸の弘道館、尾張の明倫堂、鹿兒島の造士館、會津の日新館等は有名な藩校である

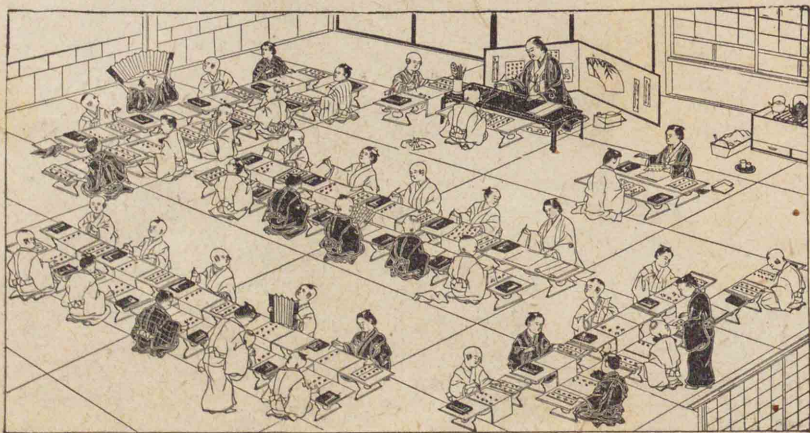
寺子屋

儒學者の輩出

*了介の姓は藩山といつたが、後これを號として用ひた

て古書を集め、またこれを出版し、その普及を圖つたので、學問は漸次民間にも及んだ。將軍綱吉は殊に儒學を好み、湯島に聖堂を建て、林家の塾をその側に移して、幕府の學校(これを昌平校といふ)とした。諸藩も幕府に倣つて學問に力を盡し、學校を開いた。また各地に學者の私塾が開かれ、兒童のためには寺子屋がふえて、庶民教育が次第に普及した。

四 儒學の發達 將軍家光の頃には近江に中江藤樹が出て、學徳高く近江聖人といはれ、その門下には熊澤了介があつた。その後、京都には山崎闇齋・伊藤仁齋・東涯



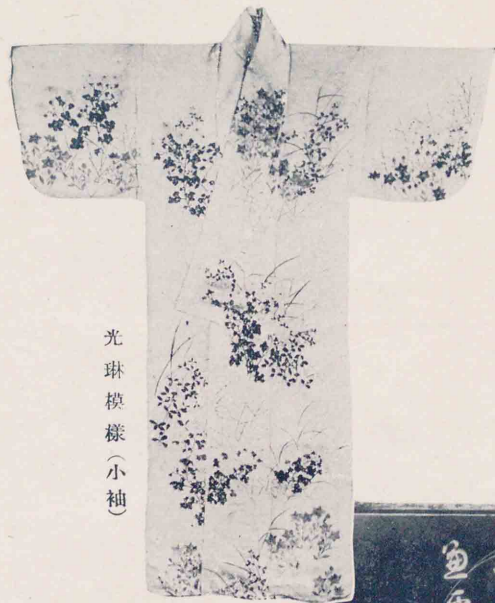
寺子屋



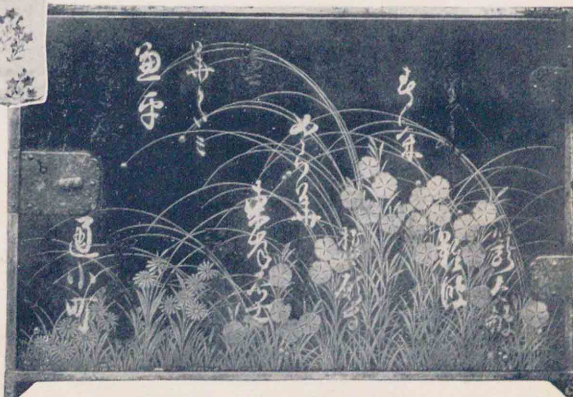
庶民の風俗



(作清仁) 壺茶



光琳模様(小袖)



秋草模様
謡曲本箱
(光悦作)

名吟を残した。

●美術・工藝の進歩 さきに家光の頃、狩野

探幽(永徳の孫)が狩野派を再興し、土佐光起は土

佐派を盛にしたが、元祿の頃、江戸の菱川師

宣は専ら當時の風俗を寫して浮世繪の盛

行する風を助け、また京都の尾形光琳は華

やかな模様畫をかき、詩繪に巧であつた。光琳の畫風は盛に陶器・漆

器・織物などの模様に応用せられて、工藝を進歩させた。



松尾芭蕉

狩野派
土佐派

光琳風

新井白石の政治
改革

第六章 江戸幕府の中興

●家宣・家繼の政治 綱吉の薨じた後、家宣・家繼が相ついで將軍とな

り、この間新井白石が重用せられた。白石は和漢の學に通じ、經濟・歴

史に委しく、種々前代の弊風を改めようとした。即ち閑院宮家(東山天皇の皇

【圖解(下)】
吉宗はその家臣をしてオランダ人ケイズルから馬術を習はしめ、吉宗も時にケイズルについて馬術を學んだ

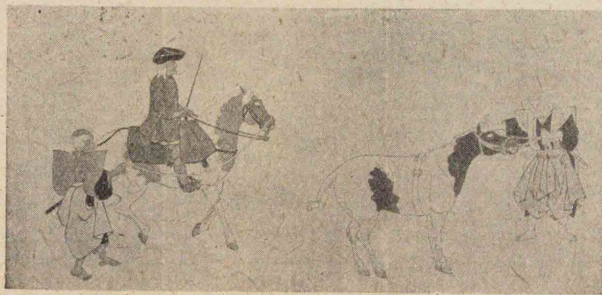


新井白石

子直(親王)を創設せられんことを朝廷に奏請し、また専ら經濟界の調整に努め、元祿の惡貨を改鑄して殆どもとの良貨に復し、長崎の貿易額を制限して金銀の海外に流出するのを防いだ。

●享保の治 家繼が幼

くつて薨じたので、吉宗は紀伊家より入つて第八代將軍となつた。吉宗は儉約を守り、武を練つて士氣を鼓舞し、風俗の匡正に努め、また公事方定書(御定書百箇條)を定め、足高の制を立てて人材登用の道を開き、中にも名判官大岡忠相は江戸町奉行に擧げられた。また實用の學を重んじ、教育の普及に意を用ひ、自然科學に關する洋



吉宗の馬術講習圖

儉約の獎勵
風俗の匡正
法律の制定
人材の登用

經濟政策

書を読むことを許した。また經濟には殊に意を用ひ、殖産興業を圖り、甘藷・甘蔗等の栽培を獎勵した。ために諸大名も産業を奨め、地方の新しい産物も多くなつた。

中興の英主

かくて吉宗によつて前代の弊政が肅正せられ、治績大いにあがつたので、吉宗を幕府中興の英主となし、その政治を享保の治といふ。

●諸藩の治

江戸時代には、諸大名のうちにも、よく藩政につとめて、

名君の譽を得たものが少くなかつた。綱吉の頃、岡山の池田光政は熊澤了介を用ひて開墾、治水をなし、吉宗の頃、熊本の細川重賢(銀臺)米澤の上杉治憲の如き名君が出て、おのゝ産業を獎勵し、善政を施した。

民間にも殖産に熱心なものが現はれ、中にも佐藤信淵は農業の開發を論じ、二宮尊徳は



池田光政

池田光政
細川重賢
上杉治憲
佐藤信淵
二宮尊徳

平民文化

小説・狂歌・俳句

繪畫

版畫

水野忠邦の改革

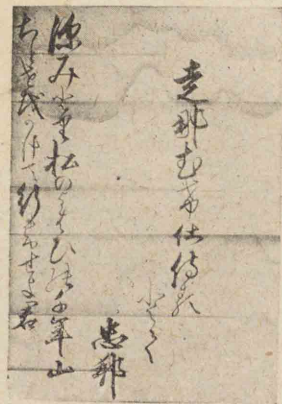
はなむけ仕侍るとして
深みどり松のよ
はひの千年山ち
とせをかけて行
來せよ君

の向上したることなどによつて、平民の文化は著しく發達した。小説には曲亭馬琴、山東京傳、十返舎一九、式亭三馬、狂歌には太田南畝（蜀山）、俳句には與謝蕪村、小林一茶などが最も著はれた。

繪畫には文人畫に池大雅、與謝蕪村等があり、圓山應舉は寫生畫に秀で、司馬江漢は西洋畫を再興した。浮世繪は時代を反映して最も平民の間に喜ばれ、喜多川歌麿、歌川豊國、葛飾北齋、歌川廣重等の大家が輩出し、それらの畫は美しい版畫として廣く世に行はれた。

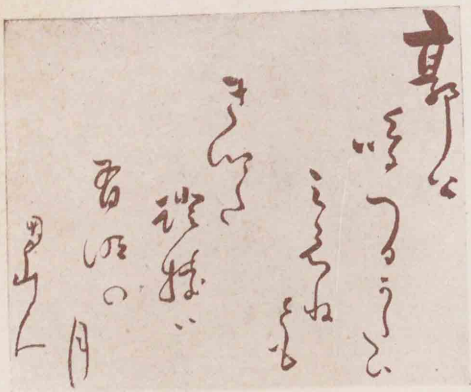
⑤ 天保の改革 家齊の譲りを受けて、その子家慶が將軍となつた。

老中水野忠邦は幕府の衰勢を憂へ、大改革の必要を感じ、儉約令を出し、奢侈を禁じ、武藝を奨励し、風俗を正すなど、大いに綱紀を肅正しようとした。されど人心の弛廢は著しく、その上この改革があま



水野忠邦の書

文・化・政・時・代の文藝



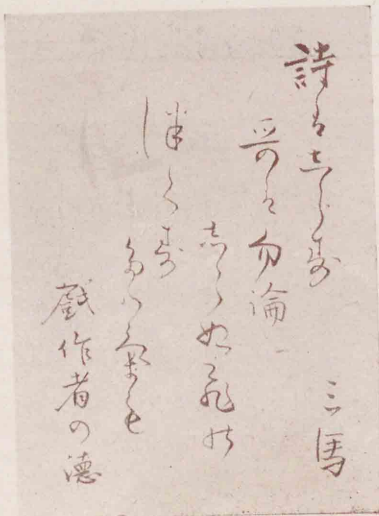
小林一茶筆蹟(下)
やれうつな
蠅が手をす
り足をす



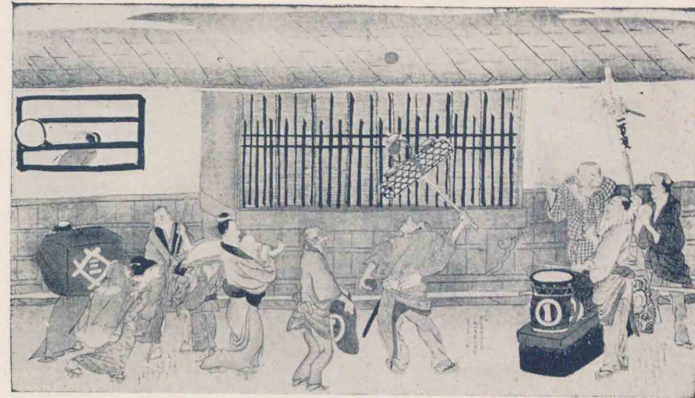
蜀山人筆蹟(上)
郭公鳴つるか
たはみえねど
もきいた證據
は有明の月



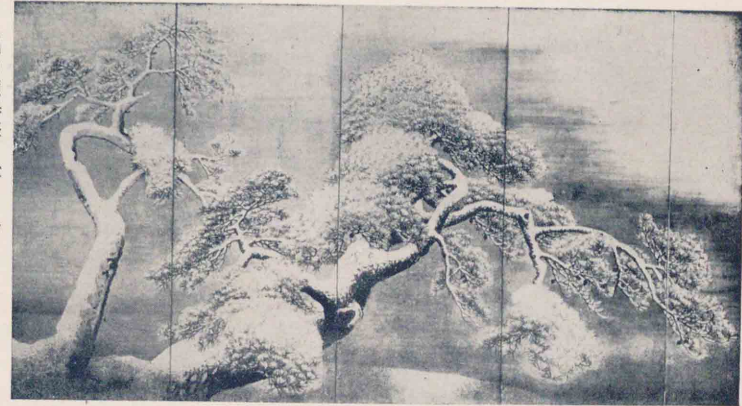
(上) 十返舎一久作
東海道中膝栗毛の第一



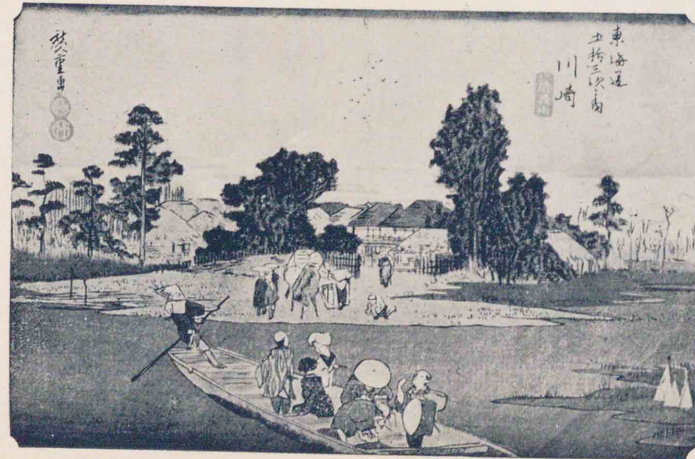
式亭三馬筆蹟(左)
詩はしらす歌は勿論しらすの
つくすたはけも戯作者の徳



庶民の風俗 歙形蕙齋筆



圓山應舉筆 雪の松



歌川(安藤)廣重筆
川崎(東海道五十三次の内)

りに急激峻烈であつたため、却つて上下の怨をうけ、忠邦は職を退き、失敗に終つた。世に忠邦の政治を天保の改革といふ。かくて世はあげて奢侈享樂に流れ、幕府の紀綱が全く弛んだ時に當り、内には尊王の思想が勃興し、外には外交の脅威があり、遂に幕府は由々しき難局に遭遇するに至り、次第に衰運に傾くこととなつた。

第八章 尊王思想の勃興

學問の進歩
皇室尊崇
幕政と國體

●尊王思想の起 幕府の勢力が盛であつた頃には、多くの人はただ將軍を仰ぐばかりで、國體の本義を忘れる者もあつた。されど學問が進むに従つて、將軍の臣下たるべき地位は一層明らかになり、また國史の研究及び國學の發達によつて、わが國の國柄が次第に人々に知られて來た。かくて皇室を尊崇する念が國民の間に弘まり、幕府の政治はわが國體の本義を離れたものであることを覺るやうに

大日本史

大義名分明らかとなる

稿本は殆ど原の形を留めないままでに添削されたところが有り、以て如何に厳正なる校訂が行はれたか苦心のあとが窺はれる

山鹿素行

山崎闇齋

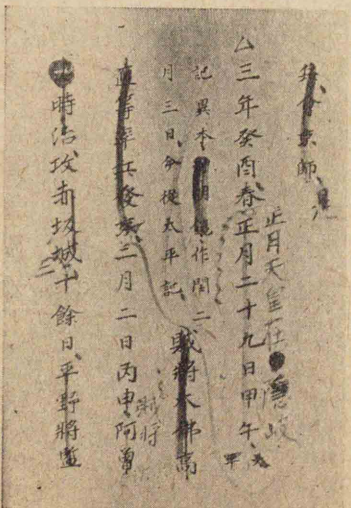
浅見綱齋



徳川光圀

なつた。

● 國史研究の勃興 國史の研究は古典の研究に伴つて起つたが、中にも水戸の徳川光圀は彰考館を開いて大日本史を著はし、大いに大義名分を明らかにした。



大日本史稿本

● 漢學者と尊王論 儒者のうちには儒學を尊ぶのあまり、わが國をいやしめ輕んずるものもあつたので、山鹿素行はこれを憂へて中朝事實を著はし、山崎闇齋は垂加神道を説いて敬神尊王の思想を鼓吹し、その門人浅見綱齋は靖獻遺言を著はして忠誠のことを説いた。

竹内式部
山縣大貳

藤井右門



山鹿素行

こゝに於てわが國體はいよゝ明徴となり、朝廷に對する幕府の不遜を憤るものがやうやく現はれた。竹内式部と山縣大貳は共に闇齋の學説を奉ずるもので、殊に式部は公卿の間に入出し、武家政治の非を論じて王政の古にかへるべきを唱へ、遂に

幕府に忌まれて追放せられた(二四)。大貳も幕府を攻撃し、暗に王政復古を唱へ、同志藤井右門もまたこの説を祖

述して、共に罰せられた(三三、三七)

● 國學の勃興と尊王思想 かくて尊王論

を唱へる者は忽ち處罪せられたが、國學の勃興につれて尊王思想はますます弘められた。元祿の頃僧契沖は大阪に居て萬葉



本居宣長

國學の四大人



平田篤胤

集を註釋し、ついで荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の國學の四大人が現はれた。いづれもわが國の古典を研究し、國體の尊嚴や國民精神を明らかにした。殊に眞淵は國意考を、宣長は古事記傳を著はし、篤胤は古神道を

主張し、尊王愛國の思想を鼓吹した。

⑤ 尊王論の普及　かくて尊王の大義と國體の尊嚴とは、國民の間に浸潤し、憂國の士は諸所に奮起し、遂に尊王論は社會の輿論となつた。寛政の頃高山彦九郎、蒲生君平の二人はあまねく諸國をめぐつて、しきりに尊王論を唱へた。ついで頼山陽は日本外史、日本政記を著はして熱

尊王論遂に輿論となる
高山彦九郎
蒲生君平
頼山陽

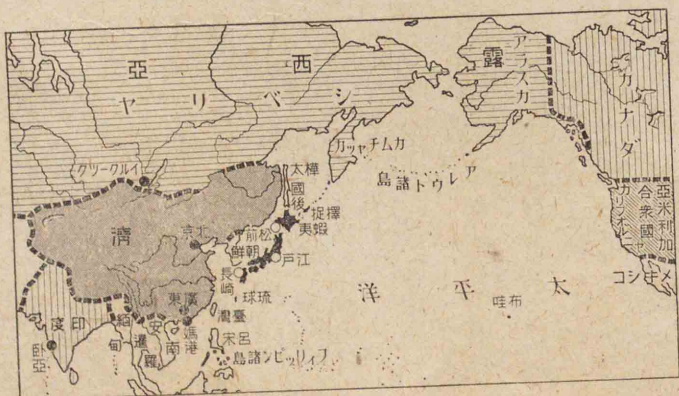


頼山陽の筆蹟

烈な文章を以て尊王愛國の精神を鼓吹し、人心を感動せしめるところが多かつた。

第九章 幕末の外交 洋學の發達

● 海外の形勢　わが國が鎖國に安んじてゐる間に、海外の形勢は著しく變化し、嘗て東洋貿易に勢を振つてゐたイスパニヤ・ポルトガル・オランダの三國は既に衰へ、これに代つてイギリス・ロシア兩國は次第に極東に迫り、アメリカ合衆國も新興の勢を以て太平洋方面に發展し來たり、いづれも虎視眈々たる有様であつたから、寛政の頃、わ



太平洋洋圖

イスパニヤ・ポルトガル・オランダの衰微
イギリス・ロシア・アメリカ合衆國の極東進出

林子平の歌
「親もなく妻なく子なく版木なしかねもなければ死にたくもなし」

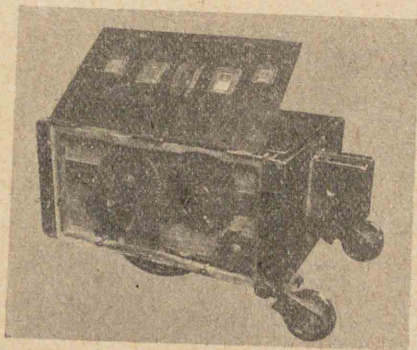
林子平、海防を唱ふ

ロシアの使節来る

松平定信の巡視

近藤重藏の蝦夷地探検

忠敬使用の距離測定機である



伊能忠敬の測量機

が邊境はやうやく多事となつた。林子平(仙臺)は夙にこれを憂へ、三國通覽海國兵談を著はして海防の必要を論じたが、却つて世を騒がすものとして罰せられた。

蝦夷地の警備

然るに寛政四年(二)

二五の秋、ロシアの使節が根室に来て通商を請ふに及び、幕府は急に海防の必要を覺り、松平定信をして關東諸國の海岸を巡視せしめ、諸藩に命じて海防を厳しくさせた。更に幕府は北邊の警備の急を知り、近藤重藏をしてしばしば蝦夷地を探検せしめた。重藏は擇捉島に渡つて、大日本惠登呂府と大書した國標

海國兵談第一卷
水鏡
仙臺 林子平述
露國の武備、海邊より海邊に兵隊々水鏡より水鏡の幸々大鏡より海國自らの兵制也故に其留ノ以て開卷第一卷と奉ル事深意の存也尋常の兵書と同日の義より知べし
海平久し時々人心危んん時、此等志

東蝦夷地を直轄とす

ロシアの使節再び来る

ロシア人の北邊入寇

全蝦夷地を直轄とす

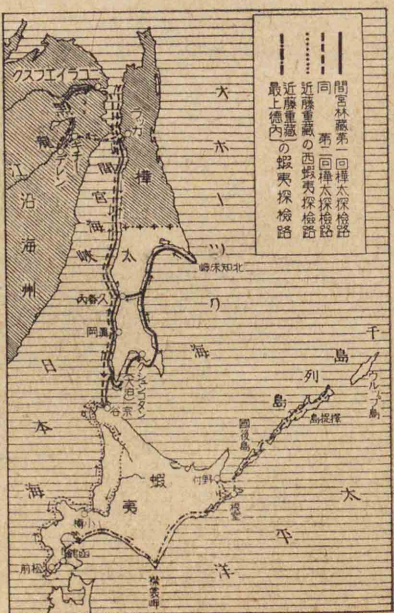
間宮林藏の探検

を建てて歸つた(二四、五八)また伊能忠敬は幕命により蝦夷地及びその他の地方を實測して、精密なる地圖をつくつた。なほ幕府は東蝦夷地を收めて直轄地とし、函館に奉行を置いて蝦夷地の警備に當らしめた。



間宮林藏

かゝる間に、ロシアは頻りにわが北邊を侵した。そこで幕府は遂に全蝦夷地を直轄し、松前奉行を置いてこれに備へ、更に間宮林藏をして樺太を探検せしめたが、林藏は沿海州地方をも



蝦夷・樺太地圖

英船の暴行

踏査して歸つた。

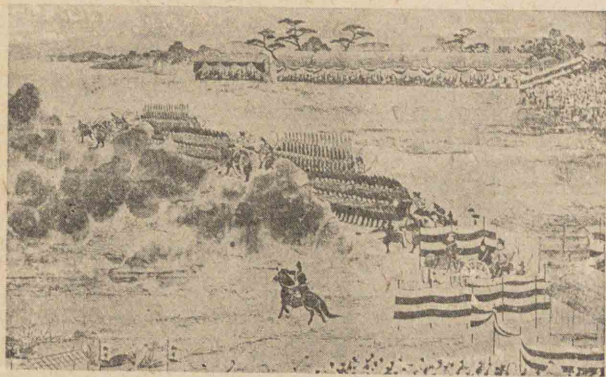
③ 外國船擊攘令 北門の警報が頻りに至つた時に當り、更にイギリス船が長崎に來つて港内を騒がし(文化五年、二四六八)、その後もイギリス船がた

外國船擊攘令を發す

びくわが近海に出沒して暴行を恣にしたので、攘夷の論がやうやく起り、仁孝天皇の文政八年(二四、二五)、幕府は遂に外國船擊攘令を出すに至つた。

幕府の海防

天保十二年五月九日徳丸原に於ける新式練兵の有様である
諸藩の海防



高島四郎太郎武蔵野練兵の圖

④ 攘夷海防論 この後幕府は高島四郎太

夫・江川太郎左衛門等に西洋の兵學を研究せしめ、或は大砲を鑄させるなど、専ら意を海防に注ぎ、軍備の充實に力をつくした。諸藩もこれに倣ひ、殊に水戸の徳川齊昭、佐賀の鍋島直正、薩摩の島津齊彬は共に軍備

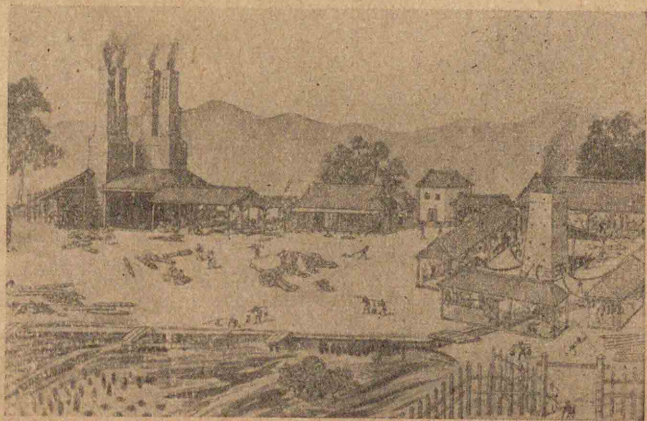
圖は佐賀藩の反射爐で嘉永五年に竣工した。これが實際に且つ大規模に設備された最初のものである

洋書輸入の禁を弛む

を嚴にして、海防に力をつくした。

⑤ 洋學の發達と開港論 しかし外國船

擊攘令は世界の太勢に逆行するもので、到底永く續けられるものではなかつた。さきに新井白石は蘭人等に就き、西洋の形勢を聞き、西洋紀聞采覽異言を著はし、將軍吉宗は洋書輸入の禁を弛め、青木文藏をして蘭語を學ばしめた。こゝに洋學研究の端緒が開け、前野良澤、杉田玄白は西洋の醫學書を譯して解體新書を著はし、大槻玄澤は蘭學階梯を著はして初學者に便を與へた。これから西洋の學問に志すものはいよいよ多く、これらの洋學者の中には海外の事情に通じ、鎖國を不利とし、開港



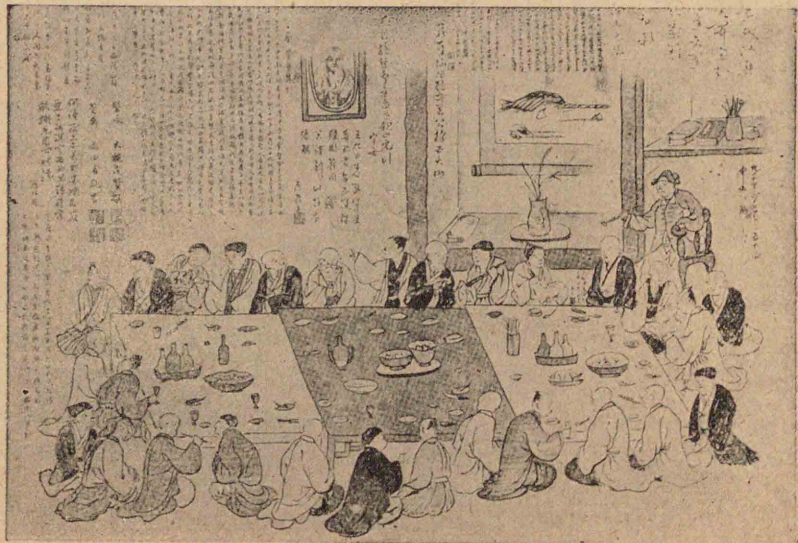
反射爐

解體新書
洋書翻譯の初めでその著述には頗る苦心したといふ

擊攘令の緩和

寛政六年十一月十一日、大槻玄澤の家塾芝蘭堂に當時の洋學者が集會してゐる圖である

論を説くものも少くなかつた。渡邊崋山・高野長英は書を著はして擊攘令の時勢に適せざることゝを説いて幕府に罪せられた。然るに幕府も後にはその非を悟つて、天保十三年(三三)遂に擊攘令を緩和した。これより攘夷・開港の論は一層喧しくなつた。
⑤ 米國使節の來朝 弘化元年(五二)オランダは特使を遣はして、海外の形勢を説き、開港を勧めたが、幕府は祖法を固守してこれを拒絶した。然るに嘉永六年(二五)に

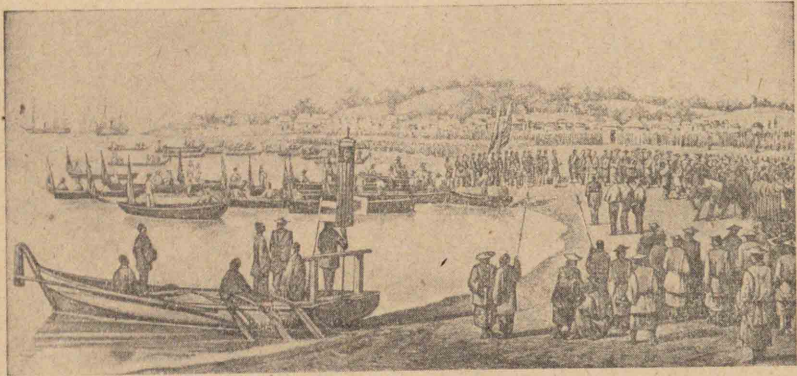


洋學者の集會

アメリカ合衆國は當時既に支那との通商を開き、その途中寄港するところを必要としたので、ペリーがわが國に來朝するに至つたのである

久里濱の會見

嘉永六年六月九日、ペリー以下三百人が十五隻のボートに分乗して上陸する有様で、遂に彼等が乗船して來たミシシッピ號とサクスハナ號とが見える



ペリー一行の久里濱上陸

至り、アメリカ合衆國の使節ペリー(水師提督)は、船艦四隻を率ゐて相模の浦賀に來り、國書をもたらして通商を求めた。幕府は浦賀奉行をして久里濱に會見させ、通商の諾否は明年回答することを約して歸らせた。またロシヤの使節プチャチンも長崎に來て、通商を求めたが、幕府は回答を延期して去らせた。

和親條約の締結

ペリーが去つてから、幕府はまづこれを朝廷に奏上し、ついで



ペリー

開港の可否定まらず

幕府の國政專斷の慣例破る

和親條約の締結

ハリス通商を求む

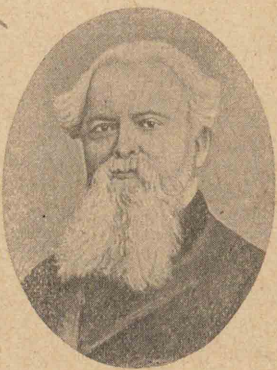
諸大名に開港の可否を諮つたが、議論がまちまちで何等決するところがなかつた。かくて世論はいよゝ騒がしくなり、幕府の國政を專斷する慣例も全く破れ、その威權は俄かに衰へた。翌安政元年(二五)ペリーは約の如く神奈川沖に來り、盛に回答を迫つたので、幕府は止むなくこれと和親條約を結び、下田・函館の二港を開くこと、薪水食料を給することなどを約した。これを神奈川條約といふ。ついでイギリス・ロシア・オランダ三國ともほゞ同様の條約を結んだ。

⑧ 通商條約の調印 安政三年(二六)に至り、アメリカ總領事ハリスは下田に着任し、ついで

約條

右の條日本亞細亞列島兩國の全權調印せしむる也
嘉永七年二月三日
日本亞細亞列島兩國の全權調印せしむる也
嘉永七年二月三日
第一條 日本亞細亞列島兩國の全權調印せしむる也
嘉永七年二月三日

部一の文邦の約條親和だん結と國衆合カリメア



通商條約を結ばんことを請うた。老中堀田正睦は開國の止むべからざるを覺り、ハリスと通商條約の案を定め、これが勅許を仰いだ。されどこの頃は攘夷・開國の論が

對立して國論が一定してゐなかつたので、お許しがなかつた。やがて正睦に代つて井伊直弼が

大老となり、難局に當ることになつたが、直弼は内外の形勢を察し、遂に安政五年(二六)の六月、勅許を待たずして調印を行ひ、下田・函館・神奈川・兵庫・長崎・新潟の諸港を開き、治外法權を認め、更に輸出入品に對する税則をも定めた。これを安政の假條約といふ。ついでオ



弼直伊井

安政假條約

井伊直弼大老となる

ランダ・ロシヤ・イギリス・フランスの諸國とも同様の條約を結んだ。かくて幕府の鎖國の方針は遂に破れた。

條約の批准 幕府は假條約を實行するに當つて、まづ長崎・函館・神奈川の三港を開いて内外人の互に貿易するを許し、外國奉行を置いて専ら外交の事を司らせた。ついで外國奉行新見正興等が幕府の使節としてアメリカ合衆國に赴き、條約の批准交換を了へ、その後慶應元年(二二)に至つて條約はやうやく勅許せられた。

第十章 大政奉還

安政の大獄 尊王論が大いに普及した時に當り、井伊直弼が勅許を待たないで通



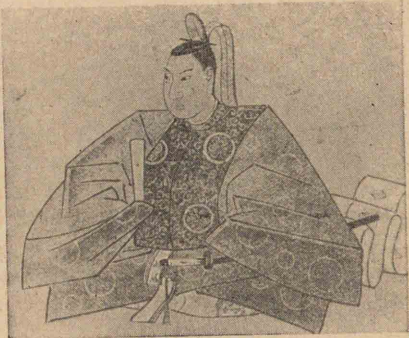
開港當時の横濱

開港當時の横濱の賑ひで、異人(西洋人)の姿も見える。左角は三井呉服店である。

條約の勅許

違勅問題

繼嗣問題



徳川家茂

商條約に調印したことは、いたく尊王論者を激昂せしめ、攘夷論者もこれと結んで、盛に幕府を攻撃するやうになつた。この頃將軍家定に子がなく、その繼嗣問題がやかましかつたが、直弼は輿望を退けて幼少なる家茂を紀伊家より迎へたので、直弼に對する非難はますます募つた。

直弼は幕府の威權を保つために、

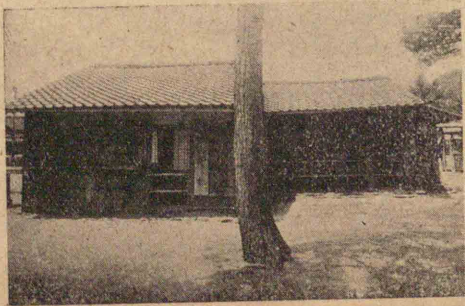
吉田松陰は郷里(今の山口縣萩市)にこの塾を開いて青年子弟を教育し、大いに尊王の精神を鼓吹した。

安政の大獄

櫻田門の變

公武合體

幕府の處置に反對せる大名・公卿以下數十人を罪し、橋本左内・吉田寅次郎(松陰)・頼三樹三郎等の志士を死刑に處し、所謂安政の大獄を起したが、却つて人心の激昂を招き、その身は櫻田門外で殺されてしまつた(二二五)。ついで老中安藤信

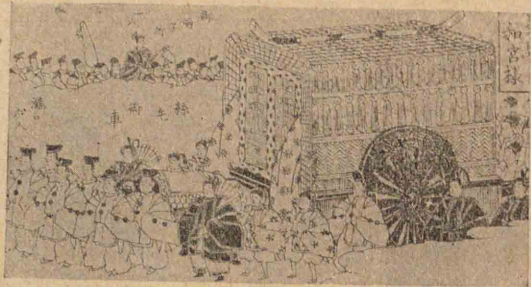


松村下

坂下門の變

京都の形勢

和宮内親王は文久元年十月京都を御出發になり、十一月江戸に御着。圖は御行列の中山道通御の光景



和宮の降嫁

勅使江戸に下る

は公武合體論に傾き、長藩は攘夷論を唱へて、内密には討幕を企ててゐた。朝廷はかねて公武の融和に盡してゐた島津久光に命じ、勅使大原重徳を奉じて江戸に下らせ、幕政の改革と將軍の上洛とを命ぜられた。家茂は勅命を奉じて、諸制を改め、參勤交代の制を弛めるな

勅使再び江戸に下る

家茂上洛

攘夷の實行

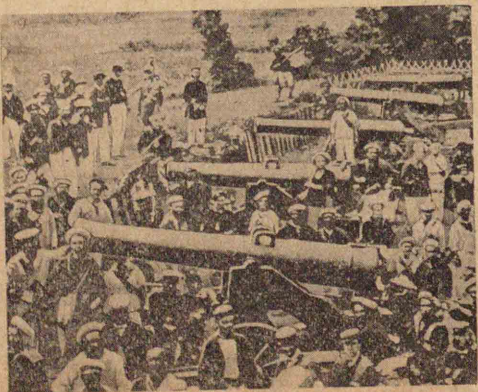
英米佛蘭の四國艦隊の陸戦隊が長州藩の前田砲臺を占領した時の光景
攘夷論者の意氣あがる



三條實美

ど改革するところが多かつた。やがて京都に於ける空氣が長藩を中心とする熱烈な攘夷論に傾いたから、朝廷は更に三條實美等を江戸に下して、攘夷の決行を迫られた(三三五)。文久三年(三三五)家茂は勅によつて

上洛し、五月十日を攘夷決行の期と定め、あまねくこれを諸藩に告げた。期日に至り、長藩は下關に於て外國船を砲撃し、やがて薩藩も鹿兒島に於て英艦と砲火を交へた。
③長州征伐 かくて薩長二藩が外國船を砲撃したとの報が一度天下に傳はるや、攘夷論者は大いに勢を得、攘夷親征を議し、その機に乗じて討幕を企てた。この時京都



下關の戦

朝議の一變
七卿落

長州藩士は實美等の公卿七人を奉じて長州に走つた。これを七卿落といふ。

七卿の一人澤宣嘉の筆による

元治の變

長州征伐



高杉晋作

守護職松平容保は溫和派の公卿等と結んで親征の不可を奏したから、實美等の参内及び長藩の皇宮守衛を停められることとなつた。翌元治元年(三三)長藩士は相率ゐて、藩主や實美等の罪を赦されんことを上奏せんとして入京したが、會津薩摩の兵と衝突し、長州の兵は敗走した。よつて幕府は奏請して長州征伐の軍を起したが、たま／＼長藩は外國の聯合艦隊にも攻められ、非常に困つてゐたので、藩主は降を請うて一旦事は治まつた。然るに長藩士高杉晋作等はこれを喜ばずして、再び兵を擧げたか



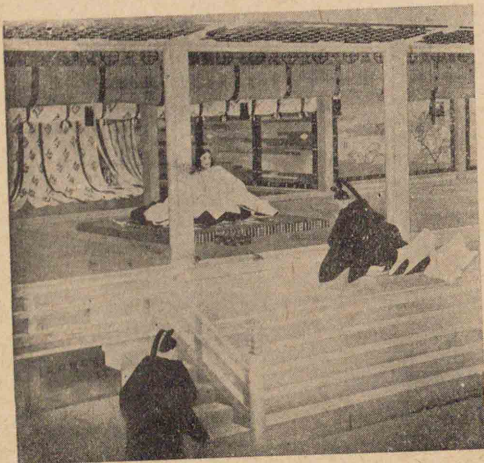
七卿落

長州再征

明治天皇の御踐
祚

内外の多事
幕府の無力

慶應二年十二月二十五日京都皇宮清涼殿小御所に於ける御踐祚の御模様である



御踐祚の圖

ら、幕府は再征の軍を發したが、幕軍は振はず、その無力を暴露してしまつた(三三)。まもなく家茂が薨じ、慶喜が後を嗣いだだが、勅命によつて兵を引上げた。

四 討幕の企と大政奉還

家茂の薨じた年、孝明天皇も崩御遊ばされ、翌年御子明治天皇が御年十六歳で踐祚あらせられた(三五)。これよ

り先諸外國との條約は勅許せられ、國際關係はますます複雑となつたのに、幕府は全く威信を失つて、命令行はれず、これを處理する力がなかつた。よつて諸藩の中には幕府を倒し、朝廷を中心に舉國一致して皇國を振起しようと考へるものもあり、薩州藩士大久保利通、西郷隆盛、長州藩士木戸孝允等

討幕の密勅



岩倉具視

は、三條實美、岩倉具視等の公卿と謀を通じ、ひそかに討幕の議を進め、慶應三年(三七五)十月十四日には討幕の密勅が薩長二藩に下されるに至つた。

早くもこの形勢を憂へたのは、前土佐藩

山内豊信

主山内豊信(堂容)である。

豊信はまづ幕府をして政權を朝廷に奉還せ

しめて、平和の間に事を解決したいと思ひ、家臣後藤象二郎をして説

かしたところ、慶喜も夙に時勢を察して

ゐたから、この勸告を容れ、慶應三年十月十

四日遂に大政の奉還を奏請した。翌日天

皇はこれを許し給うた。かくて頼朝が武

家政治を創めてより六百八十年を経て大

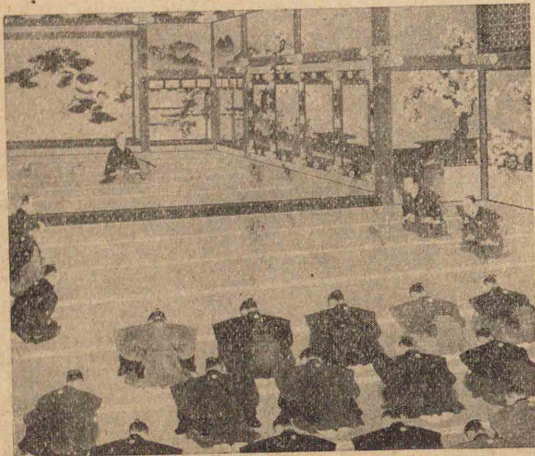
權は再び朝廷に歸するに至つた。



徳川慶喜

大政奉還
江戸幕府亡ぶ

慶應三年十月十日、慶喜が在京有司を京都二條城に召集し、大政奉還の意を告ぐる圖である



大政奉還

鳥羽・伏見の戦

王政復古

こゝに於て朝廷は、公卿諸大名を京都に召され、七朝臣及び長州藩主父子の官位を復してその入京を許された。また同年十二月九日王政復古の大號令を、渙發せられて、諸事神武天皇御創業の始に基づくべき旨を諭し給うた。かくて攝政・關白・征夷大將軍等の諸官職を廢して、新に總裁・議定・參與の三職を置き、大業に功ありし親王・公卿・諸藩士等を登用し、大小の政令は悉く朝廷より出づることとなつた。

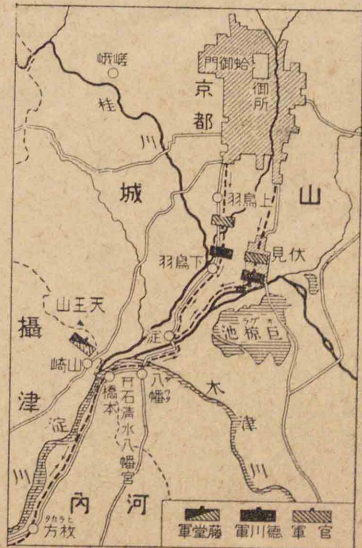
然るに會津・桑名の諸藩及び幕府の舊臣のうちには、慶喜が新政にあづかれないばかりでなく、却つて、官を辭し、領地を返上せよと命ぜられたのを憤り、遂に慶喜を擁して入京せんとし、鳥

江戸の開城

上野の戦

奥羽・函館の戦

羽伏見に於て薩長の兵と戦つた。官軍はこの戦に勝ち、まもなく江戸に進んだが、慶喜は江戸城を開いて深く恭順の意を表したので、大事に至らずして事をさまり、ついで起つた上野の彰義隊も直ちに破られ、奥羽・函館の諸役もやうやくにして鎮まり、全国は悉く一統に歸した(二五九)。



鳥羽・伏見の戦の要地圖

第五篇 現代史

第一章 明治維新

五箇條の御誓文 明治天皇は明治元年(慶應四年)三月諸臣を率ゐて紫宸殿に出でまし、御親ら天神地祇を祭り給ひ、新政の御方針を神前に誓はせられた。これを五箇條の御誓文といふ。

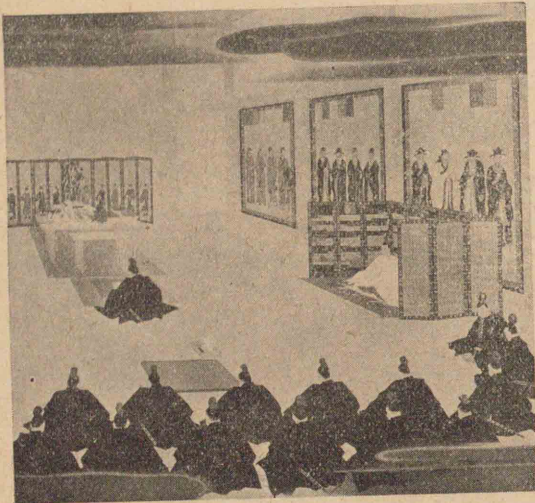
一 廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志

五箇條の御誓文

紫宸殿の正面の神位の前に御誓文を奉讀するのは三條實美、その右側の正面に在すは明治天皇である



天皇神々に五事を誓はせらる

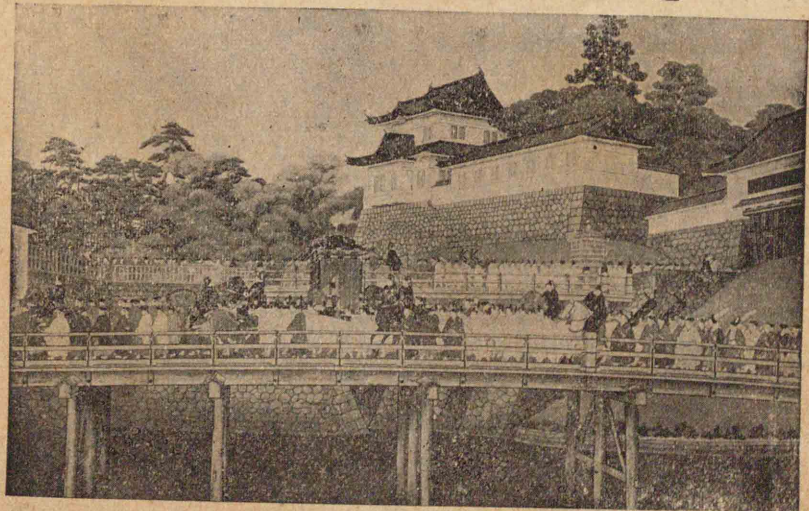
明治元年十月十三日車駕東京城西丸正門に着御の光景

國是の確立

ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシ
 メンコトヲ要ス
 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道
 ニ基クヘシ
 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ
 振起スヘシ

この御誓文によつて明治維新の基礎は確立し、國是が内外に宣明せられたのである。

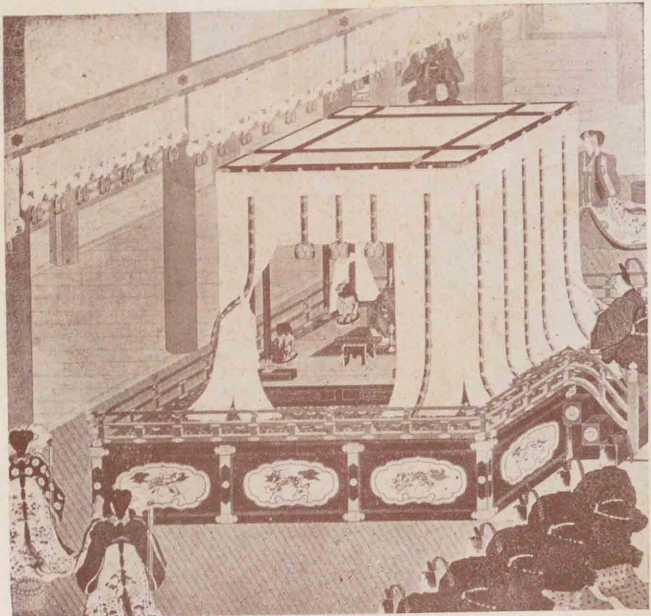
◎ 東京奠都 同年八月天皇は古制に則つて、即位の大禮を紫宸殿に擧げさせられ、更に九月には慶應四年を改めて明治元年とし、一世一元の



明治天皇東京へ行幸の圖

明治天皇の御即位式

明治元年八月二十七日、紫宸殿に於て御即位の大禮を行はせらるる圖。



皇后冊立

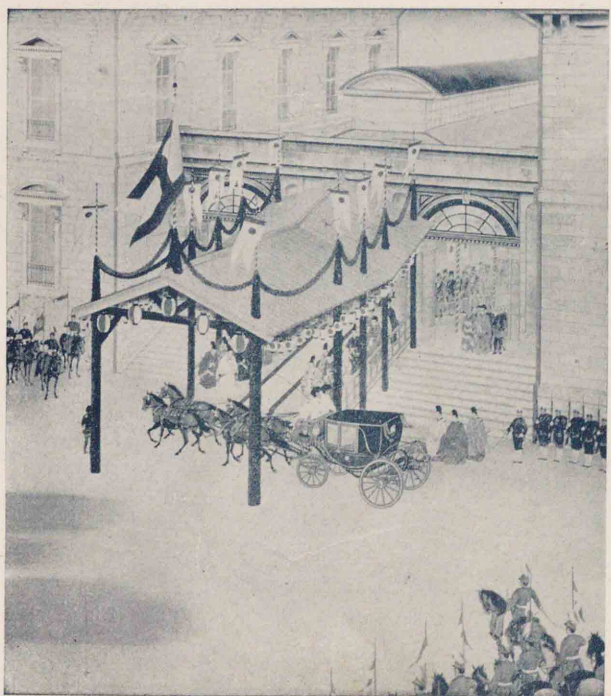
明治元年十二月二十八日、明治天皇は一條忠香の第三女を立てて皇后となし給うた。圖は入内の御車が京都御所に着御の光景である。





農民收穫御覽

明治元年九月、明治天皇御東行の御途、尾張國熱田八丁驛に於て農民收穫の狀を親しく御覽遊ばさるる圖。



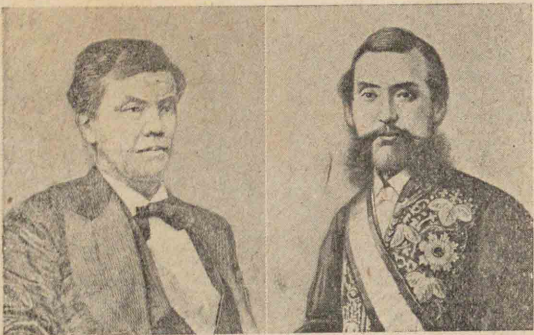
京濱鐵道開業式行幸

明治五年九月十二日、明治天皇が、東京・横濱間鐵道開業式典に親臨のため新橋驛に着御の光景。

江戸を東京と改む

四藩主の上書
「そもく臣ら居るところはすなはち天子の土、臣ら治むるところは、すなはち天子の民なり、いづくんぞ私に有すべけんや」とて版籍奉還を請ひ奉つた

制を定め給うた。また人心を一新するため江戸を東京と改め、十月ここに行幸あり、江戸城を東京城と改めて皇居と定められ、一旦京都に還幸の後、明治二年三月再び東京に行幸遊ばされ、永くこの地に駐り給うて、萬機を親裁せられることとなつた。



木戸孝允

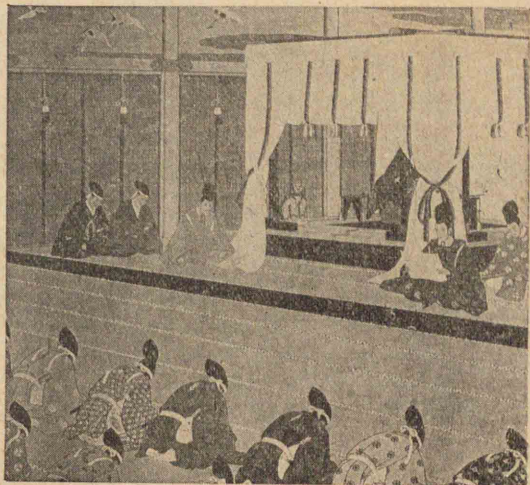
大久保通利

③ 版籍奉還 政府はさきに幕府の領地を收め、府・縣に分けて治めたが、諸大名はもとのやうに土地・人民を領してゐたので、全國一統の政治を行ふことが出来なかつた。しかしまもなく薩・長・土・肥の四藩主が率先して版籍の奉還を奏請し、他の諸藩主もこれに倣つたので、明治二年六月朝廷はこれを許し、舊藩主を知藩事に任じて舊領地を治めさせた。

④ 廢藩置縣 しかしなほ新政を行ふのに不

縣令

明治四年七月十四日、天皇は皇城紫宸殿に在京五十六藩の知事を召し、右大臣三條實美をして廢藩置縣の詔書を宣讀せしめ給ふ圖である



廢藩置縣の詔書宣讀

便が多かつたので、政府は四年七月、遂に藩を廢して縣を置き、新に府知事縣令を任じ、ついでその分合を行ひ、明治二十三年に至つて大體今の制度になつた。かくて封建制度は全く除かれて、維新の大業はこゝに成就した。

- 學制
- 太陽曆
- 徵兵令

民が等しくその御威徳を仰ぐと共に、皇基の振起を基として知識を世界に求め、わが文化を補ふ風は頗る盛となつた。明治五年新に學制を定めて義務教育の大方針が立てられ、太陰曆を廢して太陽曆を用ひ、翌六年には徵兵令が發布せられて國民皆兵の制が定まり、また

社會一新の機運

明治維新の國

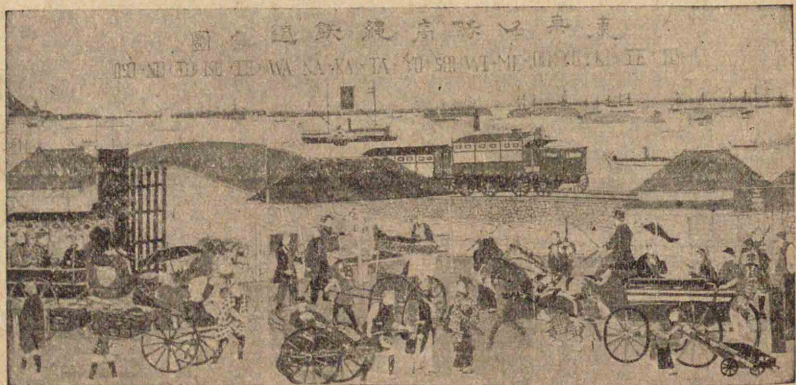
交通の發達
風俗の變遷

明治初年頃高輪附近より品川沖を見たる圖で、汽車・汽船・馬車など當時の交通機關を窺ふことが出来る

この前後に郵便、電信、汽船等もわが國にはじめられ、風俗も改まり、社會の面目は一新した。

第二章 立憲政治の確立
教育に關する勅語

皇基の振起と公論 江戸幕府の政治は、徳川一門と譜代の大名のみ與る獨裁的のものであつたが、明治維新に當り、天皇は五箇條の御誓文を發布し給ひ、皇基を振起し給ふ大御心より、廣く會議を興し、公論を重んじて、臣民にも政治に參與せしめ給ふことを仰せられた。



明治初年の交通機關

民選議院設立の建議

地方官會議

府縣會

國會開設の大詔

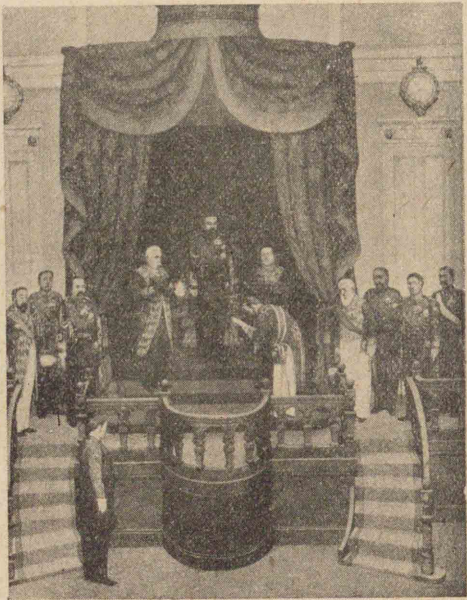
帝國憲法の發布

● 立憲政治の確立 その後西洋文化の受容と共に民権思想がややく弘まるに及び、明治七年、副島種臣、後藤象二郎等は民選議院を設けて天下の公議をつくさんことを建議した。政府はこれを尙早として採用しなかつたが、まづ地方官會議を開いて民情の通達を圖りついで十二年には府縣會を設け、民選の議員をして府縣の政治に與らしめた。その間に國民の政治思想も進み、國會の開設を政府に願ふものも多くなつた。天皇は十四年に詔を下して、來る二十三年を期して國會を開くべきことを宣せられ、伊藤博文をして憲法の起草に當らしめられた。十八年には官制の改革があり、内閣制度が確立し、二十一年には樞密院スウミツインが設けられた。全國に市町村制の公布せられたのもこの年である。

かくて明治二十二年紀元節の佳辰に大日本帝國憲法を發布し、皇室典範を制定せられた。この憲法は皇祖皇宗の大業とわが國體に

明治二十三年十一月二十九日天皇は貴族院に臨御遊ばされ、議長伊藤博文に勅語を給ふ圖

第一回帝國議會の召集



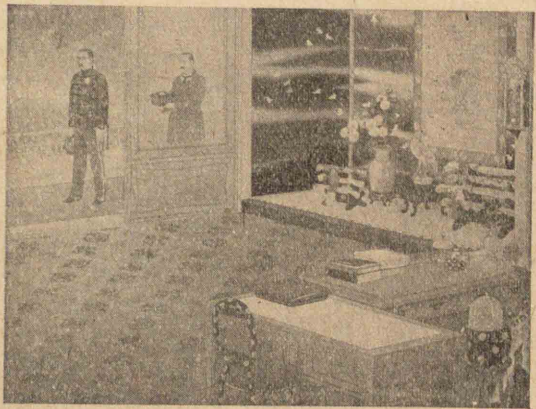
第一回帝國議會開院式

基づき、國家の隆盛と臣民の福慶とを増進せしめんとの大御心から欽定キンテイせられたもので、臣民はこれにより皇政を翼賛し奉ることとなつた。翌二十三年十一月第一回の帝國議會が召集せられ、立憲の政體は全く確立するに至つた。

その後國民の翼賛し奉る道は、時勢の進歩と共に次第に擴張され、昭和三年には普通選舉法が行はれた。

● 教育に関する勅語 明治天皇は憲法を發布し給うて立憲政治を確立せられると共に、教育に関する勅語を御下賜あらせられて、臣民の仕へ奉る大本をお示しになつた。

當時の内閣總理
大臣山縣有朋・
文部大臣芳川顯
正が明治天皇御
座所の廊下に勅
語を捧持する圖



賜下御語勅育教

明治維新以來、わが國は西洋文化を攝取醇化した。これが受容にあたり、やゝもすればわが國古來の道德を輕んずる傾があり、わが國教育の方針が動搖を免れなかつた。天皇は二十三年十月三十日、教育に關する勅語を下し給うて、國民道德の大本を闡明せられた。こゝに於て教育の方針も確立し、國民の向ふところも明らかになつた。

第三章 條約改正

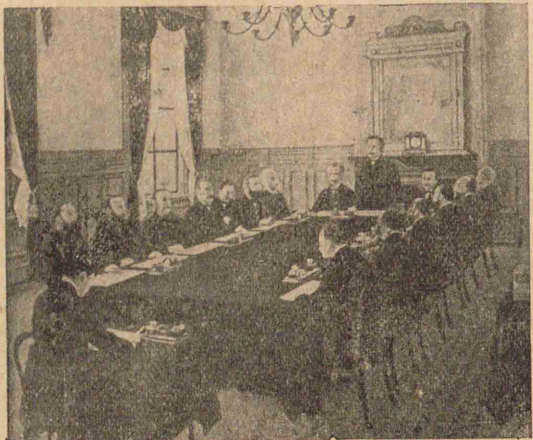
一 外交方針の確立 王政復古と共に、朝廷は世界の氣勢に鑑み、開國進取の外交方針を確立し、明治三年には始めて公使を各國に駐在せ

しめられ、四年には、岩倉具視（轉命全權大使）等を歐米諸國に派遣して、和親を厚くせられた。

二 條約改正 歐米諸國との外交に當つて、政府が最も苦心したのは、江戸幕府が列國と結んだ條約の不平等・屈辱的なることで、法權・稅權

條約改正の希望

外國使臣を外務省に集めて條約改正の會議をする圖で、起立してゐるのは井上馨である

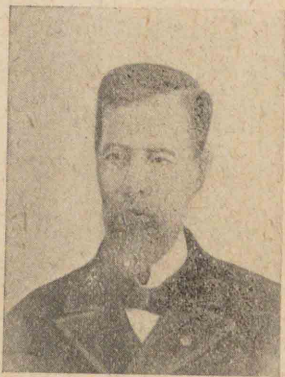


條約改正會議

などわが國に不利な點が多かつた。されば條約改正の議は明治初年から起り、政府も國民も異常の努力を拂ひ、明治時代外交の中心問題であつた。列國との交渉は既に岩倉具視等の歐米派遣の時に始められ、その後、寺島宗則（外務卿）・井上馨（外務卿）・大隈重信等もしばしば列國と議を重ねたが、その進行はとかく意の如くならなかつた。然

列國との交渉

條約改正の成功



陸奥宗光

るにわが國の内治が整ひ、法典も編纂せられ、殊に立憲政治が確立して、わが國の眞價がやうやく列國に認められるに及び、明治二十七年、時の外務大臣陸奥宗光は始めて英國の同意を得て、改正條約を結び、これに倣つて列國とも順次改正條約が結ばれ、三十二年から治外法權が撤廢せられた。後、更に稅權をも回復したから、國民の長い間の希望も達せられ、世界の諸強國と全く對等の地位を占めることとなつた。

第四章 東洋の平和とわが國

●朝鮮との修好 朝鮮との修好は幕末より絶えてゐたので、わが政府は王政復古を告げ、舊好を修めようとしたが、朝鮮はこれに應じないばかりでなく、却つて禮を失ふことがあつた。そこで明治六年西

征韓論

江華島事件

修好條約の締結

郷隆盛等はその罪を責めようとしたが、たま／＼歐米から歸朝した岩倉具視等に反對されたので、その議は遂に止んだ。

その後、明治八年、わが軍艦が朝鮮の江華島附近で、その守兵に砲撃されたから、わが政府は使を遣つてこれを責め、翌九年修好條約を結び、釜山の外に二港を開くことを約した。

●清國との修好 明治四年わが國は清國と修好條約を結び、永く中絶してゐた國交を恢復した。この年琉球の民が臺灣に漂着し、生蕃に虐殺された。そこでわが政府は同國に交渉したが、生蕃を化外の民と稱して應じなかつたから、明治七年臺灣に出兵し、忽ち蕃地の一部を占領した。然るに清國は俄かに異議を唱へたので、談判の結果、清國に償金を出させて、軍を引上げた。

●明治二十七八年戰役 わが國は、さきに朝鮮の獨立を認めて修好條約を結び、兩國の關係は次第に密接となつた。しかし清國はなほ

臺灣征伐

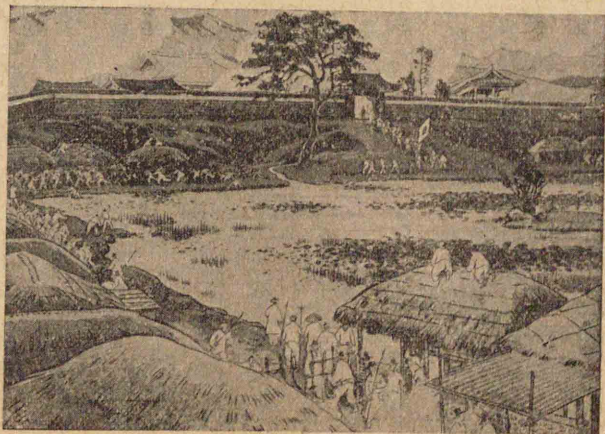
明治十五年暴徒がわが公使館襲撃の圖である

明治十五年の變
明治十七年の變

天津條約

東學黨の亂

朝鮮を屬國と視て、その國政に干涉し、また朝鮮の國民の中にも、われを排斥しようとするものがあり、明治十五年と十七年とに京城に變亂が起つた時、わが公使館は焼かれた。わが國は朝鮮に謝罪させ、また永く禍根を絶つために、特に伊藤博文を天津に遣はし、清國と天津條約を結ばしめた。



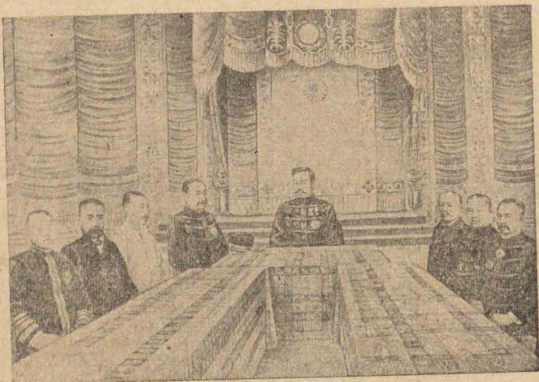
明治十五年の京城の變

その後、明治二十七年に朝鮮に東學黨の亂が起つた時、清國は屬國の難を救ふと稱して出兵し、わが國もまた居留民保護のため兵を出した。東學黨は間もなく離散したが、わが國は東洋平和のため清國と協同して朝鮮の政治を改革しようとした。然るに清國はこれに應ぜず、却つ

宣戰布告

正面は明治天皇、その左へ參謀總長熾仁親王・山縣有朋・西郷從道・樺山資紀、右へ伊藤博文・大山巖・川上操六

北清事變
ロシアの滿洲出兵

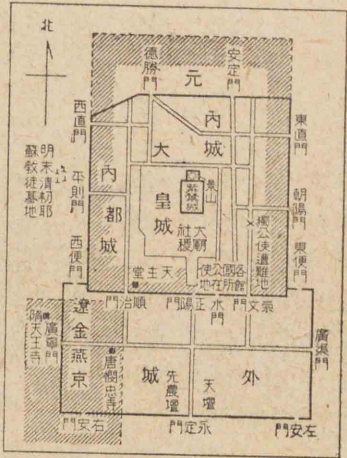


廣島大本營に於ける御前會議

て大兵を朝鮮に出して、われを抑へようとしたので、兩國の國交は遂に破れ、天皇は同年八月宣戰の詔を下し給うた。清國は連戦連敗し、遂に力盡きて和を請うたので、下關條約を結び、清國は朝鮮の獨立を認め、遼東半島及び臺灣澎湖島をわれに讓つた。然るにロシア・ドイツ・フランスの三國は、東洋平和のためと稱して干涉し、遼東半島を清國に還附させた。

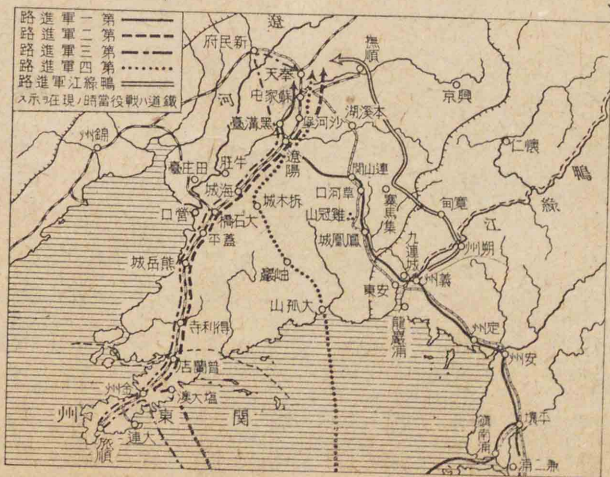
明治三十七八年戰役 日清役後、諸外國は清國の無力に乗じて、これを壓迫したので、清國民の間に義和團の亂が起り、北京の列國公使館を圍んだ(二五〇)。各國は聯合軍を組織してその急を救つた。これを北清事變といふ。ロシアはこの事變を機として大兵を滿洲に出

日英同盟



北京略圖

しなほ進んで韓國をも侵してその獨立を危くする勢を示した。わが國とイギリスとは日英同盟を結んでこれに備へ、相たづさへて



明治三十三年七八年戰役要地圖

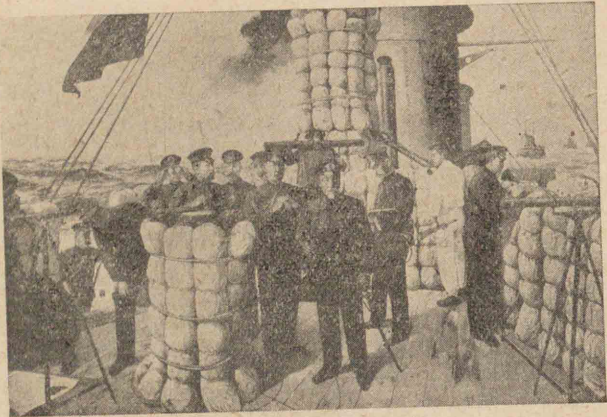
東洋の平和を確保せんとした。ロシアは清國と滿洲撤兵を約したが、その後これを實行しないばかりでなく、却つて海陸の兵を増し、わが國を威壓しようとしたので、三十七年二月、わが國はやむなく國交を絶ち、宣戦した。この役に於て、わが海軍は仁川港

宣戦布告

奉天會戰

日本海々戰

ポーツマス條約



三笠艦の上の東郷司令長官

と旅順港との敵艦隊を破り、旅順口を閉塞して制海の實權を握り、陸軍は敵兵を韓國より追うて滿洲に進み、遼陽、旅順を陥れ、更に翌年三月には奉天を包圍してこれを破り、遠く敵軍を退けた。なほ海軍大將東郷平八郎の率ゐる聯合艦隊は、同年五月日本海に敵のバルチック艦隊を全滅させて大勢を決した。こゝに於てアメリカ合衆國大統領ルーズヴェルトは兩國に和を勧め、九月兩國はポーツマスに於て講和條約を結んだ。これによつてわが國は滿洲(長春以南)の鐵道、炭坑の採掘權、關東州租借權及び樺太の南半を得、また韓國に對する優先權を確保した。

⑤ 韓國併合 わが國は明治三十八年十

韓國を保護國とす

韓國併合



文博藤伊と子世王李

東洋平和の確立

は、遂にわが國に併合され、その人民は文明の惠澤に浴するを得るに至り、東洋の平和も確立されるに至つた。

第五章 文化・經濟の發達

●明治の新文化 明治維新はたゞ政治上の改革のみでなく、社會風教の上にも多くの變化が起つた。然るに上下共に西洋文化に心酔し、やゝもすればわが國固有の文物をも打破しようとする風があつ

東西文化の融合

たが、教育勅語の下賜せられた頃から、やうやく國民的自覺を高め、採長補短の氣運が漲り、こゝに東西文化の融合による新文化が作り出され、前古に比類のない健全な發達を見るに至つた。

●宗教 維新の初め、政府は神祇の崇敬をすゝめ、神佛混淆コンゴウを禁じ、且つ廢佛毀釋ヘイセツの聲が喧しかつたので、佛教は一時衰へたが、後次第に復興した。キリスト教も西洋諸國との交際につれて次第に弘まつた。

●教育・學問の發達 學制が布かれてから、教育は次第に發達したが、教育勅語御下賜と共に、その面目を一新した。小學校から大學まで

教育の普及

野口英世博士は黃熱病の研究によつて世界にその名を轟かした。が、その他の病源體の發見等でも有名である。



野口英世

の官公私立の各種の學校の設備は、年と共に備はり、殊に普通教育は全國に普及した。學術は、初めは西洋の學術知識を研究することが多かつたが、次第に洋風より離れて獨立の研究が行はれ、やうやく歐米の先進國に相伍

するやうになつた。中にも理化學に於ける諸種の發明發見學說には、西洋の諸學者を凌いで、世界的榮譽を得たものも少くない。教育、學術の興隆につれて、新聞、圖書雜誌等の出版は年と共に著しい數に上つた。また精神科學も最近注目され、日本思想についても深遠な研究が期待されてきた。

④文學 明治維新後、文明開化は流行語となり、また政治に興味をも

つもの多く、従つて西洋流の政治小説が愛讀された。明治十八年坪内逍遙は小説神髓を著して新しい文學論を述べ、小説、當世書生氣質を公にした。ついで口語體を用ひて巧みに世態を書く小説が出て、尾崎紅葉、幸田露伴など現はれた。歐米の文學も、坪内逍遙、森鷗外等によつて紹介され、二十年



小説神髓

政治小説

新文學論

歐米文學

國史・國文の研究
俳句
新體詩

頃は條約改正などのためこれらの文學が流行した。しかし、これに對して日本の研究も起り、國史、國文によく注意するやうになつた。

この頃正岡子規は俳句の刷新と日本文學の特質を述べ、明治二十七八年戰役後には女流小説家樋口一葉が出た。新體詩では島崎藤村、土井晚翠が名高く、評論家には高山樗牛が出て日本主義をも唱へた。



正岡子規

⑤美術工藝 繪畫、彫刻は、明治の初期には洋風技術に抑へられて、一般に振はなかつたが、國粹保存の風が高まるにつれて復活し、日本畫では狩野芳崖、橋本雅邦の如き名手が出て、種々の展覽會なども催され、洋畫の長所をも參考して新しい畫風が開かれた。また洋畫には黒田清輝が出て、彫刻には高村光雲が出て、浮彫から立體的に進み、洋風の技術と融和して著しく發達した。その他、建築、染織の術、陶器

日本畫
洋畫
彫刻

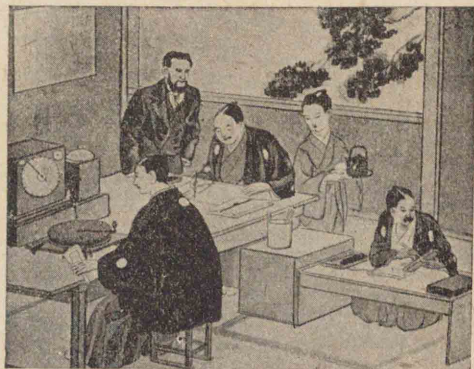
の製作などに至るまで、いづれも洋風を容れて長足の進歩を見るに至つた。

通信機關の發達

交通産業の發達 郵便・電信などの通信機關は、次第に全國に普及し、電話も明治二十三年創設されてから、大いに發達し、次第に無線電信及び電話の機關が設けられ、極めて便利となつた。ラヂオの放送

交通機關の發達

明治二十二年十二月
横濱裁判所内に
於ける電信局の
有様である



明治初年の電信

は社會教育と娛樂とに寄與するところが多い。鐵道も次第に延長せられ、明治三十九年政府は主要な鐵道を國有とし、その他電車や自動車の交通機關の發達につれ、山間僻地にもその便が與へられるやうになつた。海運は明治八年に政府が援助して三菱會社に上海航路を開かせ、後には日本郵船會社大阪商船會社等の大會社等を設

産業の發達

立せしめてより海外各地に通航するに至つた。また航空機もやうやく發展の機運に向つた。

明治維新後、庶民が自由に商工業に従事するやうになつたが、政府の保護奨励、學問教育の進歩、交通機關の擴張に伴つて、農業、工業、鑛業、水産業など皆それ〴〵勃興し、殊に關稅の改正があつてからは、頓に活氣を帯びるやうになつた。農業は穀物の品質の改良や産額の増加が著しく、工業は西洋の近代的産業に倣つて競ひ起り、造船、紡織、製紙、製糖などの大工業が發達し、鑛業では石炭、銅等の採掘が盛に行はれ、水産業では遠洋漁業が進歩した。商業は貨幣制度の確立、金融機關の整備に伴つて次第に盛になり、わが貿易額の増加は目ざましくなつた。

第六章 わが國の世界的地位 國民の覺悟

大正天皇

●明治天皇の崩御 大正天皇の御即位 明治天皇は明治四十五年(七)圖らずも御病にかゝらせられ、國民上下舉つて御平癒をお祈り申上げた甲斐もなく、遂に崩御あらせられた。

御子大正天皇は直ちに踐祚あらせられ、大正四年には即位の大禮を挙げ給うた。天皇は明治天皇の御遺業を繼がせられ、内は憲政を進め給ふと共に、外はいよゝゝ帝國の威信を發揚して、わが國の地位を世界的に高めさせられた。



膠州灣地領占島群ナヤリマ

●世界大戦 大正三年の夏、ドイツはオーストリアと共に、ロシア・フランス・イギリスに對して開戦した。この時ドイツは支那(中華)の膠州灣を根據とし、東洋の海上をおびやかしたので、わが國は日英同盟の誼を重んじてこ

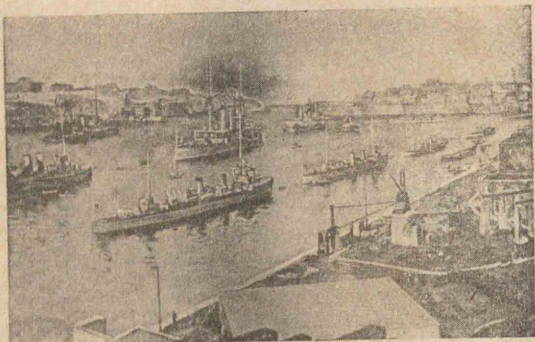
膠州灣占領

ドイツ領諸島占領

地中海に於ける活動

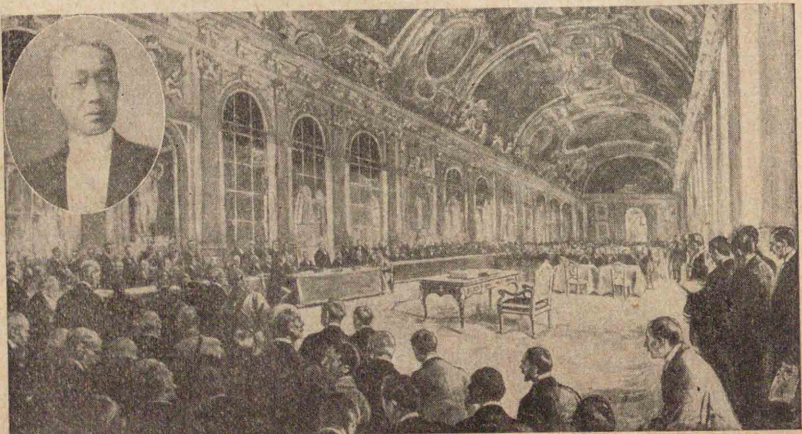
大正八年六月ウ
エルサイユ宮殿
「鏡の間」に於ける
調印式の光景
シベリヤ出兵

れを攻め、遂にこれを占領した。なほわが海軍の一部は、イギリス海軍と呼應して太平洋のドイツ領の諸島を占領し、東洋に於けるドイツの勢力を一掃した。



地中海タルマ島のわが海軍根據地

その後わが海軍は遠く地中海方面にも出動し、なほ陸軍も露領シベリヤに出兵してアメリカ合衆國と共同作戰に當つた。かくて大正七年十一月



ヴェルサイユ講和條約調印の光景と西園寺公使

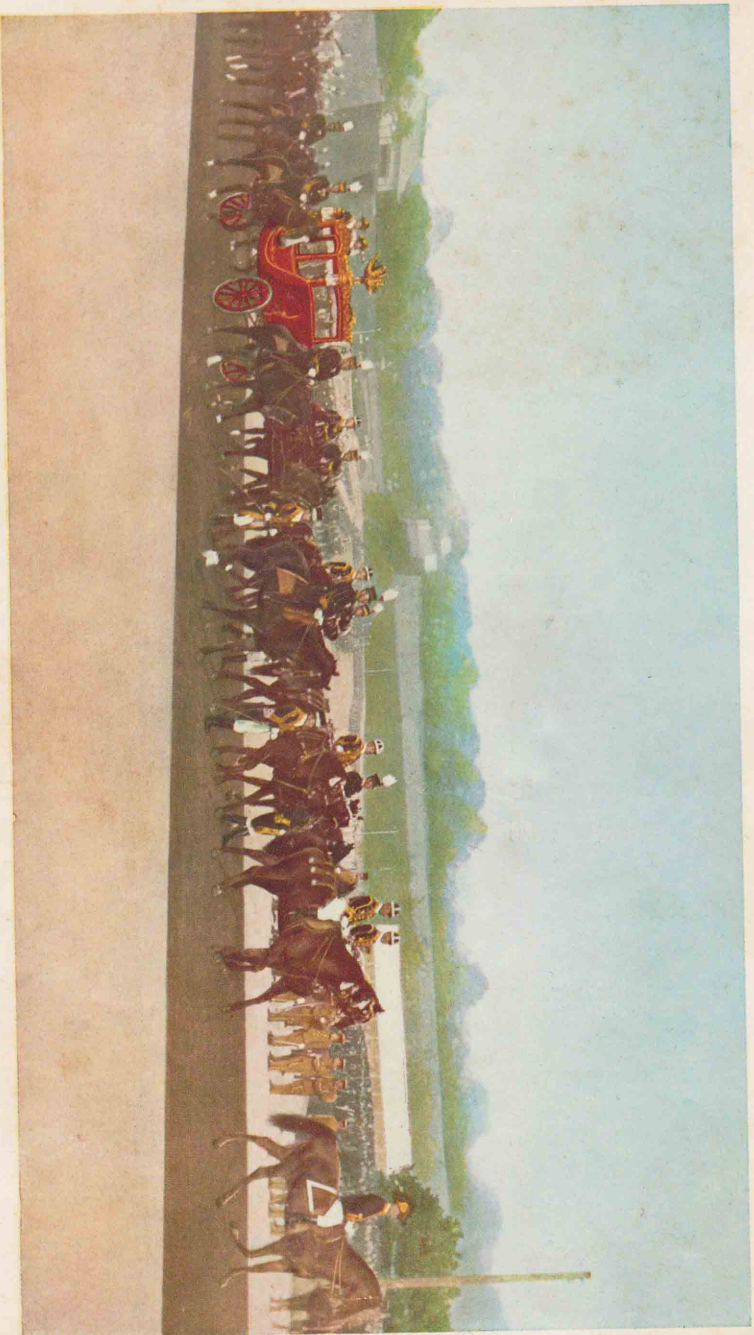
講和會議

國際聯盟の成立

ドイツ及びその同盟國は、力盡きて遂に聯合國に和を請うた。列國はパリで講和會議を開き、わが國は西園寺公望等を派遣した。翌年(六)列國はドイツとの講和條約に調印したが、わが國は(一)膠州灣及び山東省に於ける利權を得、(二)赤道以北の舊ドイツ領南洋群島の委任統治權を得た。またこの條約には國際聯盟が規約され、互に協調して世界の平和を圖ることとなつた。

⑤ワシントン會議 世界大戰の後も、列強が競つて製艦に力を傾けたので、アメリカ合衆國大統領の提議によつて、列國全權は大正十年ワシントンに集り、軍備縮小會議を開いた。わが國からは加藤友三郎、徳川家達等を派遣し、翌年二月に互つて協議を重ねた。その結果わが國は主力艦に於てイギリス、アメリカ合衆國の六割を保つこととなり、なほ外に四箇國條約や九箇國條約を結んで、太平洋上の領土及び支那の保全を約し、日英同盟はこゝに廢棄せられた。この時ま

四箇國條約
九箇國條約



下陸皇天の葬發御城宮

皇太子の攝政
大正天皇の崩御

右二人目より松
平全權・マクド
ナルド英國首
相・若槻全權・財
部全權



ロンドン會議

た別にわが國は支那に膠州灣の返還を約した。

④ 今上天皇の御即位 今上天皇はまだ皇太子の御時、イギリス・フランス・ベルギー・オランダ・イタリアの諸外國を御巡遊あらせられ、御歸朝の後、攝政の大任に當られたが、同十五年十二月大正天皇が崩御遊

ばされたので、直ちに踐祚せられて、昭和と改元し、同三年十一月京都で御即位の大禮を擧げさせられた。

⑤ 外交上の形勢 世界大戰後、世界の耳目は太平洋に集り、わが國は列國の注視の的となつた。わが國は明治以來列國と友誼を厚くし、常に平和を保つことを以て任としてゐたので、昭和二年にジュネーヴで海軍軍備縮小會議が開かれた時にも、進んでこれに参加し、つ

中華民國

いで昭和五年にはロンドンに會して、補助艦等に對する協定を遂げた。かくてわが國はいよゝゝ國際的地位を高め、もはやわが國を除いては世界の重要問題を解決することが出来なくなつた。

●極東の形勢 支那は中華民國が成立してから、内亂に次ぐに内亂を以てし、殆ど無政府の状態である。この國情の不安に乗じ、列國は互にその勢力を扶植せんとした。たまたま支那の無暴な排日抗日、

滿洲事變

毎日の氣勢はやうやく高まり、遂にわが生命線たる滿洲に於けるわが權益を侵したので、こゝに滿洲事變が起つた。滿洲事變はひいて上海事變となり、世界外交上の大問題となつたが、かねてより支那の虐政に惱んでゐた滿洲と内蒙古の一部と

上海事變

滿洲國の獨立



康 皇帝

は合同して獨立運動を起し、遂に昭和七年三月その目的を達し、滿洲國を建設した。わが國はその獨立を承認してこれを援助したが、國際聯盟は東洋の實狀に暗く、わが主張と相容れず、滿洲國の獨立を認めな

かつたので、昭和八年わが國は遂に聯盟脱退を宣し、なほ世界平和のため盡すこととなつた。その後滿洲國の基礎はやうやく安定し、昭和九年三月帝政を布き、溥儀執政は皇帝の位に即いた。

●國民の覺悟 かくて國際關係はいよゝゝ複雑となり、なほ最近頓に進出したわが商品に對する輸入阻止の企が所々に起り、對外問題は非常に複雑になり、それにイギリス・アメリカ合衆國・ロシア等の東洋問題への關心も強くなつた。且つ昭和九年十二月には斷然ワシントン條約の廢棄を通告したので、軍備問題につき外國の掣肘を受

わが國の聯盟脱退宣言

けぬやうになつた。

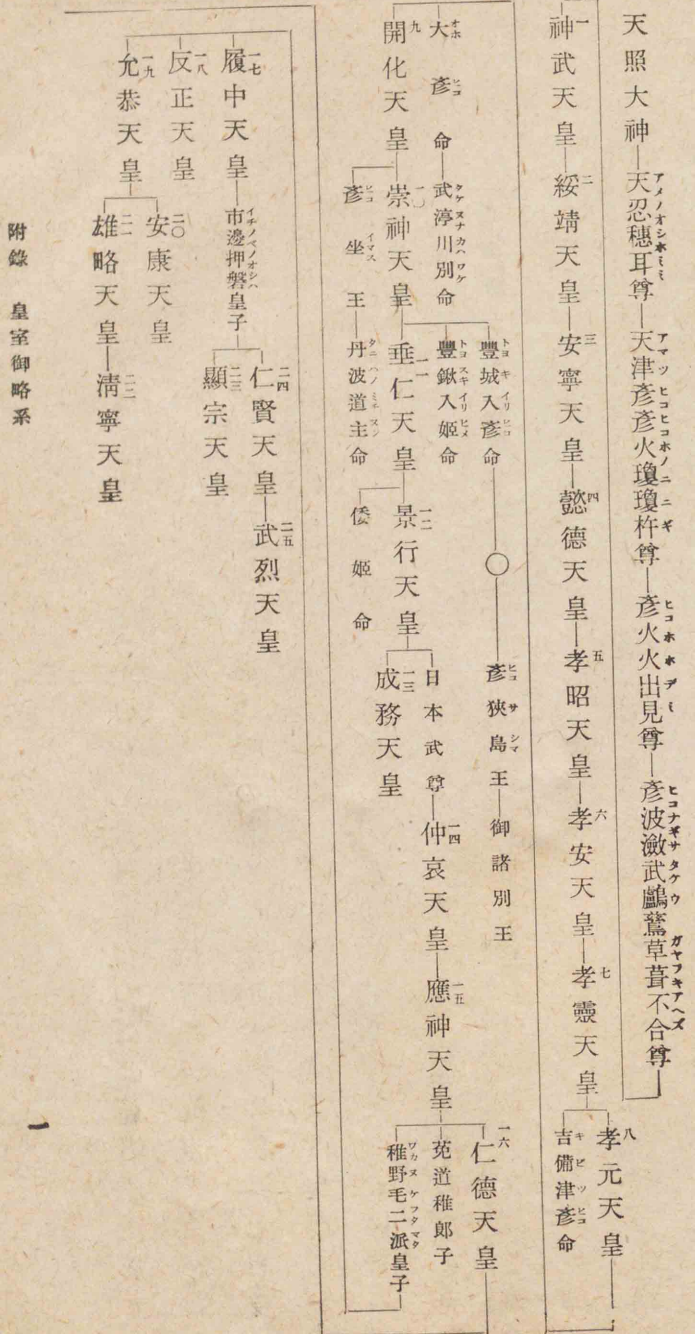
偶昭和十二年七月支那は國民的抗日主義により、蘆溝橋に於て正規兵を以てわが軍を攻撃し、次いで上海に於てわが海軍々人を殺すなどしたので、わが國は東洋平和のために、支那大陸に出兵し、日支の關係は緊張の極に達してゐる。加ふるに、歐米の諸國は自己の利害關係より、東洋問題に注目し、今やわが國は、軍事に外交に未曾有の難局に直面してゐる。わが國民は宜しく光輝ある國史の成跡と帝國の使命とに鑑み、常に國體觀念を明徴にし、堅固なる精神を以て幾多困難を打破しなければならぬ。

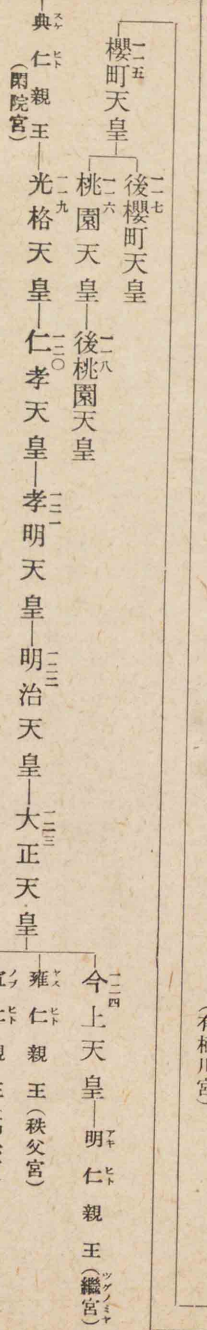
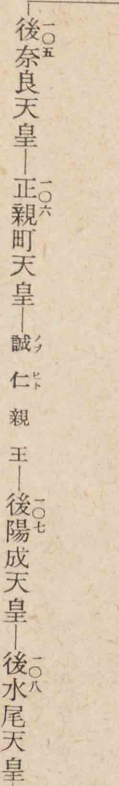
特に實業に従事するものは、各自の産業を勵み、國民全般の生活と富とを向上發展せしめ、更に國家的活動の資源を豊富ならしむると共に、列國とはます／＼經濟的、文化的交渉を緊密にして、その指導的地位に立つことを心懸けねばならぬ。

(をばり)

(附録)

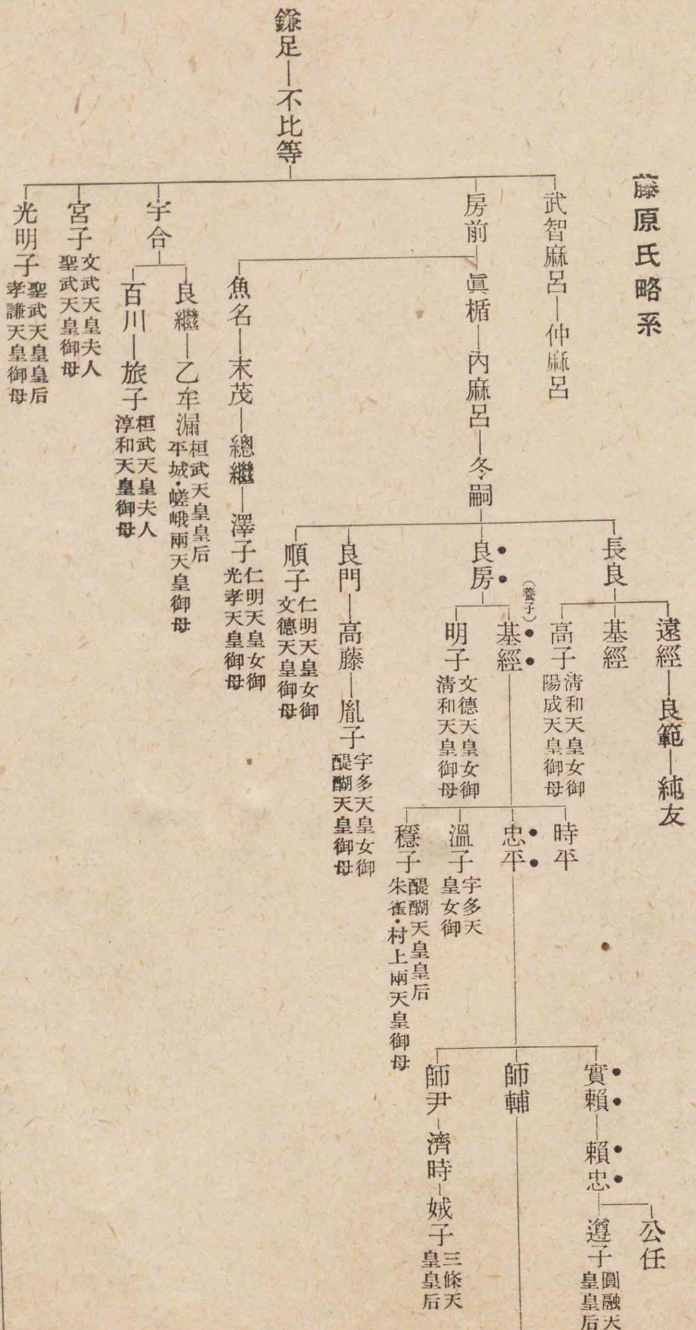
皇室御略系



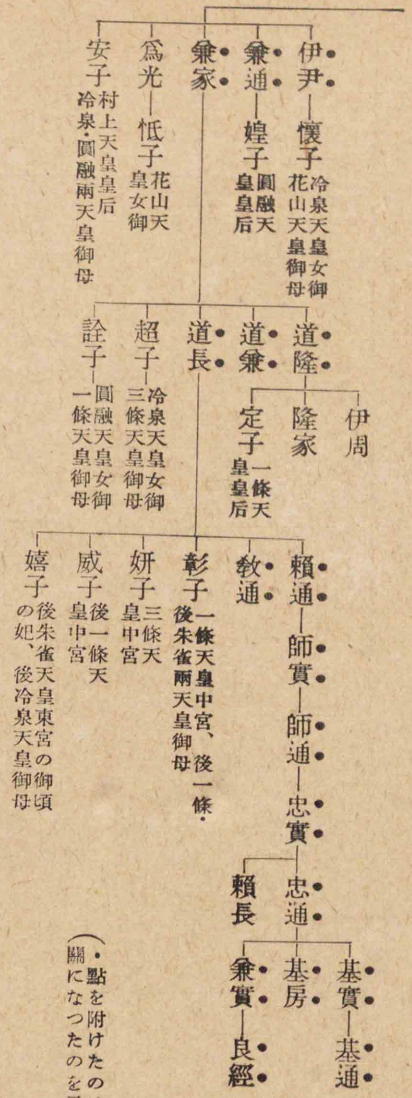


諸氏略系

藤原氏略系



錄足 不比等



(・點を附けたのは攝關になつたのを示す)

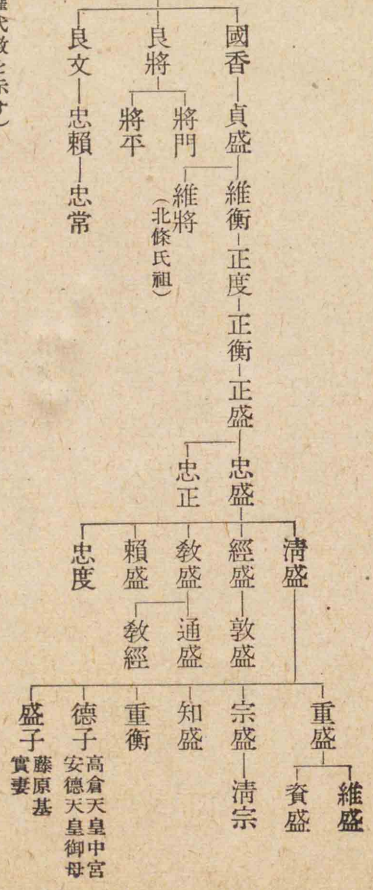
源氏略系

清和天皇—貞純親王—源經基—滿仲

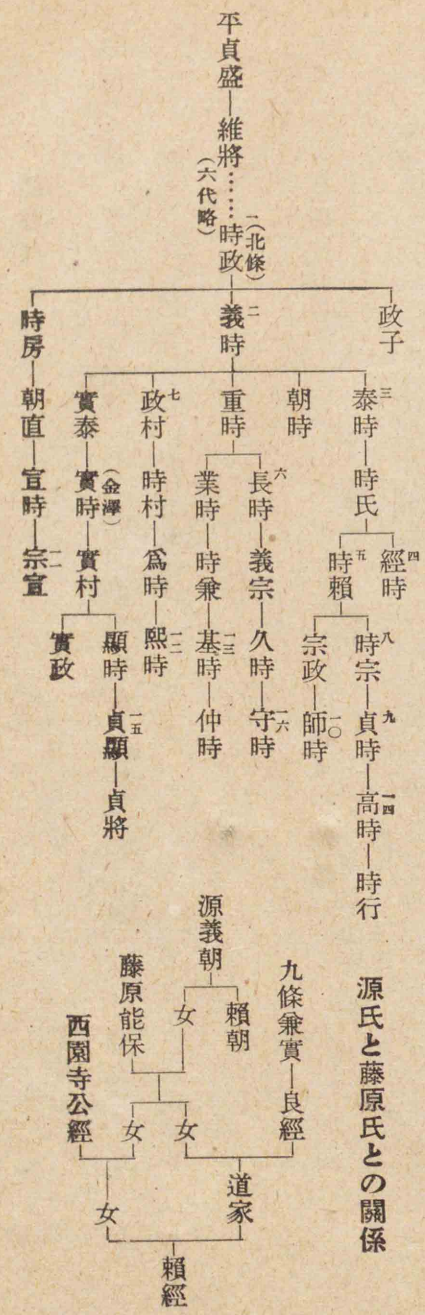
平氏略系

桓武天皇—葛原親王—高見王—平高望

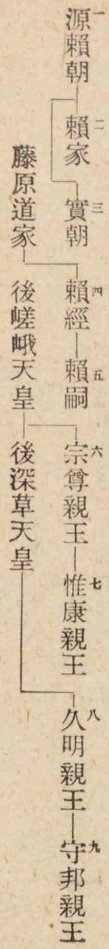
北條氏略系 (數字は執權代數を示す)



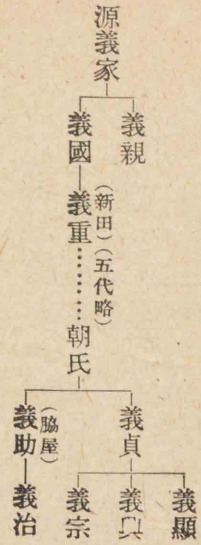
源氏と藤原氏との關係



鎌倉將軍略系



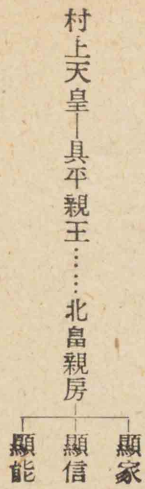
新田氏略系



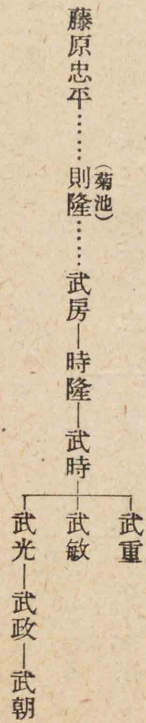
楠木氏略系



北畠氏略系

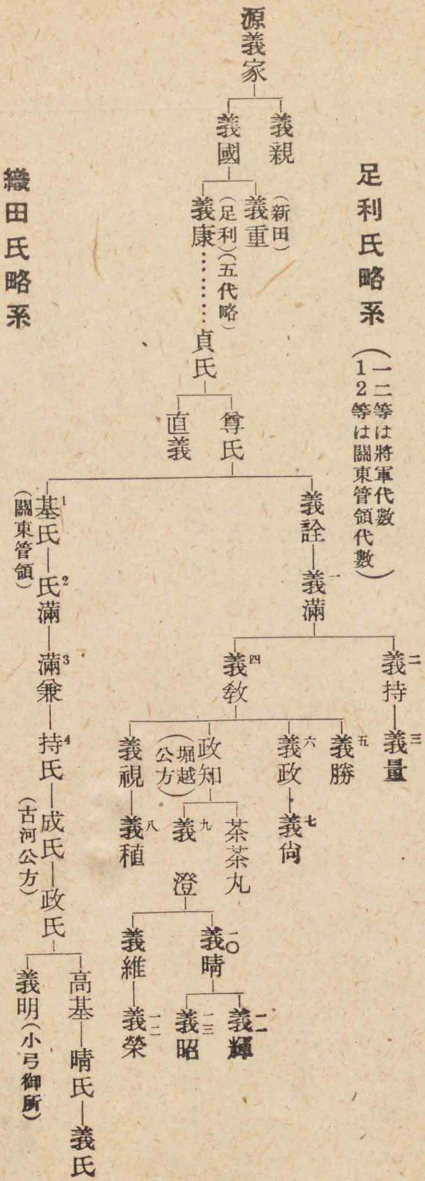


菊池氏略系



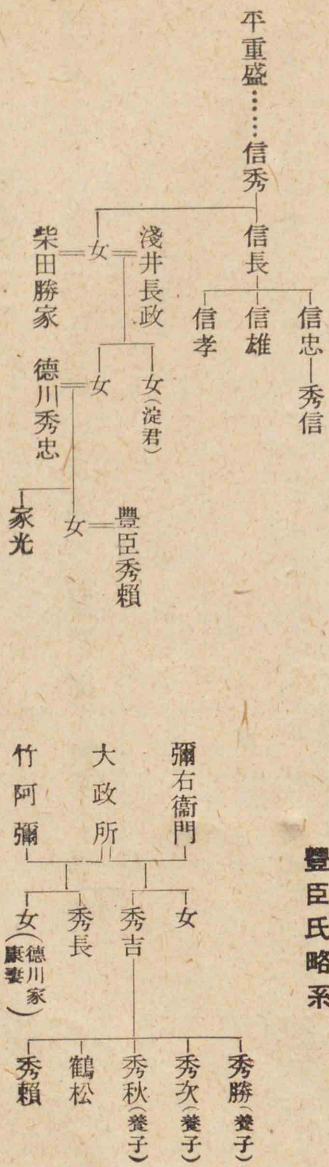
足利氏略系

(一二等は將軍代數 12等は關東管領代數)



織田氏略系

豐臣氏略系



江戸時代						
後西 ¹¹¹	靈元 ¹¹²	東山 ¹¹³	中御門 ¹¹⁴	櫻町 ¹¹⁵	桃園 ¹¹⁶	後櫻町 ¹¹⁷
寛文元	延寶八	貞享四	元祿三	寶永六	享保元	正徳三
同二	同三	同四	同五	同六	同七	同八
二二二	二二四	二二五	二二六	二二七	二二八	二二九
清、支那を統一す	松平信綱・酒井忠勝歿す	家綱薨じ綱吉將軍となる	生類憐れみを出す	綱吉聖堂を湯島に興す	貨幣を改鑄して質を悪くす	赤穂義士の復讐
		家宣將軍となる	家繼將軍となる	吉宗將軍となる	洋書輸入の禁を弛む	養生所を設けて貧者に施療
					足高の制を定む	田安家起る
					一橋家起る	吉宗退隱家重將軍となる
					竹内式部罪せらるる	清水家起る
					家治將軍となる	山縣大貳・藤井右門ら罪せらるる

江戸時代						
後桃園 ¹¹⁸	光格 ¹¹⁹	仁孝 ¹²⁰	孝明 ¹²¹			
安永元	天明三	天明七	天明八	同	同	同
同二	同三	同四	同五	同六	同七	同八
二四三	二四四	二四五	二四六	二四七	二四八	二四九
田沼意次老中となる	江戸大火	浅間山噴火	諸國饑饉	家齊將軍となる	松平定信老中となる	京都大火皇居炎上
						林子平罪せらるる
						昌平校を造營す
						定信沿岸を巡視
						高山彦九郎自殺
						本居宣長古事記傳を著す
						近藤重藏
						伊能忠敬蝦夷地測量
						露使レサノフ來朝
						露人蝦夷地に寇す
						英艦長崎港に侵入
						間宮林藏の樺太探検
						大鹽平八郎の亂
						家慶將軍となる
						渡邊華山・高野長英罪せらるる
						外國船撃攘令を弛む
						忠邦職を退く
						ペリー及びブチャン來朝
						家定將軍
						米露二國と和親條約を結ぶ
						ハリス來る

江戸時代						
明 ¹²²	江戶時代					
明治元	同二	同三	同四	同五	同六	同七
二五七	二五八	二五九	二六〇	二六一	二六二	二六三
井伊直弼大考となる	米・露以下五國と通商條約を結ぶ	家茂將軍となる	安政の獄	櫻田門の變	和宮御降嫁	坂下門外の變
						生麥事變
						薩藩英艦と戦ふ
						長州征伐
						外艦下關砲撃
						假條約勅許
						天皇崩御
						慶喜將軍となる
						天皇崩御
						慶喜大政を奉還
						鳥羽伏見の戰
						五箇條御誓文
						東京行幸
						薩長土肥四藩版籍奉還奏請
						版籍奉還聽許
						英・佛・獨米に公使を派遣
						廢藩置縣
						清國との修好通商條約成る
						散髮・脱刀令下る
						岩倉大使一行歐米派遣
						京濱間の鐵道成る
						學制頒布
						大陽曆を用ふ
						徴兵令頒分
						岩倉具視ら歸朝
						征韓論成る
						民選議院設立の建白
						佐賀の亂起る
						臺灣征伐
						千島・樺太交換の約成る
						朝鮮と修好條約を結ぶ
						神風連の變
						秋月・萩の亂

明治時代						
明治 ¹²²						
同	同	同	同	同	同	同
二五七	二五八	二五九	二六〇	二六一	二六二	二六三
西南の役	博愛社を設く	萬國郵便聯合に加入	府縣會を開く	米國前大統領グラント來朝す	國會開設の請願	國會設立の詔下る
						板垣退助ら自由黨を組織
						朝鮮京城の變起る
						朝鮮京城の變起る
						天津條約締結
						日本郵船會社設立
						内閣制度を定む
						市制及び町村制公布
						帝國憲法及び皇室典範發布
						府縣制を布く
						教育勅語下賜
						第一回帝國議會開會
						日英通商條約調印
						條約改正に始めて成功
						日清開戰
						下關條約成る
						露佛獨三國干涉
						北清事變
						日英同盟成る
						日露開戰
						日露同盟成る
						日英同盟擴張
						日露の講和
						日佛協約成る
						韓國併合
						日英同盟改訂

昭和時代		大正時代	
今 ¹²⁴		大 ¹²³	
上		正	
同 一三	同 一三	同 一三	明治五
同 一四	同 一四	同 一四	二五二 (清亡び支那共和國起る) ○天皇崩御
同 一五	同 一五	同 一五	二五三 天皇御踐祚 ○大正と改元
同 一六	同 一六	同 一六	二五四 對獨宣戰詔勅下る ○青島占領
同 一七	同 一七	同 一七	二五五 日支條約調印 ○即位の大禮を擧げらる
同 一八	同 一八	同 一八	二五七 シベリヤ出兵
同 一九	同 一九	同 一九	二五九 對獨講和條約成る
同 二〇	同 二〇	同 二〇	二六一 皇太子御外遊 ○ワシントン會議開會
同 二一	同 二一	同 二一	二六三 關東大震災 ○國民精神作興の詔下る
同 二二	同 二二	同 二二	二五六 天皇崩御
同 二三	同 二三	同 二三	二五六 天皇御踐祚 ○昭和と改元
同 二四	同 二四	同 二四	二五七 ジュネーブ軍縮會議開かる
同 二五	同 二五	同 二五	二五八 不戰條約調印 ○陪審法實施 ○即位の大禮を擧げらる
同 二六	同 二六	同 二六	二五九 ロンドン海軍條約調印
同 二七	同 二七	同 二七	二六一 滿洲事變
同 二八	同 二八	同 二八	二五九 上海事變 ○滿洲國獨立 ○滿洲國承認
同 二九	同 二九	同 二九	二六〇 國際聯盟退脱の詔書下る ○皇太子御誕
同 三〇	同 三〇	同 三〇	二六二 (滿洲國帝政實施)
同 三一	同 三一	同 三一	二六四 ロンドン軍縮會議より脱退す
同 三二	同 三二	同 三二	二五九七 支那事變起る

實業綜說皇國史
 低學年用
 (稱略) 松本藤本
 實業史初級
 定價金壹圓四錢



昭和十二年十二月二十七日印
 昭和十二年十二月三十一日發
 昭和十三年三月七日訂正再版發行

刷行 昭和十四年十月十三日修正三版印刷
 發行 昭和十四年十月十七日修正三版發行

著者 松本彦次郎
 著作 藤懸靜也
 發行者 株式會社 東京開成館
 印刷者 東京市京橋區木挽町三丁目十一番地 新井修平
 西部販賣所 大阪市東區北久寶寺町心齋橋筋角 三木佐助
 東部販賣所 東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地 株式會社 林平書店

新井電新堂印刷

發行所

東京市小石川區小日向水道町八十四番地
 「振替貯金口座」東京五參貳貳番

株式會社 東京開成館



廣島市第一工業學堂應田



下
岩
崇
白
年

広島大学図書

2000074176

